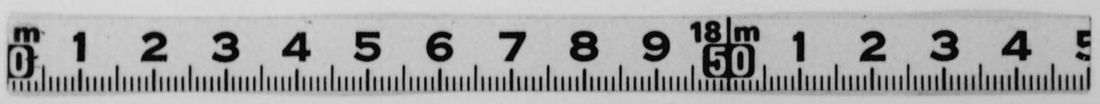
379
17

投



11-30

379-17

法學博士 田中萃二郎校閲
エー、ビー、エム 稲原勝治編著

最近の獨逸 全

納本

外交時報社藏版

大正
8. 12. 4
内交

巻頭に

一　國際關係は勿論、經濟軍事其の他の事項は、今は殆んど外國を除外して獨立に議論することは不可能である。此れ獨逸を論じて勢ひ英米との比較を逸する能はざる所以。

二　統計其の他は歐洲戰亂以來は斷片的且つ不正確なるを發見し、遺憾ながら此れに賴らざることゝした。

三　今は世界的過渡時代に在り。現在と將來を斷案するの頗る困難。吾人は其の及び得べき範圍に於いて最善の努力を試みた。

四　無論五百餘頁の小册子に全獨逸を盛らんことは望んで得べからず。唯最も必要なる事項だけは網羅し得たりと信ずる。

五　獨逸社會民主黨に就きては單に梗概に止め、詳細は第二卷に讓る。兩卷を併せ讀んで始めて大觀は收めらる。

最近の獨逸目次

第一章　緒　言……一

第二章　武斷外交の清算

獨逸外交の根本方針—現代獨逸と過去の獨逸—チユートン騎士とホーヘンツオルレルン—人口一萬の伯林—山出し外交—外交政策の大轉換—フリードリツヒ大王著『普魯西政治の秘訣』—シレシアの奪取—瑞典と露國の戰爭—表裏反覆の外交—同盟條約は破棄し得—墺多利を使嗾す—ライン左岸を約束す—露佛反間苦肉の謀計—鐵血政策—墺多利と波蘭の分割—三國同盟の伏線—伯林會議—伊佛及び露墺を離間す—ビスマークの大芝居—シユレスウイツヒ、ホルシユタイン—露土戰爭—伯林會議—トライチユヶ著『政治學』—ライン河口—英國分割論—『獨逸の奮鬪』—『黃禍』—日露戰爭と獨逸の手—摩洛哥事件—世界大戰……六

第三章　英米との對抗

ビスマークと植民政策—寄附軍艦を競賣す—民主思想の嫌惡—サーベル手段—言論の官臭—熱帶植民地と温帶植民地—國民的プロパガンダ—佛國を懷柔せんとす—『國境新報』の横槍—『英國民は海賊の子孫』—帝國主義の亞米利加……一

—輿論の英國は其の日暮し—專制の獨逸は百年の長計—一八六〇年の東洋探險隊—山東占領の伏線—米西戰爭—南阿戰爭—ボア共和國と結ぶ—小ビスマークの失敗—クルーゲル電報—獨逸の大錯誤—南阿は理想的植民地—獨逸海軍の弱小—假想敵は英米兩國—ゴルッ曰く『英國は我敵にあらず』—『海洋を支配する者世界を支配す』—在來の政策を改むるか……二九

第四章　失敗せる對英策

摩洛哥事件の緊張—『英國の我利的政策』—大陸の覇王は英に向ふ—シーザーとナポレオン—穀類九割と肉類五割を外國に—獨逸と南阿共和國—英獨の一時的接近—一八九〇年英獨協約—獨の膠州獲得を援助す—一九〇〇年英獨山東協約—英國政治家の不覺—ビスマークの親英政策—ウィルヘルム二世の失敗—貴族外交官の無能—植民地との關係を觀謬まる—歐亂に於ける眞の敗因—『デイリー・テレグラフ』會見談—英國海軍を蔑視す—新憲法第六十一條—英獨關係の將來—國際聯盟と軍備の制限—唯一の途は獨逸の屈服—露西亞の將來……五三

第五章　失敗せる關稅戰爭

英國の帝國主義的政策—英國と植民地の離間策—加奈陀に於ける獨逸の手—一八六五年通商條約第七條—二割五分割引—ソールスベリー卿動かず—自治領の經濟的獨立—最惠國條款撤回の威嚇—英國を見損なふ—南阿戰爭疲弊に乘ず—南阿濠洲をも威嚇す—前後六年間の英獨關係の緊張—英國の對抗運動—加奈陀の獨逸品課稅割增—英國と加奈陀の親密—獨逸の辯明—チエムバーレンの復活—今後の關稅戰爭……七六

第六章　去りし三國同盟

伊太利の脫退は既定の事柄—トリポリ戰爭が脫退の手附け—佛伊の接近—伊墺は先天的に仇敵—『回復されざる伊太利』—アドリアチック海上の發展—巴爾幹の發展—ビスマーク曰く『永遠有効と思ふは不賢明』—伯林會議—チユニスを佛國に—『伊太利は腐肉を漁る烏』—伊太利の海軍擴張—佛國の對抗—デルカッセの佛國外交の蒔直し—伊太利の發展運動と回復運動—兩者とも墺多利と衝突—トリエストとフイウメ—アドリアチック沿岸—アルバニアに於ける伊太利人—モンテネグロは伊太利の要塞—墺多利とサロニカ—アルバニアに於ける伊墺の衝突—巴爾幹同盟—伊は贊成墺は反對—不公平なるアドリアチック海—伊露同盟論—トリポリ戰爭の延長……八六

第七章　獨佛の關係

アルサス、ローレンを忘却す—キール運河開通の一挿話—デルカッセ起つ—摩洛哥事件—眞目的は佛國誘致策—軍人ありて政治家なし—英米佛三國同盟—佛國の政策は勢力の均衡—土耳古及び露國との同盟—獨佛の爭覇戰—普墨西の傀儡—ビスマークの兩刀使ひ—西班牙を使嗾す—『獨逸を統一させたも

のは佛國』—一八七〇年の怨み—英米佛同盟の將來—佛國の傳統政策—アルサス、ローレンの厄介—ラインは自然の國防線—第二次佛國征伐の計畫—佛國を孤立に陷る—一八八七年の獨逸動員—獨逸外交失敗の端緒—英佛接近の兆—獨逸の離間策—ザンジバールを英に贈る—日露戰爭と摩洛哥事件—獨佛同盟論—英米が目標—結局は國力の問題……一一二

第八章　獨露關係の將來

東西併進南北兩進策—奇妙な唯一の除外例—獨逸の將來は海上に在り—露國が第一の目的か—領土擴張の必要—歐露だけで獨逸の十倍—歐露一平方哩六十五人—露領亞細亞三人七分—獨逸同じく三百十人—世界第一の穀倉—獨逸の對露發展—買ひ被られた露西亞—傳統的對露政策—交通不便が奈翁失敗の因—ペトログラードの危險—波蘭の地位—波羅的沿岸諸州—舊來の獨逸植民地—獨逸語地名—二十以上の獨語新聞雜誌—六百萬人の容量—領土四分の一の擴張—芬蘭の日和見政策—獨逸に味方するの可能—波羅的海の重要程度—經濟的壓迫—波蘭の海口—露國に對する大打擊—露都の防備—露國の最も必要なる地點—『獨逸の將來は陸上に在り』—經濟的侵入……一三五

第九章　和蘭の運命

歐洲政爭の中心點—爆發の本體はライン河口—產業上の和蘭と獨逸—ライン河沿岸の工業—非常なるハンデキャップ—アントワープとロッテルダム—ハムブルグは第二流—和蘭の富は獨逸の恩惠—『ラインは諸川の王』—和蘭との關稅同盟—エムデン運河に四千萬圓を投ず—和蘭壓迫政策—目的は寧ろ政治的—『國境新報』の威嚇—和蘭に於ける獨逸人の勢力—關稅同盟—商業が唯一の天惠—ウイルヘルムスハーフエンは人工の小港—キールは東に偏す—二階から眼藥—軍事的重心は西へ—ライン河口の要害—變ずべからざる國民性—ムイ閘門—一七八七年の經驗—英國の保護政策—獨逸の大打擊……一五五

第十章　波羅的海の將來

波羅的海を等閑に附す—一九〇五年の機動演習—波羅的海の入口—コーペンハーゲンの位置—丁抹は天王山—キール運河—ヘリゴランド—英國の失策—伯林まで僅かに百哩—敵の艦隊を二分する所以—英獨關係の將來—波羅的海はスエズ以上に重大—キールから倫敦まで五百浬—波羅的海戰の勝算は獨逸へ—對英挑戰は尙早—引つ張り瓜の丁抹—獨逸の對丁政策—カテガット海峽—英は丁抹の獨立を希望す—戰亂の原因か—丁抹は英人を侮蔑す—經濟的理由—英國領土は丁抹の好華客……一七六

第十一章　國家と歷史

國家と武力—例外的なる支那—外交の基礎は實力—普魯西の外交—人工的技巧に豐か—武斷外交の成功—外界適應か—外界征服か—普佛の對抗—普魯西軍隊の癈頽—モルトケ將軍—有機的智力の集注—普佛戰爭の準備は二年前—

箇人偉ならず集團偉なり—天才を恃むは時代後れ—蘭人司令官の普魯西の海軍—武裝せる二隻の蒸汽船—軍備以外の戰爭の要素—『軍備は野蠻の遺風』—歴史の教訓—財布を以ての掷り合ひ—トライチュケと仲裁々判—『戰爭は權力の最高試驗』—健全なる基礎は國家的私慾……一九三

第十二章　摩洛哥事件の眞相

バンテル號の派遣—小供欺しの口實—大西洋岸の良港—アガヂール—ビスマーク以後の外交—氣が利いて間抜け—第一回摩洛哥事件—カイゼル大童の活動—アルゼシラス會議の失敗—重大と稱する利害關係の內容—船舶噸數とカムフラージ—アガヂールに獨逸人は皆無—『獨逸海軍年鑑』の僞はらざる數字—摩洛哥南半併呑の大芝居—摩洛哥獲得は數十年の懸案—探險隊の踏査—世界商業の一大中心—西印度及び巴奈馬に至る中繼地—對英戰爭の足場—ジブラルタルに對する威脅……二〇七

第十三章　獨逸海軍同盟會

對英政策との關係—偉大なる議會牽制の機關—クルップが皇帝の喇叭手—會長は皇弟ハインリッヒ親王—平民の弱點—日本の赤十字社格—平民の宣傳と有功徽章—『勝利の榮冠が同盟會の頭上に』—大規模なる年會と宴會—講演會及び活動寫眞のプロパガンダ—四千の支部—『未來は水上に在り』—海外に百の支部—機關雜誌三十七萬部—會費五十萬圓は宣傳の爲めに—一九〇〇年海軍擴張案—社會民主黨も捲込まる—飲酒に年々十五億圓—英國艦隊の波羅的海演習—『獨逸海軍の大なる祝福』—シュタッツガルトの大會—コローンの大會—大局よりの結論……二二三

第十四章　カイゼルの罪

內治外交の原動機關—危險極まる政體—大戰敗北の遠因—多能なるウイルヘルム二世—量に於いて偉大—フリードリッヒ大王との比較—ヴォルテーアも一目置く—『專制的傾向』—皇帝は總て也國民は無也—平民主義—帝王神權說—政爭の渦中に飛込む—『朕は國家なり』を鵜呑みに—ナポレオンの戰法を外交に—『何んでも出來て何んにも出來ぬ』—三國同盟の弛緩—露佛の接近—英佛の協約—衝動的性癖と己惚れ—議會は無言の集團—社會民主黨の擡頭—現狀不滿の表徵—衝動政策に仆さる—國際的孤立—軍隊擴張は拙劣なる療法—避くべからざりし世界戰爭……二三五

第十五章　謬まれる社會黨操縱策

現狀打破黨は常に在り—『國家社會の敵』—元と机上の空論—ラサールの信者—アウグスト・ベーベル—ウイルヘルム・リープクネヒト—絕對的の民主主義—平等から階級へ—ビスマークの對社會黨政策—ウイルヘルム一世狙擊事件—社會黨壓迫案否決さる—第二の狙擊事件—社會黨壓迫法案通過す—社會黨の恐慌時代—一八七八年總選擧—慘澹たるリープクネヒトの一生—會葬者四

萬五千人—ビスマークの豹變—ビスマーク又もや豹變—暴力政策の復活—烟を見て火を見ず—ウイルヘルム二世一夜にして豹變—『社會黨は國家の敵祖國の敵』—『擾亂防止法案』—皇帝尊儼の斷末魔—無力なる議會—合理不合理の區別—デルブリユックの辟論—自由黨を併呑す—官僚の凋落……二五〇

第十六章　一九〇七年總選擧

政府對中央黨の衝突—議會解散—問題は西南阿非利加獨領植民地—盜人に追錢—期待を裏切れる總選擧—皇帝及び軍閥のプロパガンダ—一九〇六年海軍擴張—『議會を超越して課稅せん』—新舊思想の衝突—『ナポレオンの劍あるのみ』—全國の一般的罷業—八十一名より四十三名に—紛々たる政黨數二十餘—二黨に固まる—恐らく帝最も得意の時—英は過去の富豪王—英國の海外移民—獨逸は寧ろ移入—英獨の農業—工業狀態—戰後の對抗—獨逸人の國家的觀念—三つの敎訓……二七四

第十七章　一九一二年總選擧

自由主義の勝利—一九〇七年の回顧—食糧か海軍か—摩洛哥事件の藪蛇—二億五千萬圓の大增收計劃—自由黨中央黨聯合の對案—ビユーロー公の辭職—青黑團—軍閥失望の五年間—又もや摩洛哥事件—ウイルヘルム二世の失敗—超人變じて愚物となる—一九一二年總選擧は不信任決議—四十年間に四十倍—ビスマークが眞の君主—形式だけが普通選擧—自由黨の分裂—次ぎは社會民主黨—政府は高みの見物—一八七九年保安條例—二十一二名の代りに六名—產業の發達と人口の增加—社會黨は八割に近からん—保守黨は田舍に自由黨は都市に—危機一髮—『社會黨から投票權を奪へ』—對內政策としての大戰……二八六

第十八章　保護政策と自由政策

獨逸の發展と保護政策—ナポレオン戰爭後の獨逸—天祐の下にある英國—黃金時代の英國—英國と獨逸—商業主義と軍國主義—フリードリッヒ・リスト—獨逸政府喜ばず—眞理は環の如し—保護政策は『虛僞の組織』—保護政策の具體的効果—英國自由貿易の由來—ビスマークの喝破—坊主と仲買と銀行や—流動的なる眞理—一八七九年を境界線に—『獨逸製』—議會に於ける自由保護論者—國家は有機體—『英國も保護貿易に後返り』—世界大戰の遠因—勞働狀態……三〇七

第十九章　英獨の關稅問題

獨逸海軍の意義—根本は經濟政策—英國の海軍—保護政策の結果—世界の工業王—英國の保護政策—獨逸對抗の唯一良法—海外販路と海軍—英國が最大華客—加奈陀除外例の理由—二箇の關稅同盟に分立か—原料供給の便宜は英國へ—英國の財布—ロッテルダムとアントワープ—海軍制限の提案—『虫の宜い話』—英獨關係は富の問題—國際聯盟も三國同盟も不用……三二五

第二十章　産業上の獨逸
原則二つ—産業の四大區分—獨逸は石炭に加工—鐵三百五十萬噸の差—農業—英國の田園荒廢す—鐵道水路延長—勞働狀態のメートル—失業者一對三乃至四—移住民一對十乃至十二—英獨人口增加の比—移入民—生活費の比較—數字賃銀と購買力—貯蓄銀行預金の比較—獨逸は英國の二倍—納稅者表—馬肉と犬肉—犬の屠殺場—貧民の統計—英國の教會區制度……三四〇

第二十一章　獨逸の勞働狀態
移住民と勞働狀態—失業者の比較—英は獨の三倍半—移住者一對十乃至十二—正味の移住者—人口稠密は原因にあらず—勞働者預金の比較—一對六の割合—獨逸勞働者の困難—賃銀—英國は勞働組合員のみ—一般勞働者の比較は獨に有利—勞働不足の獨逸産業界—商業會議所年報と英國領事報告—婦人勞働者—生活費と移住—貧民三對九乃至十八—ゲーンスボロー氏の報告書—馬肉は中流階級……三五七

第二十二章　軍閥政治の弱點
武斷主義の成敗—要は運用する人と時勢—ビスマークとウイルヘルム二世—ザベルン事件—爲政者と被治者間の溝渠—目醒ましきサーベル振り—酩酊中尉を見物す—群衆に發砲す—市民を石炭庫に—國論憤る—新舊思想の衝突—民主主義の一頓挫—軍隊は皇帝の爲め—ビスマークと議會—民主階級の勃興—人間の器械は眞つ平—選擧法で抑壓—社會黨の選擧權を奪はん—ベルンハルヂ將軍の主戰論—組織の强み弱み—少數政治の弊……三七二

第二十三章　世界大戰の因果
一九一四年前半—キール運河竣工式後五週間—英國人愕ろく—三國同盟—英佛の離間—露英の離間—自らは親英政策—外交の一轉機—莽然たる外交政策—英國を佛國に味方せしむ—伊太利及び巴爾幹諸國土耳其を蠶食す—羅馬尼獨逸を見棄つ—陸軍も內容は貧弱—大規模の芝居—其の結果—『三國同盟を打破せよ』—墺匈國を喰ひ物にせんとす—墺匈國の南下政策—塞維が妨害—口實を僞作す—露は塞維を助けん—獨逸渦中に投ず—コノビシトの會合—フエルヂナンド太公の暗殺—英國の態度—獨逸觀察を謬まる—墺匈國屁古垂る—獨逸淺黃頭巾を脫ぐ—白耳義の中立—獨逸尙ほ英國を知らず—『ローカル・アンツアイゲル』事件—ウイルヘルム二世の雪辱戰—伊太利をも打算に逸す—英の國防第一線—策に仆る……三八五

第二十四章　社會民主黨の分裂
衝突は時期の問題—大戰の隱れたる原因—三國同盟の義務—『フオルウエルツ』の論調—態度の變更—政府の態度—ハーゼの答辯—『民の永久的動員』—『戰爭に對して責任なし』—八月四日の軍費協贊—政府の社會黨操縱—露西亞

を囮に—十四名の少數派—『我れ又政黨なるものを見ず』—政府の爲めに宣傳運動—熱病の反動—反對運動の陳呉—少數派增加す—第三次軍費の要求—反對者三十名—伊太利の同盟脱退—無併合の平和—壓迫政策の復活—『ライプチーゲル・フォルクスツアイツング』—兩派の妥協案—反對三十六名—十二月二十一日—多數黨は實は少數代表者—火蓋を切る—新政黨の初陣……四〇五

第二十五章　カイゼル退位まで

純理としては少數黨—多數黨の御用振り—多數黨の豫算否決—蓋し與太—少數黨の政綱を奪ふ—少數黨の拙策—『フォルウエルツ』乘取り策—協議會の波瀾—少數黨の態度—多數黨ばかり殘る—シャイデマンの勢力—純理と政治—非實際的なる少數派—多數黨の弱點—スパルタカス團—講和提議による緩和策—露國革命の影響—獨逸政府の普通選擧口約—少數黨大同團結に加はらず—獨立社會民主黨—ます〳〵過激化—多數黨は官僚化—政府に喰入る—政府に反噬を試む—社會黨入閣論—軍閥政治の斷末魔—ベートマン・ホルウエッヒ去る—議會政治の端緒—ミハエリス內閣の無能振り—多數黨少數黨と握手す—豫算の否決—不信任案—ヘルトリングと獨黨休戰—一九一八年春の攻勢—乘るか反るかの大芝居—獨墺社會黨大會—マックス內閣は清算內閣—對米通牒—憲法改正—風雲を孕んで起つ—カイゼルの退位……四二八

第二十六章　削られたる獨逸

國と國との衝突—英佛の實例—塞維と土耳其—普佛戰爭—アルサス、ローレン—ビスマークの豫言—獨佛の將來—人口の對比—英米佛同盟—一八七〇年が境界線—アダム・スミスの定理—人間に對する需要—機械と人口—都市と農村の發達—根本は產業—產業の原動力石炭—獨佛の地位一轉す—『數十年間壓倒』—原料支拂ひ—鑛物を奪はる—ルクセムブルグ—製鐵業—產業の衰頽—炭坑—ルールの石炭—猶太人の資本—ゼーコップ・シッフ—獨逸の回復は困難……四五一

第二十七章　新墺多利の將來

獨逸との併合—賴るべきは獨逸一國—憲法第六十一條—民族主義—民族の自決—撞着矛盾—獨逸人口の差引勘定—墺匈國に一千二百萬の獨逸人—新墺多利に六百萬人—二百五十萬の利益—ボヘミアの地—天下の要害—獨逸南下政策の障害—東方の白耳義—農業と工業上の墺多利—食料は輸入—工業も不振—石炭問題—匈牙利は最も不幸—石炭はチェック・スロヴアックの國に集中—製鐵業—ビルゼンの麥酒—租稅上り高の比較—維納は寄生木—戰後は衰頽せん……四六六

第二十八章　亡びたる獨逸植民地(政治的)

風袋ばかりの植民地—三十年の徒勞—獨逸人移住なし—獲得の由來—ルーデリツツランド—ナハチガル博士—五日を先んず—植民地の費用—內輪に見積

り十億圓—幻覺的植民政策—英獨植民政策の比較—全然失敗—人口稀薄の植民地—三箇の方法—器械扱ひが失敗の因—土人を信頼せず—自然の樂園破壞さる—强制勞働—『白人專制』—土人の減少—畏怖すべき統計表—一八九九年の『大叛亂』—ウイルヘルムスタール事件—土人相率ゐて獨領を逃ぐ……四七九

第二十九章　亡びたる獨逸植民地(產業的)

油椰子—埃及人に知らる—貴重なる脂肪—グラウンド・ナット—コヽ椰子—コヽア豆—護謨—サイザル麻—棉花—金剛石二千餘萬圓—獨領東部阿非利加—ケープ・カイロ鐵道—獨領西南阿非利加—有望なる鑛產物—ウオルフイッシ灣—カメルーン—新カメルーン—トーゴーランド—『白人の墓』—太平洋上の獨領—赤道の南北—膠州灣—『支那侵入の窓口』—日支の葛藤—括說……五〇四

最近の獨逸目次 終

最近の獨逸

第一章　緒言

米國上院で波瀾を捲き起した山東問題は、元とを質せば獨逸が膠州灣を租借したから起つたもの。其の膠州灣の租借には英國の尻押しがあり、從つて米國上院の波瀾の幾分かは、英國が負擔せなければならぬ。然るに日本の對獨宣戰の第一歩は獨逸を膠州灣から追ふことに存し、英國も青島の攻略にはわざ〳〵日本と協同動作を取れるほどに、獨逸を追ふことに熱中したのだから、世の中は妙なものである。獨逸が膠州灣に眼をつけたのは、決して其の宣敎師が殺されてからでなく、夫れよりも數十年以前にリヒトホーフエンを含むところの探險隊を派遣し、膠州灣に白羽の矢を立てゝ居た。然るに此の頃は英國と獨逸との關係は、寧ろ親善なる間柄にあり、英國は獨逸の機嫌を取り、獨逸は此れを奇貨として着々自己の立場を鞏固にするに努めて居た。そこで獨逸の宣敎師が殺され、カイゼルが疾風迅雷的に膠州灣に手を伸ぶるや、英國は獨逸の此の企てに反對を表せずして、寧ろ此れ

を援助したものである。蓋し英國が獨逸の歐洲に於いて己れに對抗するを喜ばず、獨逸の野心を極東に於いて緩和せしめんと欲したからである。歐洲動亂の起り、英國は斯んな事は疾くの昔しに忘れて終つて、獨逸が支那から膠州灣を强奪したかに觸れ廻つたけれども、事實は正に前記の次第であるから、獨逸を强奪者と云ふならば、英國は强奪幇助罪を犯して居る譯である。從がつて山東問題に對しては、英國は或る程度までの責任を持つて居ると云はなければならぬ。

英國はまた其の後幾ばくならずして、獨逸と山東條約なるものを締んだ。此れは要するに支那が衰頽すると、山東が波斯の如くに區分さるゝ可能性を帶びた條約である。斯んなことを平氣で實行して居たのが英國である。

併しながら人生に矛盾多く、國際間に於いて更に甚はだしい。前記の實例は何も英國を責むる爲めに擧げたのではない。唯英國が正義人道の張本で、獨逸が惡魔の權化のやうに云はれたのは、本質の相違よりも、ヨリ多くを時勢に負ふと云ふ事を主張せんが爲めである。時勢異なるが總ての矛盾、總ての不規則、總ての不調和を解釋する黃金の鍵である。人世は變化にして、國際生活に至りては更に〳〵變化が其の本然である。

今回の大戰に於いて獨逸主義が敗れたるは、最はや歷史的事實である。併しながら獨逸主義もウイルヘルム二世までは、著るしき成功を收めて居る。それが失敗せるは一つは運用する人にある。二つには所謂時勢にある。何故に前に成功し後に失敗せるかを研究するは、またやがて來るべき獨逸に對して暗示を投ずる所以。

獨逸主義の榮えたのはビスマークの偉才による。然して獨逸主義の失敗せるはウイルヘルム二世の己惚れによる。不自然なる獨逸聯邦の政治組織は、ビスマークありて始めて成功の運用を見るべく、ビスマークなくして不成功に終る。或はビスマークと雖もウイルヘルム二世の代に現はれしならば、ウイルヘルム二世同樣に失敗したかも知らぬ。何となれば一八七〇年前後と一九〇〇年前後とは、時勢に於いて天地の差があるからである。併しながら此れを反對にウイルヘルム二世をして、ビスマークの世に生れしめば、帝がビスマークと同じ成果を收め得たるかは大なる疑問である。此に兩者性格の偉大と、然らざるとが橫たはる。獨逸が終に一擊を英國に加ふべきは單に時期の問題で、ビスマークの親英政策もウイルヘルム二世の時代にあらしめば、果して何うなつたか分つたものではない。

併しながらビスマークの率ふる獨逸ならば、今回のやうな徹底的な負け方をする筈に、何とか喰ひ止めたであらうと思はれる。或は四圍の狀況が總て獨逸に不可なるに、强ひて戰塵を揚げなかつたかとも思はれる。佛國を叩き、露西亞を薄弱にし、次ぎは鋒が自然に英國、それから米國に向ふべきが、英國に打つて掛るには、今少しく國民をして奮起せしむるに足る形式と、時期とを撰んだことゝ思はれる。獨逸はビスマークに起り、ヴィルヘルム二世によりて大なる挫折に會した。

獨逸はフエニックス鳥の如く、其の灰より再生すべきか。此れ世界の轉機に最も大なる影響を與ふる問題である。英米佛等の協商國は獨逸が與るべしとの豫想の下に働らきつゝある。此れは巴里講和條約を一瞥すれば、何人にも明瞭なる事柄である。協商側が普魯西と新墺多利獨逸人)との併合を豫想する獨逸新憲法第六十一條の撤廢を强制せるは、餘りに小供らしく、殆んど協商側が神經衰弱に陷れるかを怪ましむるが、併しながら此れ彼れらが飽くまで獨逸を壓迫せんとするもの。獨逸を壓迫するは、すなはち其の再興の豫期に脅やかされつゝあるを語る。獨逸の國民性が一朝にして變化を來すことなしとすれば、協商側の此の豫期は道理あるものであり、何人も道理あるを疑はぬ。何となれば獨逸が單に外部の壓迫

にのみよりて押潰され得るかは、頗る疑問と云はなければならぬからである。

唯問題は英國の關稅政策と、其の對植民地政策とである。兩者は互に相關聯し此れを組織的に運用する時は、四海に跨がれる尨然たる大英國を形ち造るに至る。大英帝國が在來の如く烏合的集團でなく、眞に一箇の脈絡ある有機體として出現すれば、此れは獨逸に取つて大打擊たるを失はぬ。英國は戰爭の苦き經驗によりてチエムバーレン氏を起用し保護關稅帝國主義的政策を提げて起ちつゝあるかに見える。併しながら此れ果して其の論理的歸結にまで徹底するか否か。徹底すれば獨逸に取つては致命傷ならざるまでも、絕大の苦痛であることは確かである。然る時戰前の獨逸に回復するまでに、可なりの年月と忍耐とを必要とする。此の意味に於いて獨逸を考へるには常に對照を英國に求めなければならぬ。

第二章　武斷外交の清算

一國の外交は決して獨立せる機能ではない。だから他の事柄を顧みず、外交のみを研究しようと思ふと、非常な間違ひを生ずることがある。從がつて獨逸外交の根本方針を、十分に理解しようとならば、吾人は少しく獨逸の過去に溯つて、その國情と國是との由來を探究するの必要がある。まづ我れ〳〵は現代の獨逸と過去の夫れとが、著しく國情を異にして居るの事實に注目せなければならぬ。過去の獨逸は一言にして云へば、學者と詩人と官吏と農民とのこんがらがつたものであつた。然うして學者は空理空論を日課とし、文士は詩的情熱に溺れ、官吏は鈍重迂濶、然して農民は露西亞式に極めて蒙昧無知といふ有樣で、頗る武陵桃源式な國家であつた。然るに現代の獨逸如何と見れば、此れとは全然正反對で、如何にも著實狡猾、如何にも實際的打算的。一言以つて蔽へば極端に當世向な國家である。然らば現代の獨逸と舊時の獨逸とが何が故に斯樣に色彩を異にするに至れるかといふに、それは現代獨逸と舊時の獨逸とは全然別箇の國家だからである。すなはち今日の獨逸は普魯西の後身で、換言すれば擴大せられたる普魯西國である。

然るに此れに反して舊時代の獨逸の後身は、現代の獨逸ではなく、反つて今日の墺多利である。世人動もすれば獨逸の代表的人物としてゲーテ、シラー、ヘーゲルフィヒテ、ベートーヴエン、モツアートなどを數へるが此れらの人物は勿論、他にレツシングでもウイーランドでも、ジアン・パウルでも、シユレーゲルでも、ウーランドでもレナウでも、總て此れらの藝術家や哲學者は、獨逸人ではあるが、普魯西の出身ではない。舊代式の獨逸の產したもので、現代式の普魯西の產したものではない。現代式の普魯西は斯る方面の人物を出すべく、餘りに物質的また餘りに組織的である。

そこで其の普魯西であるが、此れは今から約六百年前に起つたものである。今でこそ普魯西は大威張りであれ、當時に於いては獨逸帝國領外の眇たる野蠻國で、住民も基督敎外の異敎徒であつた。それを所謂チウトン騎士（ナイツ）なるものが基督敎を擴布する爲めだと稱して、一種の十字戰爭を起して住民の多數を殺戮し、其の血の流れた跡へ獨逸の諸方から雜多な人民が移住して來て、こゝに普魯西が强制的に基督敎國に變化させられたのである。ところが十字軍の當事者たる騎士（ナイツ）連は誰れも頭を抑へる者がないのを宜い事にして所在に割據し、橫暴を逞うし、皇帝の命令などは一向に遵奉せないものだから、當時南獨スワビアに廣大な領地を所有

して居たホーヘンツオルレルン家のフリードリッヒが、皇帝の命を受けて此れらのチュートン騎士(ナイツ)を征服(一四一五年)し爾來世襲的に普魯西を統御することになつた。此のフリードリッヒと云ふのは性來武斷主義の君主であり、又當時普魯西の事情は武斷主義の政治を必要とした。蓋し前述の如く、普魯西の住民は多くは諸方から流れ込んだ浮浪漢であり、又一方に於いて東隣の强波蘭が生氣頗る潑溂、常に普魯西の邊疆を窺窬して居たからである。斯う云ふ因緣があつた爲めに、普魯西は餘程近世に至るまでは、終に其の半開殺伐的の狀態を脱し得ず、又其の首都たる伯林も商工業の中心と成り得ず、一種の田舍町たるに過ぎなかつた。一六五〇年の調査によれば倫敦の人口五十萬人、巴里四十萬人、アムステルダム三十萬人と註せられ、然して伯林の夫れは僅々一萬とある。一萬では村に毛の生えた位の程度のものである。斯るは前述べた如く武を以つて國を興した直接の結果である。

故に普魯西は例を昔しに取れば、先づ羅馬と云ふところである。武力に依つて國を建て、武力によつて國を保ち、武力に依つて國を擴めたもの。徹頭徹尾武を生命とせる國家である。此の邊の消息を立證する爲めには、一々史實を列擧するまでも無いことで、單に左表を一瞥すれば足れりである。

年次	面積(方基)	人口	平時兵員	人口と兵員との百分率
一六八八	一一三、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇	三八、〇〇〇	二・五
一七四〇	一二一、〇〇〇	二、二五〇、〇〇〇	八〇、〇〇〇	三・六
一七八六	一九九、〇〇〇	五、五〇〇、〇〇〇	一九五、〇〇〇	三・六
一八六五	二七五、五〇〇	一八、八〇〇、〇〇〇	二一〇、〇〇〇	一・一
一八六七	三四七、五〇〇	二三、六〇〇、〇〇〇	二六〇、〇〇〇	一・一
一九一二(獨逸)	五四一、〇〇〇	六六、〇〇〇、〇〇〇	六二六、七三一	一・〇

十七世紀及び十八世紀の普魯西は、佛國や墺多利に比較すると、遙かに貧乏な小國であつたが、此の間に於いて唯一の例外は陸軍であつた。陸軍だけは佛國よりも乃至墺多利よりも遙かに强大なるものを有して居つた。此の一事から判斷するも、實力政策(マハトポリチーク)が普魯西傳來の政策であつたことを想像することが出來る。然れば、フリードリッヒ・ウイルヘルム一世の崩御するまでは、普魯西の外交は短刀直入武力主義一天張りであつた。此れは其の國情より推して成るほど〳〵首肯づかれよう。つまり山出し外交である。然るにフリードリッヒ大王が王位を繼承するに及んで、普魯西の外交は此處に突如として新らしき方向を取つた。それ迄の普

魯西の外交は、前述べた如く山出し外交ではあつたけれども、その態度は餘程素撲で、天眞爛漫な趣きがあつた。だから時に稚氣愛すべき點も見える。然るに此れがフリードリッヒ大王以後になると、山出し外交が摺れからし外交となり、陰險惡辣な分子が夥しく混入して來た。丁度田舍者が都の風に吹かれて惡摺れがしたやうなものである。一七七五年か或は其の翌年かに大王が執筆した『普魯西政治の祕訣』を見ると『政略や野心は外間に漏れぬやうに押し隱して置くべし』とか『祕密は政治と軍事とに缺ぐべからざる道德である』とか言つて、王子に訓戒を與へて居る。

世人の熟知する如く、フリードリッヒ大王は、皇子の時代には文學を好み、專ら文士と交遊したものである。然うして即位に先だつ少許彼の有名なる『マキアヴェリの反對論』を著はしてマキアヴェリの『君主論』を非難攻擊し『古來マキアヴェリの「君主論」ほど忌むべく恐るべき文章はない。若しマキアヴェリの理想がシーザーならば余の理想はマルクス・アウレリアスである』と言つたほどの熱烈なる純理想家であつた。然かも此の『マキアヴェリ反對論』が出版せられた一七四〇年に、フリードリッヒは王位に即いたのであるから、內外共に新王は平和主義の君主であらうとのみ想像したことろが、君子豹變と云ふか、意外の意外は王が同じ年の十二月に、殆んど何らの理由なしに突如として兵をシレジアに進め、墺多利からシレジアを掠奪した事件である。その亂暴狼籍まさにマキアヴェリをして三舍を避けしむるに十分である。此れでは反對どころでなく、寧ろマキアヴェリの師範である。此れについて王は晩年の『回想錄』に於て、當時の心事を告白して『あれは普魯西に有利であつたから決行したのである』と平然として放言して居る。これによりて見れば王子時代のフリードリッヒは、或はアウレリアスを理想として居たかも知れぬが、即位以後の彼れは、寧ろマキアヴェリズムの實行者、否マキアヴェリをアウトヘロッドするものである。瑞典が露西亞に宣戰(一七四一年)したときも、王は露西亞に通告して戰爭には干涉しないと言明したが、當時伯林に駐劄せる露國公使ブラーケルは王の言明を信用せず、本國政府に祕報を送つて『普魯西は現王の存生中は到底禍心を放棄するものではないから、言明の如何に關せず普魯西に油斷するな』と警告した。蓋し隣國の爭鬪を利用して、漁夫の利を拾はふと云ふのがフリードリッヒ胸中の祕策であつたのは爭ふべからざる事柄で、前記『普魯西政治の祕訣』中にも『歐洲諸國は成るべく嫉視反目せしめ、我邦の乘ずべき機會を造り』といふ

文字がある位である。兎も角露國公使の本國に送つた祕報により、普魯西の外交は表裏反覆端倪すべからずと云ふ證明書を與へられた譯になる。

フリードリッヒ大王の露西亞に對する態度は、大王の歿後に於ても永く遵奉され、普魯西外交政策の中樞となつたが、王の著『現代の歴史』を讀むと、其中に斯ういふ一節がある。『普魯西の隣國として、地勢に於ても實力に於ても、最も危險なのは露西亞である。朕の歿後普魯西を支配する者は、宜しく此の蠻國との友誼を厚くすべきである。蓋し露西亞は貧國强兵である。殊に普魯西に接近せる地方は、利源に乏しいから、兵力に訴へて之を奪ふも、失ふ所が多く得る所が少ない。寧ろ之を懷柔して、ウイライナの利源を開拓すべき通路に利用すべきである』。すなはち露西亞以外の他國と戰ふことは、普魯西に取つて有利であるが、併し普魯西自身が露西亞と戰ふことは、寧ろ有害無益であると云ふに歸著する。此の政策は永く普魯西の對露外交を支配し、近時も矢張り此の思想が隨時隨所に發現して居る。

フリードリッヒ大王は、自國に危險な邦國を懷柔する手段としては、其の國と同盟すると云ふ妙計を案出した。例の『普魯西政治の祕訣』に斯ういふことが書いてある。

『政治の一大原則は、自國のために最も危險と思惟する邦國との間に、同盟を成立せしむるに在る。然ればこそ我邦は敢て露西亞と同盟したので、露西亞とさへ同盟して置けば、我邦は後顧の憂ひを除くことが出來る。

『普魯西にして西南の隣國に事を構へんと欲する場合には、宜しく先づ露西亞と妥協すべく、假へ露西亞の後援を得るに至らざるまでも、少くとも中立を維持せしむるために萬難を排して努力せなければならぬ』。

無論フリードリッヒの考へでは、露西亞との同盟は普魯西の領土を防衛せんがためよりは、寧ろ普魯西の領土を擴張せんがためである。したがつて同盟の目的は、相互の利益の爲めではない、單に普魯西自身だけの利益の爲めであること勿論である。

同盟條約に對する、君主又は政府の義務責任に關するフリードリッヒの意見は頗る振つて居る。すなはち大王の『回想錄』に曰く『若し君主が臣民の幸福の爲めに、一身の利益を犧牲にするが正當であるといふならば、況してや君主が自國の利益を擁護するために、他國との條約を犧牲に供するは、一層正當なる事件でなくてはならぬ。然ればこそ古來條約の破棄せられたる實例に乏しくないのである。

思ふに個人としては、一旦約束を結んだ以上如何に不利益を來すとも、此れを履行しなければならぬ。然らざれば法律が發動して、此れに制裁を加へるからである。然かも個人の場合には、制裁を受けるものは個人である。然るに國家の場合に於ては、他國が條約に違反するも、何處に訴へて制裁を仰ぐべきか。然して自國の不利を忍んで條約を尊重するに於ては、之が爲めに不利を蒙るものは、單に一箇の君主のみではなく、實に國民全體である。だから問題は條約を蹂躙するか、國民をして滅亡に赴かしむるかと云ふことになるが、斯んな問題は殆んど答ふる必要のないほどに明白である。吾人は無論條約を破棄すべきである』。見るべし、獨逸が白耳義の中立條約を反古紙にしたのは、フリードリッヒ以來の傳統政策である。

後年ビスマークの外交は隨分と惡辣を極めたものであるが、フリードリッヒの外交も決して此れに劣らぬ。殊に露西亞を中心とせる外交に至つては陰險と巧妙と竝び盡し、思はず感嘆の聲を發せしむる位である。大王は屢々波蘭や土耳其を利用して、露西亞に事を構へさせたが、併しながら對露政策の中樞は、何んと云つても墺多利を使嗾して露西亞に挑戰させたことに存する。時は一七七〇年九月三日、王が墺多利首相カウニッツ公爵とノイシュタットに於いて會商し、言を巧みにして彼れを使嗾した手腕は凄いものである。王曰く『墺多利は斷じて露西亞をして、ドナウ河の彼岸に發展せしめてはならない。若し露國の勢力にしてドナウの彼岸に發展せんか、貴國たるものは果して何の面目かある。貴下は佛蘭西に交渉して、若し貴國が露西亞と開戰せる場合には佛國から十萬の援兵を借りるだけの用意をしやうとは考へないか。貴下にして若し胸中を余に披瀝されんか、余も亦た貴下のために謀るに吝かなるものではない』。

これと全然同一の筆法を用ひて、ビスマークも露西亞に對して墺多利を使嗾（一八六六年）したことがある。それから普墺戰爭の當時ナポレオン三世は、普魯西が墺多利の領土を占領した代償として、ライン河左岸の某地を佛蘭西に割讓せんことを普魯西に向つて要求した。ビスマークは無論此れを悅ばなかつたけれども戰爭が終らない間に、佛國の反感を買ふのは頗る危險なりと考へたから、それでは貴國は白耳義を占領されては如何との提議を爲した。淺薄なるナポレオンはうまく〳〵とビスマークの奸計に陷つて、厄介なる白耳義占領の旨を承諾した。そこでビスマークはナポレオンの使臣ベネデッチに要求して、その草案を作製せしめ、此れを普魯西國王に見せると稱して、實は方角違ひの露西亞皇帝に送つた。然う

してベネデッチに向つては、普魯西國王の躊躇のために、調印が延引するのだと誤魔化して置いた。佛國の白耳義占領の草案を見た露西亞皇帝は、ビスマークが豫定せるが如く非常に怒つた。佛蘭西は歐洲の平和を攪亂するものだと云ふので佛國に對して非常な反感を持つやうになつた。露西亞が佛國を惡めば、自然に普魯西に近づいて來る。これがビスマークの目的で親露政策の發現はフリードリッヒ以來の政策である。

一たい佛蘭西革命は又人心の大革命であつた。革命以前の各國は戰國時代の氣分を離れず、嫉視反目を其の日課として居たが、一旦革命あるや、人心は頓に宏量寛濶となり、從來の固陋偏見は薄らいで、自由平等博愛と云ふやうなものが入れ代つた。英國ではコブデンやブライトなどの唱ふる自由貿易主義が一世を風靡する。露西亞でも皇帝が先じて平和主義を唱道する。一たいに人間の氣分が頗る平和的になつて來た。併しながら斯んな風潮に訪問されて困るのは普魯西である。普魯西をして其の國力を伸張せしむるには、斯んな時代思潮に雷同附和しては、到底目的を遂げることが出來ぬと考へたのがビスマークである。そこで彼れは盛んに『鐵血』政略を遂行して屢々歐洲に紅塵を揚げ、諸國を戰亂の渦中に誘ひ入れ

た。蓋し水濁れるに乘じて魚を網みせんとする策略である。然して此の場合ビスマークが應用せる外交政策は、實にフリードリッヒの遺策に外ならぬ。

フリードリッヒ大王は曾て(一七七二年)露西亞と墺多利とを誘つて、波蘭を分割したことがある。此の波蘭分割が後年ビスマークの外交を成功せしむる遠因となるのだから、世の中は妙なものである。實を云へば當時の墺多利は、波蘭の分割に對しては野心を持つて居なかつた。併しながらフリードリッヒの立場から云へば、若し墺多利を分割に參加させないと云ふと、分割された波蘭人は普魯西を怨んで墺多利に對して好感を抱くやうになる。斯くては墺多利は波蘭から、種々の便益を受くるに反して、普魯西は唯土地を得たと云ふ空名だけで、事實問題として最も重要なる人心を失はなければならぬ。此れは策の宜しきを得ざるものであると云ふので、極力墺多利を誘惑して、遂に分割に參加させた。つまり波蘭人の怨みを等分中和せしめようと云ふ狡獪なる考へである。然かも墺多利が獲た地方は露西亞人が多く、其の難治のために、徒らに國力を消耗するの結果に陷り、且つ露西亞との間に無用の軋轢を惹起したから、普魯西の外交策は豫期以上の成功を收めた譯になる。斯くして墺多利が露西亞と仲の惡くなつたことが、後年ビスマー

クをして巧みに墺多利を三國同盟に引き入るゝに成功せしめた遠因である。

ビスマークは伯林會議(一八七八年)の場合フリードリッヒの故智を學んで、同じやうな陰險な計略を廻らした。すなはち一面に於いては、伊太利が多年垂涎して居たチユニスを、佛國が占領することに同意して、伊太利と佛蘭西とを不和に陷しいれ、また一面に於てはボスニア及びヘルツェゴヴィナを、墺多利が占領することに同意し、以つて何らの獲物をも得ずして終りし露國をして、墺多利を怨ましむるに成功した。そこで伊太利と墺多利とは、夫れ〳〵佛國と露西亞とに對して敵意を懷き、若しくは非常なる警戒を必要とするの位置に陷つたが、伊も墺も到底單獨では佛國及び露西亞に對抗し得べくもない。佛露に對抗するには、是非とも普魯西の援助を得なければならぬ。すなはちビスマークは大芝居を打つて、伊墺兩國を自分の圏内に引き摺り込んで終つたのである。三國同盟なるもの此に於いてか起る。前項にフリードリッヒの波蘭分割が、ビスマークの外交を扶けたと云ふのはすなはち此れである。

例の『普魯西政治の秘訣』にも『遠國を攻略するよりは隣國に一村を得よ』と書いてある。當時の歐洲諸國は最早戰亂に飽いて、海外貿易の發展に眼を向け、着々此

の方面の施設に努めて居たに拘らず、ビスマークは大王の遺策を守つて敢て海外の雄飛を試みず。夫れは後日の事として殘し置き、焦眉爛頭の急務としては盛んに隣國を攻略し、自國の實力を鞏固にし、以つて他日雄飛の素地を造るを怠らなかつた。すなはち先づ墺多利を誘つて、共に丁抹と開戰(一八六四年)し、シュレスウイッヒホルシュタイン及びキール港灣と、然して百萬の住民とを併せて占領した。後二年、今度は白耳義を佛蘭西に與ふべしとの口實の下に、ナポレオン三世の甘心を買ひ、その後援を得て墺多利に挑戰し、一擧にしてゼルマン諸國に於ける覇權をば墺多利から普魯西に奪つてしまつた。また白耳義を佛國に與ふべしとの口約によつて、佛國に對する露西亞の反感を挑發し、此の機に乘じて佛國に挑戰した。全く以つて兩刀使ひ以上の藝當である。一つのものを異なれる二つの目的に流用することは、事の善惡は別として其の手腕に感服して宜い。斯くの如く普魯西はビスマークの辣腕によつて漸次隣國を攻略し、ゼルマン諸國を征服し、一八七〇年之を統一して獨逸帝國なるものを建立し、普魯西國王をして獨逸皇帝たらしめた。斯う云ふ次第であるから、獨逸と云ふも實はウイルヘルム二世が曾て喝破せる如『擴大せられたる普魯西』たるに過ぎぬ。

扨ていよ〳〵ゼルマン諸國に於ける覇權が確立すると、普魯西は今度は多年潜めて居た爪牙を露はして、露西亞に對抗すべき順序となる。露西亞は普佛戰爭に於いて普魯西に對して好意を表し、若し第三國にして佛國に加擔するならば、露西亞は普魯西に味方しやうと云ふまでの決心を示した。然うして普魯西を援護する一方法として、墺多利と伊太利と丁抹とを牽制して、佛蘭西に加擔せしめなかた。だから普魯西は露西亞を德とすべき理由はあつても、此れを敵視する理由はない。併し利益の爲めにはそんな事に拘泥する獨逸ではない。露西亞と云ふ大きな圖體の者が隣りに控へて居ては厄介だと云ふので、此れを滅ぼす段取りを案出した。其の第一は露土戰爭(一八七七年)である。大々的に露國を土耳其に挑戰させたが、其の結果は人も知る如く、露西亞に取つて大味噌であつた。これは獨逸の思ふ壺に嵌つたものである。然かも戰後伯林會議では、露國は當然獨逸の後援を得べしと豫期して居たのに、ビスマークは此の確信を裏切つて露西亞の要求に反對し、露西亞をして何物をも得せしめず、露土戰爭は要するに徒らに露國の勢力を消磨せしめたるに過ぎない結果を齎らした。すなはち事皆ビスマークの方寸に出づ。

前述べた如くビスマークは暫く近攻主義を採り、世界政策は此れを後日に讓つて置いたが、近攻政策がほゞ成功するに及んで、こゝに馬首を轉じて海外發展に着手する事となつた。但し獨逸聯邦の成立と共に聯邦議會が設立せられ、從つて其の外交もビスマーク乃至外交當局の一存で支配することは出來ない。背後には絶えず國民の輿論があつて働いて居る。獨逸の如き國柄に於いては、此の輿論のうち最も有力なのは、大學教授の言論であることは明らかである。獨逸には二十三箇の大學があり、三千の教授を收容して居る。此の三千の教授連は常に新聞や雜誌で各自の意見を公表するのみならず、官界に於ける大小官吏は概ね彼れらの弟子である。斯くして獨逸の大學は世界に於ける學問の淵叢として其の權威を誇るのみならず、一方實社會に觸れて絶えず此れを誘導刺戟して居る。其のうち獨逸の對外政策に最も多くの感化を與へたのは、例の有名なる史家トライチュケである。

トライチュケは其の名著『政治學』に於いて論じて居る。『獨逸は從來天然から繼子扱ひの待遇を受けて居る。折角ライン河と云ふ立派な天惠があつても、その大部分を他國に占領せられて居ては、何の役にも立たぬ。獨逸が今後海外に發展

するには、是非此のライン河の河口を領有しなければならぬ。と云つて必ずしも其の爲に、和蘭の獨立を侵害するの必要はない。獨逸は和蘭に政治的勢力を張るの必要はない。けれども經濟的勢力に至つては、是非とも和蘭を以つて獨逸の繼續としなければならぬ。和蘭に經濟的勢力を張るの必要なるは、恰かも日常のパンに於けると同樣である。獨逸人は此の當然なる要求を主張するのを、一般に遠慮して居るが、斯くの如きは蓋し無用の沙汰である』。

和蘭に海口を求むる獨逸が、果して如何なる方面に發展せんとするかといふにその第一の目的は英國と角逐して、其の世界的勢力を打破するにある。例へばトライチユケの『土耳其と列强』(一八七六年)を讀んで見ると、斯ういふことが書いてある。『何と言つても英國は今日に於いて世界の最大强國である。併しながら英國は明かに時代錯誤に陷つて居る。換言すれば時代遲れの舊國である。海軍と備兵とで戰爭の出來た時代の老國である。濫りに他國の海岸に、要塞や海港をさへ占有すれば、それで事足りた時代の遺物である。今日の如く民族的自覺、國民的觀念が發達せる時代に於いては、英國は到底永く從來の情勢を維持することは出來ない。故に早晩ジブラルタルは西班牙のために奪還せられ、マルタ島は伊太利のために回收せられ、地中海は同海沿岸の諸國のために分割せられる時期が到來するであらう。英國は海賊時代の遺物として、國際法上の汚辱である。彼れは何時まで海軍を頼んで、此の汚辱を維持せんとするか』。

かくトライチユケは英國が老大爲すなきを看取し、獨逸國民に向つて無遠慮に英國の海外領土に發展せよと奬勵した。すなはち『獨逸の奮鬪』と題する著書に云ふ。『南部阿非利加に於ける諸般の事情は、吾人の發展を歡迎して居る。英國の植民政策は從來到る處に成功せるが、唯だ南部阿非利加に於いては失敗した。現今同地に發展せる文化はアングロ・サクソンの文明ではなく、チウトン又は和蘭の文明である。和蘭人の血を引くボア人は、極端に英國を憎惡して居る。我邦にして此際一大決心を以つて植民政策を遂行せんか、英國との間に多少の紛爭を釀すべきは勿論なるも、爭鬪の結果は果して時代後れの老大國に有利なるべきか。將たまた中央歐洲の新興國(獨逸)の勝利に歸すべきか。此れは問はずして明かなる問題である。吾人は既に墺多利、佛蘭西及び露西亞とは輸贏を爭ひ、然して勝ちは吾人の掌中に歸した。然れば殘るは今や英國との角逐である』。

此れらの口吻から想像しても、改めてトライチユケの政治學說を紹介する迄も

なく、その思想がマキアヴェリの思想を祖述したものであり、その政策がフリードリッヒ大王及びビスマークの政策を繼承したものであることは、直に看取せられるであらう。その『政治學』の冒頭にもトライチュケは明白に述べて居る。『蓋し國家は空名を捨て、實力の上に立たざるべからず。從つて國家は敎會が主張するが如き道德觀念に拘泥せず、寧ろ道義を捨て去らざるべからず。それ國家は實力なり。これ甚だ放膽にして、小膽者流の口にするを憚るところ。能く之を道破して忌憚するなきに至つては、誠にマキアヴェリの功績と謂ふべし』。

要するにトライチュケの結論は斯うである。『普通條約は神聖で、戰爭は罪惡であるといふが、事實は其の反對を示し、條約を遵奉すると否とは一國自身の利害如何に因るに過ぎない。國際裁判の如きものを設置したところで、區々たる些末な問題ならば、各國も其の裁判に承服するであらうが、國家の重大問題になると、結局戰爭に訴へて理否を決定するより外に方法はない。これ戰爭が神聖なる所以である』。

トライチュケは一八九六年に死んだが、其の思想は深く獨逸國民の頭腦の奥底に浸込んだ。すなはちトライチュケは死して然して死せざるのである。從つて

彼れの思想を祖述して、同樣の思想宣傳に努力する學者が甚だ多い。勿論これは必ずしもトライチュケ一人の感化と云ふではない。寧ろフリードリッヒ大王乃至ビスマーク以來の獨逸の國是であつて、獨逸の世界政策及び經濟政策は、夙にビスマークの先見に胚胎せるものと言はなくてはならぬ。曾てビスマークがビュッヒエルに語つた言葉に『吾々は一八六六年までは普魯西と他のゼルマン諸國との關係を目的として奮鬪し、其後一八七〇年までは、獨逸と歐洲との關係を標準として努力せるが、更に其後は獨逸と世界との關係を標準として、世界政策を遂行することゝなつた。然うして獨逸が其の世界政策を遂行するに方つて最も注目すべきは單一なる英國のみではない。寧ろ怖るべきは亞米利加である。思ふに今後の亞米利加合衆國は、世人の一般に想像するよりも遙かに怖るべきものとならん。蓋し今後の競爭は、政治よりも寧ろ經濟にある。今後合衆國との經濟戰爭に於て、後れを取らない用意をすることは、我邦に取つて最も必要なことである』。

故にビスマークは夙に保護關稅を設定(一八七九年)して、英國及び合衆國に對する經濟戰爭の準備を爲した。然うして此の政策は、爾來非常なる成功を齎らし、獨逸製の商品は猛烈に英國及び米國の海外市場を蠶食しはじめた。

ビスマークが失脚し、ウイルヘルム二世が專權を揮ふやうになつても、獨逸の惡辣は毫も改められず、反對に益甚しきをさへ加へた。曾てカイゼルが『黃禍』の擬畫を造つて、之を露西亞の皇帝に贈つたことは有名な話しである。露國は獨逸に使嗾せられて、日本に向つて挑戰した。然うして意外の大敗を招き、徒らに國力を消耗した。併しながら獨逸の目的は露西亞の國力を殺ぐに在つたのだから、露西亞の奉天に大敗せる事は、獨逸に取つてはやがて意外の成功であつたのである。

獨逸はまた英國と露西亞とを衝突させることにも、一方ならず骨を折つた。元來獨逸政治家の胸中では、英露兩國の利害關係は、亞細亞方面に於ても、また其の他に於ても、到底一致することの出來ないものであると映じて居る。故に獨逸は英國と露國とに對して、同時に雙方の味方となり、又は敵となることを絕對に回避し、或時は一方に味方して一方を窘め、或時は一方に接近して一方を疎んじた。何故かと言へば假りに獨逸が露西亞と開戰する場合は、英國を味方にして置かなければ、波羅的及び黑海に於ける露西亞の海軍は、近年まで獨逸の海軍よりも優勢であつたから、獨逸に取つては甚だ危險の地位に陷る。また反對に獨逸が英國と戰爭する場合には、露西亞を味方にして置けば、此れと提携して印度を攻略するに、何れ

だけ便利を得らるゝかも知れない。此の理由で獨逸は英露兩國に對して莽草然なる政策を取つたのである。併しながら獨逸の腹を割つて云へば、獨逸が最も有利なりとするは、自身が露西亞もしくは英國と戰ふよりも、露と英とを衝突させて、己れは高みの見物を決め込むに在る。蓋し此の二國さへ疲弊すれば、獨逸は周圍に怖るべきものは無くなつて、自由自在に振舞ふことが出來るからである。此の二國のうち露西亞は日露戰爭の結果、大いに國力を失墜して終つたから、獨逸は最早露西亞の怖るゝに足らざるを認めた。すなはち到底自分の敵ではないと見て取つたから、今度は此れを自分の味方に引つ張り込むの策を樹て、獨露提携して專ら英國の勢力を侵略するの方針を採つた。一九〇五年及び一九一一年に、無遠慮にもお人好しの佛國を使嗾して英國に反抗せしめ、摩洛哥事件を惹起せしめた如きは、すなはち其の實例である。

以上述ぶるところによつて、吾々は獨逸外交政策の由來するところを闡明し、獨逸の外交方針の根本が果して如何なるものなるかを知つた。此の外交政策の適用が、歐亂に於いて破產したのである。前のカイゼル今のホーヘンツオルレルン伯の父君フリードリッヒ三世は、獨逸の君主としては珍らしい平和温良な人物で

あつたが、其の息子に至つては、飽くまで獨逸型の性格を具備し、種々の點に於てフリードリッヒ大王に酷似して居る。一部の論者はウイルヘルム二世が即位以來三十年間未だ一兵をも動かさゝるを見て、彼は必ずしも世評の如き好戰君主にあらずと言つたが、此の批評は今回の歐洲戰爭によりて、遺憾なく裏切られて終つた。彼れは其の偉大なる陸軍と海軍を、如何なる機會に於て如何なる方面に利用せんとするかに焦慮し、然して少々焦り氣味になつた。其の結果功名を樹つるに急にして、四邊の事情を看取するに鈍く、或は看取しても何ほどの事なしとして、終にサラエウォの一彈に其の尨大なる陸海軍を擧げて、英國に向つて挑戰した。然して其の起ち方が四邊の警戒を惹き起すの程度に不穩當であり、換言すればフリードリッヒ以來の傳統政策が破算するの可能あるを忘れたところが、カイゼル失敗の原因である。急進も時と場合による。マキアヴエリズムも時に通用せぬ。此の哲理を忘れて餘りに理想に突貫し過ぎた爲めに、終に一敗地に塗れて『カイゼル』の稱號を撤し、一箇の私人として『伯爵』と名乘るの餘儀なきに至つた。現在までの所を以て言へば、獨逸の武斷外交は小さく成功して大きく失敗せるものである。清算は結局獨逸の損となつた。

第三章　英米との對抗

獨逸も帝國建設の時(一八七〇年)までは自國内の統一と隣國との競爭とに沒頭せるが爲めに、到底志を海外に伸ぶることが出來なかつた。然るにビスマークが現はれ、其の偉才を縱横に振ふに及んで、國内の統一もつき、隣國との關係もやゝ其の緒に就いたので、こゝに獨逸は其の陣容を改め、從來對内及び對隣國政策に盡せし勢力を擧げて、此れを海外植民政策に傾倒することゝなつた。無論當時尙ほ獨逸は其の東西南北に强敵を控へ、且つ波羅的州や墺多利や瑞西や和蘭などに獨逸系の人民が散在することによりて、全然後顧の憂ひなき地位に居たのではない。然れども兎も角も在來自身及び自身の近隣にのみ注ぎ來りし勢力を、海外に轉換せしむるまでに餘裕の生じたのは、爭ふべからざる事實である。

尤も其の其前にも、トライチユケ、シユリマン、ロシエル、リスト、ドロイセン其他獨逸の碩學が、獨逸人口の餘剩を處分せんが爲めには、是非植民政策に努力するの必要があると、切りに主張し來つたのであるが、何分當時の獨逸は國力が微弱で、有力な海軍もなく、製造工業も將た海運事業も、共に未だ見るべき發達を示さず、又一方

に於ては官民ともに海外に對しては、冷淡なる注意を拂ふに過ぎないと云ふ狀態であつたので、植民問題は單に大學の內部で喋々せられるだけで、國民は擧げて此れを嘲笑すると云ふ有樣であつた。現に一八四八年に植民政策に熱心な人々が巨金を寄附して軍艦を建造したのを、一八五二年に至つて政府は此れを競賣に附したなどの滑稽事を演じた位である。

然るに獨逸帝國の建設せられて以來、其の人口は年々驚くべき急激なる增加を示すに至つた。試みに統計に徵するに

年次	人口	一年平均增加
一八四〇	三二、八〇〇、〇〇〇	
一八五〇	三五、四〇〇、〇〇〇	二六〇、〇〇〇
一八六〇	三七、七〇〇、〇〇〇	二三〇、〇〇〇
一八七〇	四〇、八〇〇、〇〇〇	三一〇、〇〇〇
一八八〇	四五、二〇〇、〇〇〇	四四〇、〇〇〇
一八九〇	四九、四〇〇、〇〇〇	四二〇、〇〇〇
一九〇〇	五六、三〇〇、〇〇〇	六九〇、〇〇〇
一九一二	六六、〇〇〇、〇〇〇	八五〇、〇〇〇

であつて、此れは寧ろ當局者の豫期せる以上の事柄であつた。現在に於いては獨逸の人口は、年々十萬以上增加する。シュモラー敎授の計算によれば、獨逸の人口は一九六五年には一億四百萬に達すべしといひ、ヒュッペ・シュライデンの豫想によれば、一九八〇年に既に一億五千萬に達すべしと言ひ、斯道の大家として知らるゝ佛人ルロア・ボーリウは今後百年にして二億に達せんと言つて居る。斯く急激に人口が增加しては、獨逸も到底晏如たることを得ない。何とかして此の人々を捌くだけの工夫を案出せなければならぬ。と言つて單に外國の領土に移住せしむるのみでは、徒らに自己の競敵に利益を與へると言ふだけに終る。獨逸は何らの利益を受けぬ。そこで此れは何うしても植民地が必要であると考へついた。尤も獨逸と雖も多少の植民地は持つて居ない事はなかつたが、此れらの植民地は皆白人の移住に適して居らぬ。そこで如何にもして今少しく氣候の良い溫帶に、植民地を獲ることが必要であると云ふ結論に到達した。斯うなつて來ると、六十年前には單に學者の空論なりとせられたものが、忽ちにして上下の輿論となり、從來植民政治に經驗なきが爲めに、寧ろ學者の植民政策を抑壓し來つた政府當局者も、終に長夜の安眠を貪ることが出來なくなつて、後れ馳せながら學者の驥尾に附して、植民政策を高唱するやうになつた。

現代の獨逸帝國は畢竟普魯西の貴族連によつて征服せられたものであるが、其

の貴族連はすなはちチウトン騎士（ナイツ）の後裔である。チウトン騎士は十二世紀及び十三世紀に於いて、普魯西をスラヴ人の支配から掠奪して、異教の人民を柔順な基督教徒に改宗せしめたものである。彼れらの基督教を擴布する方法は、左手に聖書右手に劍と言はれた回教徒の夫れに彷彿たるもので、全然武斷主義であつた。此の武斷主義の影響が何處までも附き纏つて、普魯西では十八世紀に至るも、尙ほ農奴など云ふ中世紀時代の壓制が行はれて居た。一八〇七年になつて農奴は名義上廢止せられたけれども、その遺習は最近までも殘つて居て、今日でも普魯西の下層農民は主人を『恩惠者（ヘーレーンヴォルテーター）』と呼び、主人や其の子供の足に接吻すると云ふ風習がある。此點は少しも露西亞と異なる所はない。殊に東部普魯西では、工業は尙ほ頗る幼稚で、農業が殆んど唯一の產業であるから、貴族連は農民の無智に乘じて、彼れらの膏血を絞るを以つて自己の天職の如くに心得て居る。又貴族連の收入の途は此れ以外にないのである。トカヴィルは『本國を知らんと欲せば宜しく其の植民地を見よ』と云つたが、成るほど至言で、獨逸の植民地經營は全然貴族が農民の膏血を絞り取ると同じ筆法を用ひ、萬事を武斷的强制的に振舞つて居る。

ビスマークは典型的な東普魯西人である。併し其の容貌や性格から判斷すると、スラヴの血も餘程多く交つて居ると思はれる。彼れの遺り口はスラヴ的、普魯西的を混合したものである。其の露骨なる遺り口は、最初は流石の獨逸人も少なからず面喰つたと見え、餘り酷いとか何とか云つた者もあつたが、漸次に此れに訓練されて來て、今では寧ろ普通のことゝ考へて居る。此れは獨逸の官僚は、多く東普魯西の出身であるから、ビスマークと共通の性格を備へて居るからでもある。故に彼れらが植民政策に鋭意するに及んでも、萬事ビスマークの遺り口を眞似るのは、寧ろ當然のことである。獨逸の官僚が英國風の民主思想を嫌惡することは、露西亞の官僚と同じことである。國民を統御し、國威を擴張せんとして、サーベルの威力に訴へることは、彼れらの眼から視れば、非常手段ではなくて、寧ろ常套手段である。

戰前に於ける獨逸國民の英國に對する反感は、實に旺盛なるものであつたが、此れは決して獨逸の黃色新聞や、英國の某々新聞が批評する如くに、獨逸の民間から自然に起つた聲ではない。黑幕として背後に控へて居る煽動の張本は、獨逸政府乃至獨逸の官僚である。此の事實は戰前の政府と戰後の政府とに論なく、又カイゼルの政府と社會黨の政府に論なく、判を捺したやうに同一である。故に獨逸の民

間に於ける英國に對する輿論の眞相を理會するには、何時でも其の背後に政府の政略が潜んで、輿論を操縦して居ることを忘れてはならない。一般に文明國では官吏や大學教授は、言論の自由を保障せられて居るの例なるが、獨逸の官吏はたとへ箇人としても、政府に不利な意見を吐くことが出來ぬ。然る時は官紀紊亂の廉によりて懲戒處分を受け、又は免職せられることを覺悟せなければならぬ。大學教授の言論の自由も單に表面だけのことで、政府は少からず抑壓を加へて居る。教授自身も一般に地位や名譽に戀々として居るから、唯々として政府の鼻息を窺ふ。だから彼れらの言論の自由は、議論が政府に好都合なる場合のみの自由で、然らざる場合は頗る不自由である。從つて役人や大學教授の言論は、大てい官臭を帶びて居ると言つて差支へない。

併しながら獨逸の大學教授の言論と雖も、一概に馬鹿には出來ぬことがある。由來獨逸では大學教授の言論が、民心に影響するところが鮮くない。ナポレオンのために蹂躙せられた普魯西が忽ち元氣を回復したのは、アルントやフイヒテやニーブールといふやうな、大學教授の皷舞奬勵に負ふところが多い。ビスマークが獨逸統一の大事業に指を染めた以前にも、此れらの大學教授が率先してビスマークの露拂ひを勤めたもので、フランクフルトの舊國民議會でも、一八四八年の戰艦醵金でも、學者の慫慂に皷吹せられた結果である。故に教授の言論は、必ずしも無責任な談話として、一概に輕視することは出來ない。

獨逸の政治家や植民論者は、獨逸が失なつた熱帶地方は、非常に價値あるものであつたと言ふが、此れは無論それに相違はない。併しながら獨逸に取つて、熱帶植民地よりも更に必要なるは温帶植民地である。此れは急激に增加する人口を捌く上に於いて、必然に起る要求である。然るに今日海外に於いて人口が稀薄で、植民の可能性を最も多く有して居るのは英米兩國の屬領であるから、若し獨逸にして其の人口を適當に捌き得べき植民地を得んとならば此れを英米から割取するより外に途はないと言ふことになる。獨逸にして其の地續に領土を擴張し得れば兎も角、然らざれば海外に於いて第二獨逸を作るを第二策とせなければならぬ。併し此の第二策を遂行するに方りて、米國は新興氣鋭であるから、此れと角逐することは容易でないが、英國は老大不振であるから、之を窘迫するは必ずしも至難でないと、獨逸人は考へる。

萬事秘密主義の獨逸の官邊は、輕々しく政府の眞意を發表することをせぬ。だ

から彼れらの眞意が那邊に存するかは、單に推察するに過ぎないが、併しながら普通民間に行なはるゝやうな意見が、政府の意見でないことは分り切つたことである。民間の議論は一種のプロパガンダである。時に或は眼潰しである。政府が背後から操つりの糸を引いて遣らせて居るのである。たとへばアイゼンハルトといふ人が、ミュンヘンで發行(一九〇〇年)した小冊子『英國との交戰』を一讀すると、獨逸は新造艦隊を以て、まづ日本を擊破して東洋に於ける地歩を固め、次いで英國の海軍を全滅し、最後にモンロー主義の亞米利加を懲膺して、獨逸は濠洲その他英國屬領の最良の部分を占領し、アングロ・サクソンの勢力を凌駕して、世界の覇權を掌握すると云ふやうなことが書いてある。此れは無論馬鹿〳〵しい空想である。空想ではあるが併し單純なる空想ではない。政府が爲めにする所ありて、背後から糸を引いてやらせて居る空想である。だから其の積りで考慮せなければならぬ。

此の外新聞雜誌の社説や論説から、此の種の記事を引用すれば際限がない位であるが、此れらは總て要するに例のカイゼルの大言壯語を布衍したものである。『獨逸の將來は海上に在り』とはカイゼルの有名な壯語であるが、カイゼルには此の

種の警句が乏しくない。『獨逸の支配者の承認を經るにあらざれば、世界には何事も起る事を許さない』なども其の一つである。カイゼルは好んで此種の廣言を吐く。『朕が祖父は曾て陸軍を大成した。朕は今や海軍を完成しなければならぬ。朕の海軍は朕の陸軍と全く同等の勢力を有せしめ、吾國をして未前の發展を遂げしめなければならぬ』。これは一九〇〇年に於けるカイゼルの演説の一節である。

一部の論者は、カイゼルの大言壯語は公式のものではないと言ふ。併しながらこれは誤謬であつて、獨逸の憲法では皇帝は政治上殆ど無制限に權能を持つて居り、從がつてカイゼルは事實上宰相を兼ねて居た。故にカイゼルと同じやうなことを、責任の地位に在る大臣でも屢々言明したものである。たとへば外相ビューロー公の議會に於ける演説(一八九九年十二月十一日)にも『吾邦は如何なる强國の攻擊にも對抗するに足るべき海軍を創設することが必要である』云々の一句がある。ビューロー公は又其の後(一九〇〇年六月十二日『獨逸としては、世界中に獨逸の平和、獨逸の名譽、獨逸の繁榮を維持するために、强大な海軍を所有することが必要である』と云つて居る。つまり上はカイゼルより下は新聞記者著者に至るまで、組織的なプロパガンダに從事して居るのである。

プロパガンダに就いて好例がある。曾て佛國の海軍大臣を三回まで勤めたロックロア氏が獨逸を訪問した時、獨逸では艦隊や造船所などを隨分詳細に亘つて視察させたことがある。そこで世人は驚異の眼を開き、獨逸は何が故に『怨敵』たる佛蘭西に對して、斯く大膽であるかと怪しんだ。併しながら此れは自國海軍の優勢を誇示して、佛國を自分の味方に惹付けん爲めの謀計であつた。理窟から言へば斯る謀計の成功しそうな理由はないのだが、實際問題としては獨逸が佛國を其の羽翼の下に收め得る可能は十分にあつたのである。だからカイゼルの謀計も實はソンなに條理を外れたものではない。そこで常に政府筋の意見を代表する週刊『國境新報(クレンツボーテン)』に當時左記の如き社説が現はれた。

『佛國と獨逸との鬪爭は、徒らに英國を利するに過ぎない。故に佛蘭西は一概にアルサス、ローレンのみに注目せず、片眼をば時々他に向けて英國を注目するの必要がある。併しながら佛國は獨逸に對する積怨を釋かぬ。佛國をして怨を解かしむるには獨逸が海洋を支配するに足るの海軍を所有することを以つて徑捷とす』。

結局佛國を威嚇して、自分の味方に附けようとするもので、海軍の詳細をロックロア氏に參觀せしめた趣旨の延長である。ロックロア氏も果して獨逸のために籠絡せられたものと見えて、其の後同氏が發表した『獨逸海軍視察記』に下のやうに云つて居る。

『獨逸は多年陸軍國として發達し、海軍國として發達するには、地勢が甚だ不便であるにも拘はらず、雄大なる海軍國とならんとして居る。然うして獨逸の海洋に對する野心は、早晩英吉利と爭端を開くことを免れぬ。其の戰爭は恐らく二十世紀に於て、最も怖るべき大戰となるであろう。戰爭の結果如何に至つては、容易に斷定することを得ないが、併し獨逸が意外の程度にまで、精力と忍耐とを發揮すべきことは疑ふの餘地がない』。

伯林大學で經濟學の講座を受持つて居る、有名なシュモラー教授は、普魯西の樞密顧問官竝に上院議員を兼ねて居たが、彼は諸所の大學で講演して言つた。

『英吉利人は傲慢無禮で、冷刻を極めたる人種である。元來が海賊の子孫であるから、何處へでも押掛けて行くが、近頃は切りに政府を動かして、官民協力して侵略を敢てする。英國や米國は世界で最も自由を尊重する邦國であるといふが、近頃では然ういふ國內に却つて帝國主義の風潮が勃興して、新に經濟上の競爭國が出

來ると、極力之を排斥する。此れは其の海賊根性の致すところである。米國なども玖瑪や比律賓を征服して以來、政治上も經濟上も主義政策を一變して、帝國主義の色彩を濃厚にし、南北亞米利加の市場から、歐洲の商權を放逐せんとしつゝある。今日の英國ではセシル・ローズ式の壯士や山師が盛んに人心を蠱毒し、泡沫會社を救濟するためには、役人や新聞を買收して戰爭を起すことをすら躊躇せぬ。彼れらの眼中には正義も道德もない。少數の資本家や投機師が跋扈して、社會の有ゆる階級を犧牲に供して居る。之に反して吾々は、帝國主義や資本主義に左袒するのではない。自國の人民を維持するために、產業貿易の發達を圖るのみである。其の必要から海軍を擴張して、自國の植民地を保護し、また進んで農業に必要な植民地を獲得するに過ぎない。吾々は極端な重商主義（マーカンチリズム）に反抗して、英米佛の三大强國が、世界の富源を三分壟斷することを防遏せんとするのである。唯此れだけの目的のために、敢て重大なる負擔を忍んで海軍の擴張に努力するのである』。

今一人有名な經濟學の敎授で、ブォン・シェフレ博士が曾て『ミュンヘン・アルゲマイネ・ツァイツング』紙で發表した一節を紹介すれば

『我邦海洋貿易の發達により、吾邦は非常な決心を以て列强と競爭することが必

要になつた。今日遠慮は全然無用である。言ふべきを言ひ、行ふべきを行ふまでゝある。思ふに英國は適當な機會をさへ發見すれば、獨逸の貿易に對して、致命的打擊を加へるに相違ない。英國は決して斯樣なことに、遠慮會釋するものではない。近くはトランスヴァールが好箇の實例である。セシル・ローズやチェムバーレンや、其の他帝國主義の人々は、今日の英國に於ける對獨思想と態度とを代表して居る』。

獨逸の大學敎授の此種の言論を蒐集したのみでも、優に一冊の書物が出來上る位である。併しながら上揭三四の實例によりて、如何に對英反感が熾烈なるかは十分に分る。そこで問題が起る。此の擧國一致のプロパガンダによりて、果して何ものを獲んとするか。或は如何にして此の擧國的感情を、實行に移すべきかと云ふこと此れである。此の問題を解決するには、少しく過去の事例に溯つて、英國と獨逸との植民政策の異同を比較するの必要がある。

英國では由來民主主義が旺盛であるから、外交の如きも開放的、從つて輿論に支配せらるゝ機會多く、其の爲めに百年の長計を樹てるとか、或は猾詐變權を弄ぶと言ふが如き餘地に乏しく、單に其の時々の事情に應じ、正直に此れが對策を講ずる

に止まる。然るに此れに反して獨逸は露西亞と同じく、一々輿論に聽從するの必要はないから、政府當局の一存で秘密外交を行ふことも出來れば、遠大なる方針を劃策することも出來る。例を擧ぐれば普魯西政府は探險隊を派遣して、支那と日本と暹羅とを調査させた。此れは一八六〇年のこと。一行には有名なる地理學者フォン・リヒトホーフエンも在つた。然るに種々調査の結果リヒトホーフエンは、支那に於いては膠州が最も有望であると報告したものである。此れが前云ふごとく一八六〇年のことであつた。然るに其の後三十餘年を經過したる一八九七年に於いては、二名の獨逸宣教師が支那で殺害せられたのを口實として、獨逸は迅雷耳を掩ふに遑なき底の果斷を以て、膠州を占領して終つた。三十余年前のリヒトホーフエンの建策を實行した譯である。英國の外交ではとても斯んな遠大な計劃は樹てられぬ。また斯の如く大膽機敏なる行動を取ることも出來ぬ。

米西戰爭(一八九八年)が起つたときにも、開戰後僅か二三日にして、例の『國境新報(グレンツボーテン)』に左の如き記事が掲載せられた。

『亞米利加在住の獨逸人は、二千萬人に垂んとするが、その多數は全然亞米利加化せられて、母國の國語をさへ忘れて居る。併しながら彼れらの血管には、獨逸の血液が流れて居るから、相當の手段をさへ盡せば、彼れらの魂を呼び返して、獨逸の魂に復歸させることが出來る。此の度亞米利加は西班牙と開戰するに至つたが、亞米利加で最も勇敢なるは獨逸系の男子であるから、彼れらは義勇兵として高價なる血稅を拂ふに相違ない。獨逸系米人に比すれば英國人や黑人種なぞは、到底烏合の衆で物の役に立たぬ。斯くの如く貴き血稅を拂ふのは獨逸人であるのに、其の利益を收めるものは英國系の米人である。つまり獨逸人は椽の下の力持ちを勤めさせられる譯である。唯在米獨逸人中に歸化せざる者三百萬人以上あり、一般に亞米利加を悅んでは居らぬ。だから此の間に立ちて巧妙なる政策を施さば、此れら三百萬人を利用して、英國系米人に一泡吹かせることは、極めて容易な業である』。

此れは單に米國に對して彌次るのではない。泡よくば米國を窘めて、何らか植民地でも獲得しようと云ふ考へが、陰微の間に動いて居るのである。唯此の時は獨逸の植民的野心は、尙ほ未だ具體的とならず、上下心を一にして外に向つて突貫すると云ふ迄に進んで居なかつた。從つて米國に對する飛躍も餘り試みられなかつたが—一つの理由は米國の旗色が頗る振つたからでもある—其の後南阿戰

爭が起つた場合には、獨逸の植民政策は既に已に確立し、上下擧つて阿非利加に植民地を獲んと渴望して居た際であるから、獨逸の暗中飛躍も頗る活潑潑地たるものがあつた。獨逸は夙に一八八四年すなはち其の植民政策の極めて初期から、南部阿非利加に著眼し、サンタ・ルキアに根據地を求めてボア共和國と密切な關係を結び、以つて阿非利加の覇權を掌握しやうと畫策して居た。此の目的を達する爲めにビスマークは其の子を倫敦に派遣して、英國政府と交渉せしめた事があるが、不肖の子であつた爲めに、終に折角の計畫も水泡に歸した。併しながら獨逸は此れにも懲りず、植民地を獲るは阿非利加に於いてするが最も捷徑であることを固く信じ、隱忍して機會の再來を待受けて居た。此處に突如として起つたのが南阿戰爭である。獨逸に取つては願つたり叶つたりの事件である。そこで一朝ジェームソン事件の出現するや、獨逸はボア共和國との提携が未だ完からざるに先だちて、英國がボアを征服せんことを憂慮し、カイゼルは有名なる電報をボア共和國大統領クルーゲルに送り、大にクルーゲルを激勵した。蓋しカイゼルは此れによりて英國を威嚇して、ボア征服を中止させることが出來るものと信じて居たのである。然るに事志と違ひ、カイゼルの電報は反つて英國をして警戒を嚴にせしめ、其の軍

を急遽ボアに對し進軍せしむるの結果を生じた。當時獨逸が此の點に於いて、如何に誤解の下に働らきつゝあつたかといふことは、例の『國境新報』の記事に徵して明かである。すなはちジェームソン事件の後數月(一八九五年六月四日)同紙の社說に曰く

『ボアの諸國は明かに獨逸に傾いて居る。萬一ボアの諸國が英國の爲に併呑せられるやうな事があつては、獨逸は阿非利加に農業植民地を獲得すべき通路を悉く奪はれてしまふことゝなる。英國は果して斯くの如き事を爲し得るか。唯だ獨逸の決心一つで、如何やうにもなる』。

すなはち獨逸が聲援を與へさへすれば、ボア人は英國に征服されないと考へて居たのである。餘り已惚れの過ぎたるは、歷史が物語つて居る。

南阿は獨逸の久しく垂涎した土地で、獨逸は全世界に理想的植民地を物色した後に、此れならばと南阿に白羽の矢を立てたのである。獨逸人の考へでは南阿はブラジルよりも有望であると考へた。然して南阿を獲るには、ボア人と結托して英國勢力範圍を掠奪するのが、最も便利であると考へた。『國境新報』も南阿非利加を占領するのは、如何なる點から考へても、南ブラジルを所有するに優る。南阿非

利加の植民地は、此れを略取するに最も適切なる地位に在るといひ『植民年鑑』にも南阿非利加の住民の大部分は低獨逸(和蘭)から移住したもので、彼れらを懷柔して英國に對する反感を使嗾するのは、獨逸に取つて容易なる必要事であると記して居る。此の南阿が終に獨逸の手から滑り去つたのである。

南阿非利加の植民に先鞭を着けたのが、果して獨逸人なりや否やは疑問である。併しながら獨逸の新聞なぞは、宛も獨逸が南阿非利加に優先權を有するもの丶如くに論じ立て、國民も催眠術にかゝつて終に一概に此れを確信するやうになつた。故を以つて英國がボア政府に交渉して、英國の宗主權を承認させやうとするに及ぶや、獨逸の重立つた新聞は、競つて英國排斥の記事を掲げ、ボア人に聲援を與へて獨逸保護後援の下に英國の要求を拒絶させやうと試みた。然るに英國は斯んな事には委細頓着せず、終に兵力に訴へてその要求を貫徹するに至つたので、獨逸は開いた口が閉がらぬと云ふ笑止な狀態に陷つた。一時は獨逸も兵力に訴へて、英國の行動を阻止しやうかとも考へたらしいが、海軍の劣勢に顧みて終に此れを斷念した。獨逸が一八九八年に海軍の大擴張案を樹て、戰艦十七隻の建造を開始したのは當時米西戰爭に干渉しやうとして、海軍の微力を嘆じた事實と、密切な關係

を持つて居るが、更に一九〇〇年に、再び海軍の大擴張を企てたのは、ボア戰爭の場合に於ける苦い經驗と關聯して居る。一九〇〇年の海軍擴張は明白に其の目的を語つて『最大有力な海軍國と交戰する場合、獨逸の優勢が脅かされるから』此れに備ふる爲めだと云つて居る。此の擴張費實に十億萬圓を計上せるが、當時國民は一齊に英國の優勢を嫉視するやうに敎育されて居たから、十億萬圓の大豫算も難なく議會を通過した。尤も此の際社會民主黨だけは海軍擴張に反對した。そこで一部の論者は、獨逸は社會黨の妨害を受けて、植民政策を意の如く遂行することが出來ないなどゝ云ふが、併しながら社會黨は海軍擴張にこそ反對すれ、武力に訴へて海外市場を開拓すること及び英國の勢力を殺ぐことには反對する者ではない。此の點は擧國一致である。『社會主義月報』に掲載せられた左記の文字を一讀すると、此の間の消息は明白に分る。

『獨逸の國力を伸張せしむる爲めに、有力なる海軍を所有することは、勞働階級に取つても全然緊要である。吾邦の輸出が毀害を受くれば、勞働階級も亦毀害を蒙る故に、たとへ武力を用ひても、貿易を發達させなくてはならぬ。すべて海外市場を支配するには、軍備の後援が必要であつて、獨逸の勞働階級が海外市場に勢力を

伸ぶると否とは、一に軍備の强弱によつて定まる』。」

社會黨の態度すら斯くの如くであるから、ましてや一般國民の海軍擴張熱と、英國反對熱とは、炎々として灼熱した。此に於て政府も聊か其の餘りに露骨に過ぐることを危惧し、之を緩和するのに、海軍の擴張は必ずしも英國を對敵とするのではない、寧ろ大陸諸國に備へんがためであると、頻りに辯解に努めたが、併しながら民間でも海軍部内でも容易に之を信用せず、飽くまで獨逸の對敵は英吉利であると確信して居た。蓋し獨逸の海岸は其の特殊の地形の關係から、外敵の追擊を受ける危險に乏しい。たとへば前の司令長官ストッシ提督の回想錄(一八八八年)の一節にも『北海は天然の要害である。年々砂洲の形狀が變化して行くから、一旦浮標を撤去すれば、如何に海洋の地理に明るい海賊でも、此の紆餘曲折を極めた水路へは、到底入込むことが出來ない』といひ、また海軍大臣ホルマン提督も、一八九七年に道路及び水路委員會で『我邦は海岸防禦の爲めには海軍を必要としない。我邦の海岸は天成の要害である』と述べて居る。一九〇〇年の海軍大擴張案は、すなはち其後僅々三年にして提出せられたものであるから、海軍擴張の目的が大陸諸國に備へるに在るといふが如きは、如何にしても信ずるべからざることである。

以上述ぶるところによつて考ふれば、獨逸の海軍擴張が、植民及び商業の擴張發展を目的とし、英國または亞米利加或は兩者を對敵と假想したものであることは明白なる事實である。然らば獨逸は如何なる方法によりて、英國に挑戰せんとして居たか。此れに就いてはゴルッ將軍が雜誌『ルンドシャウ』に寄せた一文がある。將軍は獨逸の軍事當局として最も有力な人物であるから、その所言を熟讀玩味すれば、獨逸の軍事當局が大體に於て、如何なる精神に動かされて居たか、其の傾向を窺知するに足るものがある。今その要點を左に譯載する。

『世人は往々にして獨逸と英吉利とは到底交戰することが出來ないと言ふが、吾輩は此種の意見に反對せざるを得ない。英國は平時に於てもまた戰時に於ても、海軍の勢力を廣大な領土に分配する必要があるから、本國だけの海軍は、之を地中海や印度洋や、西印度や太平洋に於ける勢力に比較すると、意外に薄弱である。此の勢力の分散といふことは、英吉利の一大弱點である。此れに反して獨逸の地位は有利である。海軍は小さくても、之を歐洲に集中することが出來る。我邦は植民地を保護するの必要がない。歐洲に於いて勝利を得さへすれば、一旦植民地を失つても忽ち之を取還すことが出來る。英國は此れと趣きを異にし印度、濠洲又

は加奈陀を失なふと、永久に此れを取戻すことが出來ない。

『現今我邦の海軍は、その勢力に於て英國の五分の一に過ぎないけれども、英本國だけを防備する艦艇は、戰鬪艦四十三隻、巡洋艦三十五隻。今後增加せられるにしても、我邦に取つては左程恐れるに及ばない。且つ陸上に於ても海上に於ても、勝敗は必ずしも勢力の多寡に依るものではなく、寧ろ能率に依るものである。

『英國の海岸には、防備の薄弱な部分が少なくないから、英國に上陸することを妄想と考へるのは甚はだしき誤解である。英國と獨逸とは距離が少いから、海軍が非常な努力を以て、暫時海上を支配さへすれば、決して上陸の機會に乏しくない』。

大體斯くの如き精神を以て、獨逸は海軍の擴張に鋭意したものであるが、其の缺點は、善良なる軍港のないことゝ、優秀なる提督の無いことゝである。無論海軍の二大根據地として、波羅的海のキールと北海のウイルヘルムスハーフエンとがある。キールは天然の良港で、優に世界全國の艦隊を收容するにも足りるが、併し東北に偏して居て、西方の攻擊に不便である。西方の攻擊はウイルヘルムスハーフエンに賴らなければならないが、同港は人工で開鑿したもので、近年更に巨資を投じて、港内を擴張したけれども、尙ほ其の規模が狹隘で、殊に干潮の場合には、巨船を

出入せしめることが出來ない。此れ別章說くが如く獨逸が和蘭の港灣に着目して、百方その獲得に腐心する所以である。ウイルヘルムスハーフエンから、水雷艇で英國に達するには三十時間を要するが、和蘭の諸港からならば、僅かに八時間で十分である。

『海洋を支配する者は貿易を支配し、貿易を支配する者は世界の富を支配し、結局世界其の者を支配する』とは、曾てサー・ウオーター・ラーレーの放つた名言であるが、今日此の言葉の精神を、最も善く體得して居るのは獨逸である。然してウオータ・ラーレーの時代に、英國が其の海軍の優勢によつて、當時植民及び貿易を支配して居た西班牙及び和蘭を壓倒せし如く、三世紀後に於て獨逸が英國を壓倒せんと試みて、終に不結果なる歐亂を起した。此れは軍國主義の敗北と云ふものもあるが、獨逸は此の主義を改むるであらうか。多少の形式は遂ふにしても、國民性が容易に變化するものでないとすれば、新興獨逸が出來た後に於いては、矢張りフリードリッヒ大王やビスマークの態度を改めないと見る方が順序である。唯だ獨逸は今回の歐亂に於けるが如く、時に此の二人者の秘策を忘れて、濫りに大言壯語することゝ丈けを踏襲した傾きがある。フリードリッヒ大王は『秘密は外交の秘訣な

り』といひ、ビスマークは『自國の實力が充實するまでは外國に挑戰する勿れ』といつた。然るにカイゼルは自身率先して、自家の野心を披瀝する。自國の充實を今少しく待つを忘れて、濫りに英國に打つて掛つた。その結果が彼れが如き失敗である。今後の獨逸は恐らく痛切たる教訓を、歐洲戰爭より得來るであらう。

第四章　失敗せる對英策

從來兎角昂奮勝ちであつた英獨關係は、世界大戰勃發前數年の間益々緊張して、可なり毒々しいものとなつた。一九一一年摩洛哥問題がカイゼルによりて再開せられ、兩國の緊張はいよ〳〵絶頂に達して、將に破裂せむばかりになつた。すなはち兩國は戰爭の準備を嚴にし、海軍の活動を熾んにし、英國の水兵も獨逸の水兵も、今か〳〵と戰爭の合圖に待ち焦れると云ふ狀態に立到つた。

何故に英獨關係は斯くの如くに緊張し、斯くの如くに毒々しいものとなつたか。そは果して何人の罪であるか。吾人は先づ獨逸側の言明するところの見解から、其の邊の消息を傳へることにする。『獨逸は平和なる國家である。少なくとも獨逸は一八七〇年から其の翌年にかけて行はれた普佛戰爭以後平和を保つて來た。獨逸は英獨の敵視關係に就ては何等の耻づべき罪惡をも有たない。兩國の關係を茲に至らしめたものは畢竟英吉利の失策である』とは公然と獨逸の政治家や、記者や、講演者が說いて來たところである。『英國は自國の經濟的成功の爲めに獨逸を敵視し、公然と或は隱然と獨逸の滅亡に向つて努力し、以つて自己を全うせむと

する』とは數限りもない獨逸の官吏や大學教授や、雜誌記者などが斷言し來つたところである。『英國政府の立場は、英國の貿易上の敵手を仆し、進んで獨逸の貿易及び船舶の活動を奪り、世界同盟の網の中に獨逸を陷し入れて、世界に於ける獨逸の發展を妨害しようとするのである』とは幾百種の著書や、新聞や、又幾千の講壇の上から、獨逸國民の敎へられて來たところである。

英國の歷史を知つて居る者は、何人と雖も過去二世紀間に於ける英國の根本政策は、一方商業的及び植民的發展を計りながら、他方歐洲大陸の勢力を均衡せしめようとするに在つたことを知つて居るに相違無い。英國が挑みかけた總ての大戰爭は皆貿易や植民の爲(獨逸人をして云はしむれば掠奪の爲)めではなくて、歐洲に於ける勢力の均衡を保たんが爲めであつた。斯る大原則の下に英國はフイリップ二世の西班牙と戰ひ、ルイ十四世、同十五世、ナポレオン一世の佛蘭西と戰ひ、クリミアに於いて露西亞人と戰ひ、最後に西班牙と佛國植民地の征服をやつたが、此れはシーレイ敎授の云ふ通り偶然の結果であつて、佛國や西班牙に對する英國の目的そのものではなかつた。英國人が挑みかけた戰爭は、大部分積極的攻擊ではなく、消極的な防禦戰爭に屬する性質のものであつた。

歐洲大陸に於ける勢力均衡の維持は、英國の利益にとつて最も必要とする所のものである。何となれば大陸諸國の均衡を破り、以つて大陸に於ける優越權を握つた唯一の國家が、やがて其の鋒先を英國に向けて殺到すべきは、鏡を見るやうに明かなことである。又一方に堅固不拔の獨立國英國が北海に屹立して居る以上、大陸に於ける優越權が、眞實の優越權と稱せられ得るものでないから、歐洲大陸に於て優越權を握れる國家は、早晩必らずや英國と衝突して、其の眞の歐洲優越權を打ち立てようとするは明らかである。現に歷史は之を證明して居る。ジュリアス・シーザーからナポレオン一世に至るまで、歐洲に於て至上權を攫得した者は、必らずや悉く英國と戰はざるを得ない事になつて居る。國家の安寧は、其の貿易や其の植民の發展に必要なるものである。英國は歐洲の勢力が平均して居る間は安寧である。歐洲の勢力が一樣に平均して、其處に一種の無風帶を生ずれば生ずるだけ、英國は大陸から來る侵略に遭ふことなくして、その安寧を保證することが出來る。そこで英國の政策は、理に於いて侵略的ではなくて、自己保存の本能によつて動くことに存した。

ところが過去數十年の間、英國の政治家は、大陸に於ける勢力の均衡といふこと

よりは、もつと重大な、然かも前者と全然意味の異なる政策を取るやうになつた。

一世紀前英吉利がナポレオン一世と戰つた時分には、英吉利諸島は自國内の生産によつて生活を維持して居た。次ぎに前世紀の中頃になると、自國の食糧の十分の九程を、自分の手でつくつて居た。ところが今や英國は其の食する穀類の十分の九及び肉類の半分を外國に仰がなくてはならない事に立到つた。フイリップ二世や、ルイ十四世や、ルイ十五世や、ナポレオン一世はジリ〳〵と英國を兵糧攻めに會はせようと試みたものであるが、今や英國は何らの手數なしに一擧にして食糧攻めに遭はせることが出來るやうになつた。今や英國が一年間に收穫するところの小麥の量は、英國人民一ヶ月の生活を維持するに足りない。穀物の輸入を暫らくでも遮ぎられたならば、英國は直ちに飢餓に陷らなければならぬ。英吉利ほど其の食物補充の途を、他國に仰がなければならぬ國は世界に比類がない。そこで英國は此の食物補充の途を絶たれない爲めには、有らゆる勢力に抵抗するに足るだけの海軍力を有つて居なければならぬ。換言すれば英國の政策上最も大切なことは、大陸に於ける勢力の均衡を求むることではなくて、世界最强の海軍力を維持すると云ふことに變化した、獨逸人は英國の海軍力の優越權を脅かす

ことは單に英吉利の貿易や植民地を脅かすのではなくて、實に英國其のものゝ生命を左右するものであることを、寧ろ英國以上に了解して居る。一例をあぐれば『吾が國家的防禦上己むを得ぬ艦隊』と題して、アドルフ・シユレーダー氏が書いた小冊子(一九〇九年獨逸の學校で教科書として用ゐられた)には、斯ういふことが書いてある。

『六週間足らず、英國に向つて食物補充の道筋を斷絶するならば、英國の人民は餓死して仕舞ふに相違ない。英國人は十分によく此の危險を熟知して居る。貴族から勞動者に至るまで、英國人は食物及び工業の原料を輸入して、工業品を外國に輸出することは、國家最大の義務であると思つて居る。四面海に圍まれて居るところの英國の輸出入の安寧は、如何なる國の海軍よりも强大なる海軍力に依つて保護されて居る。けれども英國の要求は單に其れに止まらぬ。英國は戰鬪艦に次いで戰鬪艦を造り、その力を結合して、何時戰爭を挑みかけるやら解らないと思はれる二大强國の聯合艦隊を威服しようとして居る。その覺悟は深く英國人の精神に貫徹し、擧國一致で國家存在の問題たる此の原則を遵奉して居る』。

尙ほ茲に獨逸人の國家的思想を代表すべきものとして、前引照の一文と合せ考

ふべきものがある。それはシューベルトの云つた左の言葉である。

『佛獨戰爭の折、佛國は獨逸に優る海軍力を有して居た。當時獨逸が陸戰に於て勝利を得た爲に、佛國は水兵を上陸せしめて、自國を防禦せしめざるを得なくなつた。將來の戰爭に於いて、吾人は佛國をも露西亞をも再びこれと同樣の窮狀に立到らしめなければならぬ。吾人が佛蘭西及び露西亞と戰ふ場合に於いて、海軍の勝利は、陸戰の勝利の如く必須なるものではない。若し吾々が陸戰で破れたならば、海軍は何等の價値をも現はし得ない。如何となれば海軍に力を注いだならば陸軍が弱くなるばかりではなく、若し陸戰にして破れんか、吾が海軍は何うしても敵の陸軍に打勝つ可能がないからである。だから獨逸の海軍は、英國に對してのみ準備して置く可きは明かなことである』。

シューベルトの論文は明瞭正確なものであり、氏の獨逸の海軍策は、更に證明の必要なきまでに明々の事柄である。

獨逸の有力な論客大學教授デルブリュック氏も『デイリー・メール』紙上（一九一二年十二月）で英國が常に獨逸に對して敵意を懷いて來たことを論じ、エドウワルド・ベルンシュタインといふ社會主義の論客も、また同年末に英國と獨逸とを論じた

小冊子の中で斯ういふて居る。

『英國と普魯西、英國と墺多利は、元來親しかつた事もあればまた敵視し合つた事もある。一八七〇年獨逸が新帝國の基礎を定めた際は、英國と獨逸とは何等の軋轢もなかつた。英獨兩國間には別に此れぞといふ問題はなかつたのである。

『その後獨逸が漸次に發展し來ると、英國も茲に自己保存の本能に醒め初め、一八八三年獨逸が植民地を開拓せんとするや、茲に端なくも英國の反抗に遭ふた。けれども其の反抗たるや、必ずしも惡意あつてのことではなく、單に獨逸が英人の經濟的門戸を閉塞せるに原因せるものであつた。それも最初は英本國の反抗ではなく、英國植民地の反抗であつた。然るに英獨がやゝ關係の圓滿を缺き始めると、一八八八年フリードリッヒ三世が帝位にのぼり、帝國主義の獨逸人が茲に激烈なる反英運動を始めたから、丸で油を火に注いだやうな結果になつた。

『一八九六年獨逸外務秘書官マーシャル氏は、ボア人が獨立の共和國を維持することは獨逸の利益になると述べた。當時ボア人は南阿に於ける英國人を驅除して、此れに代ふるに獨逸の後援を以てせようといふ政策をとつた。その時分のことである、獨逸が急速なる勢で艦隊を造つたのは。一八九八年十八隻の戰鬪艦と、

海岸防禦を目的とする八隻の鋼鐵艦と、四十二隻の巡洋艦を新造すべき海軍議案が通過し、ヴィルヘルム二世は、ハムブルグに於て、吾等は切實に強力なる獨逸艦隊の必要を感じつゝありと宣言した。其の後二年、一九〇〇年に再び獨逸艦隊を二倍に增加すべき法律案が議會を通過した』。

此の一九〇〇年の海軍擴張案は、一九一七年までに竣成される筈になつて居たが、其の後一九〇五年、一九〇八年及び一九一二年に再三再四艦隊增設の新議案が通過された。獨逸の斯る急激なる準備は、單に獨立國としての自國の存在を確立する爲めに必要なと云ふよりも、寧ろ英國の世界に於ける位置を脅やかし、此れによつて何らかの獲物を贏ち得んとする魂膽に外ならなかつた。

併しながら他の一面から云へば英國と獨逸とは、又極めて親しく接近して來た。一寸不思議な現象ではあるが、兎も角も事實である。此れは外交記者として有名なフォン・ラート氏も言明して居る通りで、エドワード七世即位以前から已に英獨接近の傾向はあつた。十九世紀の八十年代に當つてビスマークが同盟政策を行なひ、此の爲め歐洲の諸國家が二團に分れた時、英國も其の二團中の何ちらかに親しまなければならなくなつた。此れは自然の順序である。然して英國の近づき

來れる一團は、實に獨逸を中心とする一團であつたのである。元來英國人と獨逸人とは人種に於ても、國民性に於ても、宗教に於ても、英國と佛蘭西、若しくは英國と露西亞などよりも頗る相似て居る。そこで英國人の大部分は獨逸と提携しようと云ふ考へを持つて居た。斯う云ふ根本的に英獨を相接近せしむる要素がある所に持つて行つて、當時植民地問題で英國は佛國及び露西亞と悶着を惹起したから、英國の獨逸を親しむ念はます〳〵強く、茲に英國の外交家は、在來一切の敵意を棄てゝ獨逸と親交を結ばふと企てた。斯う云ふ次第で一八九〇年英獨協約なるものが成立し、兩國手を携へて東洋方面及び西南阿非利加に勢力を伸ばさうとした。此の協約に次いで一八九四年英國公果（コンゴー）協約なるものが成立し、一八九七年獨逸が膠州を占領するや、英國は此れに對して樣々と獨逸に向つて援助を與へた。歐亂の際は英國は獨逸が膠州に據るを、非常なる道德的問題となしたが、實は先に自分が援助して獨逸に獲させたものである。ついで一八九九年英國は獨逸とのサモア協約を履行してサモアを引上げ、獨逸は同群島中の主要なる島嶼二つを自己の所有とするに至つた。一九〇〇年英は又獨逸と手を握つて、共に支那の利益に分與せむとて山東協約なるものを結んだ。斯くて十九世紀の最後十年間に於

ける英國の外交が、極力獨逸の好意を求めようとした形跡は蔽ふべくもない。併し乍ら芝居は英國よりも獨逸の方が上手である。英國の政治家が獨逸の歡心を得んとして盡せし努力は、結局一片の嘲弄を以つて獨逸から酬ゐられた。獨逸は自分が發達する爲めには、如何なる手段も撰まぬ。英國が歡心を求めて來れば、獨逸は無論自己に便利だから此れを容れる。併しながら此れは何も英國を德として居るのではない。單に自分の發展に好都合だから、此れを取り用ふると云ふまでゝある。此れを知らないで、獨逸は眞の味方になつたなどゝ己惚れるから、英國は獨逸から嗤はるゝのである。取引きする對手を知らなかつたのは、英國の不覺である。

然れば英國の政治家は獨逸と親和せんとして、可惜十年を無駄骨を折つたと氣づいた時、然して獨逸人が自分等を嘲笑して居ることを知つた時、就中獨逸の强大な艦隊を眼の前に目擊したる時、流石遲重の英國人も顏色を變へて怒つた。然うして獨逸と親近することは、到底見込がないと呆らめて終つた。併しながら呆らめる迄に、英國は英國の敵たるべく獨逸をして準備を爲さしめたのである。英國は事情が分ると地段太踏んで悔やしがつたが、此の時は獨逸の目的は既に達せられた後であつた。英國としては飼犬に手を嚙まれた以上の失體である。

過去二十年間以上、獨逸は其の人口の增加につれて、植民地を開拓することに努力した。然して獨逸植民地の大部分は、彼のビスマークによつて開拓されたものである。尤もビスマークも最初の間は、國內及び隣國との關係に沒頭して、力を植民政策に用ふることが出來なかつた。それが統一せる獨逸帝國が造られ、對內及び對隣國關係もやゝ整理の緒につき、獨逸帝國の人口が急激の增加を爲すに及んで、從來國內及び隣國關係に欝屈せる勢力を擧げて、此れを植民政策に轉換したのである。だから其れ迄のビスマークの政策原理は、歐洲大陸に自國の安全を保證せしむることに存し、海外に於ける利益よりも、遙かに多く大陸に於ける利益に着眼し、英國に反して海外植民政策をとる事を拒絕し來つた。此れは自分の羽翼未だ全く整はざるに、英國に對抗して英國と同一の政策に出づることは、只英國の反感を買ふばかりではなく、又積極的に自國發展の爲めに損失であると考へたからである。此れはつまり獨逸の雌伏時代とも稱すべきものである。そこでビスマークは英獨兩國間に、外交上の意見が齟齬することがあつても、英國に對して懇情を以つて此れに接した。一例を擧ぐれば一八八四年三月二日、英獨の悶着に對し

て彼は斯ういふて居る。『予は此の事件を平靜と友情とを以つて解決せんと努めつゝある。英國が獨逸を憎惡して居ると思ふのは誤りである』と。

その後數年ビスマークが隱退を餘儀なくせらるゝ少し前(一八八九年一月二十六日)彼れは英獨のザンジバール悶着に就いて議會で斯ういふて居る。

『予はザンジバールの王(サルタン)に對して、獨逸が英國と反對の態度を取るべきことを絶對的に否認する。吾人にして英國を了解するに至らば、吾人は當然英國と一致してザンジバール問題に當るべきである。予は英國民が個人として吾々に對して、反抗的態度に出づることを、一向に齒牙にかけぬ。ザンジバール及びサモアに於いては、吾人は全然英國と同一の行動に出づべきである。吾等は兩國が手を携へて進み、相互の關係を永久に繼續すべきを希望するものである。英國植民地の利益は、到る處で吾人の利益と齟齬し、英國植民地の官憲は、屢々吾人の利益を敵視する。けれども獨逸政府は全然英國政府と一致して働いて居る。吾々は絶對に結合して居る。予は兩國の調和を維持し、兩國の協同事業を繼續せんと固く決心して居る。英獨兩國間には何等の相違もなく、吾人と同盟せんとすることは、英國の傳統的精神とも云ふべきものである。英國が吾等の同盟國だといふのは、決

して外交的の言辭を弄したものではない。兩國は少なくとも過去百五十年の間、手を携へて進んで來た。予にして獨逸が既に英國の友情を喪なへる事を發見するも、予は尙ほ少なくとも英國の好意を失はざらんことに努力するであらう』。

近代獨逸は幾つとなくビスマークの銅像を立て、ビスマークの演說集や、書簡集や、追想錄を出版して幾十萬版を重ねしめた。ビスマークの著書はゲーテやシラーの詩集と共に、國民の書架を飾つて居る。けれども近代の獨逸は必らずしもビスマークを學ぶものではない。野心はビスマークと同等もしくは以上に持つて居るかも知らぬが、此れに到達する手段に至つては、到底ビスマークの深謀遠慮達識に比すべくもない。近代の獨逸はビスマークの樣式を眞似て、其の精神を喪なつて居るものである。ビスマークの後を嗣いだ獨逸の外交家政治家は、頗るの近視眼で殆んど十年十五年の先きが見えず、爲に終に三國同盟の結合を弛め、世界に敵視され、孤立の狀態に陷るの不謹愼を敢てした。ビスマークの云ふやうに、英國が獨逸の傳統的友邦であつた事は爭ふの餘地がない。獨逸が海外に發展するやうになると、英國の友情は漸次に冷却する傾向を持つて居るのは事實なれども、然

りとてビスマークの稱する英國の好意位は繋ぎ留め得べき道理である。傳統的友邦を變じて、積極的敵國たらしむる外交は、何うしても此れを弄した獨逸の失策と云はざるを得ぬ。此の點に於いてビスマークの前にビスマークなく、ビスマークの後にビスマークなしと云ふべきである。

ビスマークがウイルヘルムス街の支配權を持つて居た間、獨逸の外交は確かに二つの大なる特質を發揮して居た。すなはち賢明にして堅實、遠慮達識の政策が行はれた事と、外交の局に當る者は、何れも智慮に於ても手腕に於ても最も卓越した人物で、其の歩める道筋に少しの失敗も無かつた事これである。然るに近代獨逸の外交は全然此の二點に於いて失望の歴史を殘し、國民は當局者に向つて不平を鳴らすやうになつた。然らば何故近代獨逸の外交が失敗せるやと云ふに、此れは貴族が外交の局に當つたからであるとは、公使ラッシダウ氏が數種の新聞紙上で論(一九一一年十二月)じたばかりではなく、一般識者の認むるところとなつて居る。裸體一貫から實力で鍛へ上げた男と、祖先の餘德に衣食する無能なる坊ちやんの優劣は、識者を待ちて後に知らざるなりである。

然らば獨逸がビスマークの政策を除外して英國に楯を突き、結局自國の不幸を

招くやうになつたのは何故かと云ふに、その答へは頗る簡明である。南阿戰爭以前既に獨逸は反英政策を取り、然かも英國を餘りに安價に評して居た。此れは一つは獨逸が漸次實力を備へて來たに對する自負心と、又一つはウイルヘルム二世の政策のお蔭である。獨逸では既に多年の間大學教授や、學校教師や、政論家は英國人が貪慾で、自分を護ることに卑劣である事、從つて彼れらは昔しのカーセージ人のやうに愛國心があるでなく、國を護るために雇つた兵卒の力に頼らなければならないといふやうな事を敎へて來た。彼れらは又英國植民地に於ける英人も愛國心など云ふものはなく、只自己の利益の爲めに母國に纏綿して居るに過ぎないから、結局英帝國の解體は免がれざること、米國の如きが好例であると敎へ來つたものである。此れは英國と獨逸とは違ふと云ふお國自慢も手傳つて居る。ロシエルにせよ、トライチユケにせよ、シユモラーにせよ、その他有名な獨逸の思想家は殆んど擧つて、此の見解を抱いて居た。斯くて獨逸の反英政策は誤謬的見解の上に樹てられ、南阿戰爭當時に於いて、英國植民地が軍隊と軍資を惜しまず、武士的精神を發揮して本國を援助せるにも拘らず、此の誤謬的見解を改めようとしなかつたのは、可なり念が入り過ぎて居る。個人でも國民でも餘り天狗になると、得て

斯んな失敗をやる。南阿戰爭に次いで加奈陀や、濠洲や、新西蘭などが有力なる軍隊や艦隊を組織して、母國の爲めに盡すやうになつた時でさへ、獨逸は依然として自分の誤謬を改めようとはしなかつた。獨逸人は反つてます〳〵誤れる見解に確かめらるゝに過ぎなかつた。歐亂の敗因は實に茲にある。倫敦『デイリーテレグラフ』記者は獨逸皇帝との會見の記事を發表(一九〇八年十月二十八日)してカイゼルは獨逸國民の大多數に反して、英國の眞實なる友人であると述べた。カイゼルが英國に對して好意を持つて居ると云ふ此の記事は、獨逸の國家主義者をして頗る激昂せしめた。新教教會中の最も有力なる『福音ルーテル教會新聞』は同年十一月に斯ういふ一文を發表した。

『皇帝は極力英國の好意を得んと努めつゝある。此の努力は吾人にとつて、甚だ感服し難きものである。併しながら斯る政策は、吾人が英國と戰はざらんとする間は必要である。然れども今や獨逸は有力なる艦隊を新造すべき必要を覺つて居る。吾人は進んで此れが經營に努力し、英國が吾人の有するよりもヨリ有力なる軍艦を新造しようとしても、之を動かす機關手も又水兵も無いやうになるまで止まつてはならぬ』。

此の一文はビスマークの親英政策を棄てたる獨逸が、最近二十年以上英國に對して採つて來たところの政策を數行の中に言ひ盡して居る。英國はその要求に應ずるだけの水兵を有しないとは、獨逸一流の識者間に一致せる意見であつた。それは英國の商船には、英國人の水夫が著しく缺乏して、スカンヂナヴイア人などを幾千人となく雇ひ込んで居るから、此の狀態を基礎として歸納した結論である。ところが曷んぞ知らん、英國の海軍に水兵が不足するなど云ふ事は絶對的になく、一人の水兵を募集すると十人位の應募者があると云つた盛況である。斯う云ふ間違つた基礎の上に、重大なる國家政策を築いて居るのは、獨逸人にも似合はしからぬ事柄である。

斯る過誤を基礎とせる獨逸の對海外政策及び反英政策が、獨逸に不幸を齎らすべきは當然のことである。其の不幸と云ふのは、獨逸の存立を脅やかされ、折角ビスマークが統一した獨逸が解體瓦解すべしと云ふこと此れである。此の不幸は今回の戰亂で遺憾なく發揮せられた。思へ佛國は決してセダンを忘るゝものではない。折もあらば復讐せんと、常に嫉刄を磨いで居る。露西亞は大たいに於いて佛國と結托して居る。伊太利は獨逸を信せず、墺多利は一七四〇年から一八六

六年まで普魯西によつて侵害され、且つ普魯西から獨逸聯邦に於ける主要な地位を剝奪されたことを忘れて居ない。此れが大戰前の獨逸の地位である。獨逸が隆々として國運の盛んなるや、すなはち刀を鞘に納め、口を拭つて知らん顏をして居るかも知らぬが、一度好機の到來するや、決して指を啣へて傍觀して居るものではない。墺多利は獨逸に對して何らか劃策する前に、自國內の騷動が起つて拾收に困しんだが、伊太利は豫定の如く、利を遂ふて獨逸を棄てゝ協商側に趨つた。二重王國は解體して獨逸族の新墺多利が出現し、此れは普魯西と合同せんとする形勢にある。協商側が此の合同を妨げんとして、新獨逸憲法第六十一條の修正を要求するなどは狂氣の沙汰である。斯くの如く墺多利は普魯西と併合を希望して居るが、獨逸聯邦を形ち造る他の諸國は、今や頗る歸趨に迷つて居る。巴威（バイエルン）などは明らかに普魯西反對獨立の旗幟を揭げて居たが、自國內に騷亂が起つたのと、いま一つは協商側が獨逸聯邦全體に亘りて頗る壓迫を加へるので、恐らく獨立の旗幟は撤回されたやうである。併しながら普魯西の優勢に對しては、今も尙ほ確實に抗議しつゝある。聯邦を造るなら眞に民本的の聯邦にするが宜い。普魯西化せられたる聯邦は眞平御免であると主張しつゝある。普魯西が專制的威權を揮ふ獨逸でなければ、これは在來の意味に於ける獨逸ではない。新らしい別箇の獨逸である。つまり舊來の獨逸は土崩瓦解されたと云ふことになる。

獨逸の政策が反英と云ふ事に決まれば、英國は寧ろ此れを歡迎する理由を持つて居る。ビスマークのやうに親英政策を振り翳して來られるのは英國は寧ろ迷惑を感ずる。況んや其の親英が便宜上の親英であるに於いてをやである。味方の假面を被つて居る敵よりも、正々堂々敵と名乘る者の方が、待遇上極めて容易である。獨逸の有識者が云つたやうに、獨逸の廢頽は英國の貿易や實業を利することになるのであるから、英國は寧ろ努力の標的の明瞭になつたのを喜んだ。獨逸を滅ぼしさへすれば、英國は當分それで安泰である。歐洲均勢の牛耳を取る獨逸を片づければ、露と佛とは自然に勢力を增進して來るから、英國は茲に一躍して歐洲大陸に覇を稱することになる。此の通りの事が、注文通りに今回歐亂の結果として出現したのである。特に英米佛同盟は、英國の國境をライン河まで延長したと同じ結果を生ずる。國際政局の英國は今や旭日冲天の概ありと云ふべきである。

そこで英獨關係は今後改善することが出來るか否かの問題が起つて來る。先

づ此れを心理的に見れば、不幸にも英獨兩國の間には深酷な相互の不信用が存在して居る。英國人は獨逸人の發展を惡み、その滅亡を招來せんとするものであるとは、獨逸人が屢々口にするところで、又巴里講和會議の結果から見ると、必らずしも反對は出來かぬる。英國は獨逸の滅亡を見ずんば已まざるの決心であるらしい。然るに轉つて英國人側の主張を聞くと、獨逸の外交は全然間違つて居る。獨逸の思想家や出版物は、皆獨逸人をして英國を敵視せしめんことを目的として居る。獨逸の企圖も、獨逸の備防も、此れ皆英國を目標として行なはれつゝありとは、英國人の常に信じて疑はざる所である。斯う心理的に乖離して終つては、兩者の和解はなか〳〵困難と云はざるを得ない。

國際聯盟による軍備の制限が有効に行なはるれば兎も角、然らざれば獨逸は矢はり武裝に汲々と云ふ狀態に陷ると見るべきである。然かも獨逸は此れにより て國民の安寧を增加することは出來ない。獨逸が海軍擴張に力を盡せば、英國も亦吾劣らじと海軍の擴張を怠らなくなるに相違ない。斯くては獨逸の海軍擴張は、兩國の敵意を緊張させるばかりである。だから英獨關係の改善は、獨逸が海軍力を制限することを以つて根本原則とする。

獨逸は一九〇〇年、續いて一九〇五年、一九〇八年に再三海軍擴張案を提出して悉く可決され、一九一七年までに其の竣成を期して居た。此の案にすれば一九一二年から同一七年に至るまで、毎年二隻の大戰鬪艦を造ることになつて居たが、一九一二年に又もや海軍擴張案が議決され、一九一二年から同一七年に、至る迄、毎年三隻の大戰鬪艦を建造することに改められた。斯くの如く獨逸が六年間に十八隻の軍艦を建造するならば、英國は此れに倍加して三十六隻の戰鬪艦を造る。此れは英國に取つては苦痛に相違ないけれども、獨逸が公然と英國に挑戰しつゝ海軍を擴張するならば、英國は如何なる苦痛を忍んでも、獨逸よりも優勢なる海軍を維持せなければならぬ。斯うなつては、ゲーラの國とセークスピーアの國とが友情を以つて協同すると云ふことは、殆んど不可能とならざるを得ない。

そこで獨逸にして眞に英國の敦厚なる親交を冀ふならば、先づ此の海軍上の挑戰を棄て、又他意なきを示さなければならぬ。獨逸が英國を假想敵として、此れに對する施設を怠らぬ以上、英獨の關係は常に緊張するものと見なければならぬ。此れまでとても英國にして獨逸の目的とする所が、平和的のものたるに過ぎない事を了解したならば、例へばバグダッド鐵道などに對しても、異なつた感情を以つ

て見たに相違ない。併しながら何分にも獨逸の目的は萬事が武斷的であり、若しくは外界から武斷的であると見られた。英國などは到底獨逸とは兩立せないとまで考へさせられた。斯うなつては到底衝突の外には途はないのである。

併しながら獨逸の立場から見て、英國に對抗することを斷念し得るやと云ふに、此れは餘ほど困難であると云はねばならぬ。感情問題も無論あるが、經濟問題から考へて、矢張り獨逸は英國を料理せんことを冀ふに違ひない。無論獨逸が弱くて意を海外に伸ばす能はざる場合は別問題である。恐らく獨逸は此の場合無抵抗主義に隱れて、英國の鋭鋒を避けようと試みるに相違ない。併しながら漸次獨逸が富强となり、然して其の時まで英國が現在の國力を維持して居ると假定したら、英獨兩國は又もや衝突の憂ひを持つて居る。蓋し舊國は常に現在維持を利益とし、新興國は現狀打破によるに非ずんば、到底自己の運命を開拓することが出來ないからである。

此れを要するに英獨兩國は、一方が弱くて一方が强ければ無事に治まるが、然らずして兩者がやゝ同樣の勢力を得て來ると、在來の歷史を繰り返して緊張する事になる。唯其の間に第三の要素が出て來て、此れが兩國の緩衝地帶を形造る場合

は例外である。第三の要素とは英獨が互に爭はずして、此の爭ひと各自の野心とを、或る程度まで充たし得べき土地を指して云ふ。露骨に云へば例へば露西亞の如き國を犧牲として、此れに獨逸の發展を許し、其の代りに英國に對する獨逸の敵意を鈍らしむることである。此れは何も露西亞と限つた譯ではない。露西亞は假りに引用したまでゝ、獨逸の野心を滿足せしめ得るものならば露西亞でなくとも何處でも宜いのである、斯う云ふ妥協が成り立てば、茲に英獨の關係は在來の夫れから一轉して新生面を開く事となるが、併しながら斯る局面の展開は未だ其の曙光だも認め得られぬ。英國もまだ〳〵獨逸を飽くまで窮迫するの態度を改めない。獨逸も英國に對する復讐戰を夢みて居る。兩國の態度が斯くして繼續する以上英獨が妥協することは、先づ以つて絶望と云はなければならぬ。彼れ我を殺すか、我れ彼れを殺すかと云ふのが兩國の相互に對する態度である。

第五章　失敗せる關稅戰爭

獨逸が自國の競敵を窘迫するに方つては、無論手段を撰まぬ。或は時に相手を撰まぬかにも見える。つまり四國悉く敵なりと觀じて居るかに見える。摩洛哥事件を惹起して佛國に勢力を浪費させたる、日露戰爭を激發して、露國に失敗を演せしめたる、皆此れが適例である。獨逸は又、同一の筆法を以つて、露西亞と英國との關係を攪亂し、佛國と英國との親善を阻隔して屢、危機に瀕せしめた。

獨逸の身になつて見れば、英國が帝國主義を採用して、廣大なる屬領を統一すると云ふことは決して好ましい現象ではない。殊にチエムバーレン氏の保護政策帝國主義政策が著々實現せられるといふことは、獨逸に取つて最も嫌忌すべき現象である。英國が本國と屬領とを糾合して、此處に一大關稅同盟を組織せんことは、獨逸輸出貿易の破壞を意味する。獨逸の製造工業此れが爲めに不振に陷り、やがて國力急轉し英國の背後に墜ちざるを得ない。且つや大英帝國の經濟同盟は、更に一歩を進めて、一種の政治同盟となるの端緒であるから、然うなつた曉には獨逸は益々手も足も出なくなる譯である。英國に於ける大勢は、今や正に獨逸の好

まざる方向を取りつゝある。

戰前の獨逸は鋭意英國海軍の雄勢に對抗しつゝあつた。此れは一九〇〇年の海軍擴張案の說明が、明白に表明して居る。併しながら獨逸は英國本國だけを相手にするならば、或は戰勝を博するかも知れぬが、その屬領までも相手にして、到底勝算なき事を知つて居た。そこで獨逸の英國に對する策戰は、先づ英本國と其の植民地との統一を妨害するに在つた。獨逸の加奈陀に對する態度が其の好例である。今聊か其の間の消息を窺ふことにする。

一八九七年五月十四日のことである。當時伯林に駐在して居た英國大使サー・フランク・ラッセルスが、當時外務大臣であつたソールスベリー卿に左の如き報告を發した。

『本日午後の會談中マルシャル男爵の語るところに依れば、男爵はハッツフエルト伯爵に電訓を發して、伯爵をして閣下に會見せしめ、今回加奈陀が本國の製品に對して特惠待遇を賦與せんとするに對し、交涉せしむべしとのことなり。男爵は通商條約(一八六五年)第七條を朗讀し、此の條項は明らかに獨逸と加奈陀との通商關係を規定す。若し加奈陀にして英國に對し、特惠待遇を賦與するに於ては、獨逸

も亦た此れに倣つて、如何なる條件を提出すべきやも知れぬと語れり。余は閣下が此の點に關し、獨逸の態度重大なるものあるを注意せられんことを希望す。尚ほ男爵は一八六五年の通商條約は英本國との間に締結せられたるものなるも、本國政府は加奈陀の立法を支配すべき權限を有するが故に、英國政府は該條約の精神を實行するの責任あることを主張したり』。

すなはち加奈陀が其の本國たる英國に經濟的優先權を與へんとするや、獨逸の政府は此れに反對し、且つ英國政府に向つて、加奈陀を『支配』せんことを懲戒したのであるが、此れが抑も〳〵獨逸の策略である。英國が浮かと獨逸の暗示に動かされて、加奈陀を支配せんと試みようものなら、夫れこそ英國と加奈陀との間に由々しき紛爭を惹起すること、恰かも米國獨立前の英米關係の如きものとなるであらう。英國と其の植民地とを喧嘩させようと云ふのが、獨逸苦肉の謀計である。

然るに此れと同日倫敦駐劄獨逸大使ハッツフエルト伯爵は、本國政府の命令により頗る嚴重なる句調を以て、左の書面をソールスベリー卿に送つた。

『帝國政府の聞知するところに依れば、加奈陀政府は去月二十五日以後、英國の製品と獨逸の製品との待遇を區別し、英國の製品に對しては關税二割五分を輕減し、獨逸の商品に對しては、此れに均霑せしめざることに決定したりと云ふ。

『本官は本國政府の命令により、閣下に通告するの光榮を有す。帝國政府の見るところに依れば、一八六五年五月三十日を以て、關税同盟（ツオルフエレアイン）と英國政府との間に締結せられたる條約第七條の明文と牴觸し、英國屬領に於て、我邦と貴國との商品を同等に待遇すべしとの誓約を、無視せるものなること疑を容れず。

『此を以て本官は閣下に對し、英國政府の名義を以て、速に加奈陀政府の行動に干渉し、條約の蹂躙を中止すべく相當の措置を採られんことを要求す』。

英國政府は此れによつて、獨逸政府が加奈陀の特惠關税に反對することを知つた。そこでソールスベリー卿は伯林駐劄英國大使に訓令を送（一八九七年六月二十八日）り、英國政府は一八六五年の條約に修正を加ふべき意志あることを通告せしめた。其の際ソールスベリー卿の書添へた説明に依れば、英國は常に其の自治領の關税上の獨立を尊重し、曾て之を毀損したことがない。一八六五年の條約にも無論自治領の經濟的獨立を抑壓しようと云ふ意味は含まれて居ない。併しながら第七條の規定は、英國の本國と屬領との通商關係の障害となることを發見したから、此れに修正を加ふることに決定したのである。

そこで條約の改正に關して、獨逸政府との間に交渉が開始せられ、英國政府は如何にもして、第七條の規定を廢止せんことに努力したが、此れに反して獨逸政府は英國が加奈陀に牽制を加へ、本國に特惠を與へることを禁止せんことを要求した。然して此の要求を有力ならしむべく、獨逸は英國政府に向つて、若し英國が此の要求を拒否するに於いては、獨逸は其の英國に對して有する最惠國條款を徹回し、英國との貿易を遮斷すべしと威嚇した。つまり何處までも英國と其の屬領との間柄を、疎隔せしめんとするのである。然るにソールスベリー卿は此の明瞭に辟易せず、左記の回答をラッセルス大使に送つた。

『閣下。本月一日電報を以て通告せる如く、我が政府は到底獨逸の要求に應じ、第七條の存續に同意するを得ず。我が政府の方針として、本國と屬領との關稅關係に支障を生ずるが如き條約は一切締結する能はず。閣下宜しく獨逸政府に對し現行條約第七條は暫時といへども存續する能はず。また此れが爲に、屬領の自由に牽制を加ふるといふが如きは、我邦の承認する所にあらざる旨を委曲説明せらるべし』。

其後六月十四日に至つて、獨逸は愈々正式に『暫時』加奈陀から最惠國條款を徹回すべきことを公示した。すなはち更に改めて加奈陀を威嚇したのである。當時ハッツフエルト大使がソールスベリー卿に送つた書面の一節に『但し加奈陀にして茲に反省するところあり、獨逸の要求に應じて英國に對すると同一の待遇を獨逸に與ふるに同意せば、帝國政府も亦た加奈陀に對して、最惠國條款の適用を復活するに躊躇せず』と。すなはち茲に『暫時』といふは、或は英國政府が十二時間以内に、その態度を改めるかも知れぬと豫想したからである。然るにソールスベリー卿は此れが爲に却つて憤激し、獨逸は佛國や西班牙や葡萄牙の屬領に對して、最惠國條款を適用しながら、特に加奈陀に限つて此れを除外するとは、一體如何なる理由であるか。加奈陀は經濟上獨立國であるから、母國との間に特惠條約を締結するとも、それは加奈陀の自由であつて、此れがために獨逸の最惠國條款から除外せらるべき理由がないと、獨逸政府に向つて嚴談を試みたが、獨逸は此れに對して其れは單に『例外として』加奈陀を除外したに過ぎないと空嘯いて居た。『例外として』といふが如き漠然たる言葉では、更に要領が得られないが、外務大臣リヒトホーフエン男爵の説明に依れば此れは『すべて英國の領土に於いては、獨逸と英國との商品に對して、同等の待遇が與へられなければならない』と云ふ意味である。換言すれば

英國の屬領が獨逸に對して、母國同等の待遇を與へなければ、獨逸は英國に對して經濟戰爭を開始するといふのである。此れは何う考へても横紙破りの主張であるが、當時英國はボア戰爭のために甚だ不利益な狀態に在つたのだから、獨逸は出來るだけ押しを强く出かけたのである。

無論英國は斷乎として獨逸の要求を拒絶したが、其後一九〇三年になつて、愈々ボア共和國が英國に特惠待遇を與へることゝなり、此處に又もや獨逸は『然らばボアをも最惠國條款から除外する。また濠洲も將來之に倣ふに於いては、濠洲をも除外しなければならぬ』と云つて盛んに英國を威嚇した。當時外務大臣リヒトホーフエン男爵が、ラツセルス大使に與へた書簡は左の如くである。

『下名は三月二十五日附の御照會に對し、回答するの光榮を有す。帝國政府は適當の時機を待ち、聯邦會議をして法文に擴張を加へ、最惠國條款を英國の本國及び屬領に對し一般に賦與せしめんと欲す。

『但し政府の見る所に依れば、英國の重要なる屬領に於いて、獨逸が待遇を區別せられ、殊に獨逸の商品が將來加奈陀のみならず、南部阿非利加に於いても、英國の商品に比して不良の待遇を受くるに於いては、帝國議會の反對あるべきを以て、果して前記の方針を實行し得べきやを危ぶまざるを得ず』。

尙ほ其の際男爵は大使に對して語つて曰く『英國の屬領が續々加奈陀の前例に倣ふ場合は、獨逸は斷然英國の本國からも最惠國條款を撤去する』と。此に於いてか問題は大いに緊張し來り、英獨間の風雲轉た暗澹たるものがあつた。獨逸が特惠條項の撤回を振り翳して英國を虐めたのは、一八九七年から一九〇〇年に至るまで前後六年に亘つたが、英國外相ランスダウン卿は、流石に勘忍袋の緒を切つて伯林駐在代理大使ブキャナン氏に對して長文の手紙を送つた。その一節は左の如くである。

『加奈陀問題は要するに獨逸に於いて、加奈陀の商品をして、公平なる取扱を受けしむるを以つて本旨と爲す。然るに此の目的が達せられず、獨逸が斷然加奈陀の商品に對して、最惠國條款の適用を拒否せるが故に、英國は此れが報復として獨逸に對して關稅的除外例を設けたるに過ぎず。故に若し獨逸にして加奈陀に對する除外を取消すに於ては、我が政府も亦た直に獨逸の商品に對して、新に賦課したる增稅を撤廢すべし。此れに反して若し獨逸政府にして、その態度を改むることなく、加奈陀以外の屬領にも最惠國條款の除外例を擴張し、加ふるに多年自由貿易

主義を採用せる英國本國に至るまで、加奈陀に對するが如き差別を及ぼすに於ては、我邦と獨逸との關稅關係に、極めて重大なる事態を惹起するも、亦た已むを得ざるところなり』。

ランスダウン卿が飽くまで强硬に出たのと、此れに加ふるに加奈陀が一大決心を以つて獨逸に報復するために、新に獨逸の商品に對して特別關稅を附加したることによりて、六年間に亘りて緊張した英獨の關稅戰爭も、終に獨逸の敗北に終つた。併せて加奈陀と英國との間を疎隔しようとした最初の目論見は、物の見事に失敗して、反つて英國と加奈陀との間は昔日以上の緊密を加へた。失敗した獨逸は今度は辯明の側に廻つた。リヒトホーフエン男爵の長々しい辯明に依れば、獨逸は外交上の常例として、已上の如き行動に出でたのであるが、此れは一應已むを得ざる手續であつて、必ずしも英國と屬領との關係に干涉する意思があるのではないと。男爵の此の辯解は、ランスダウン卿が之に對して答へた長文の覺書に言ふ如く、必ずしも捨つべからず、また必ずしも取るべきものではない。

戰後の英國はチエムバーレン氏が勢力を回復せるによりて知らるゝ如く、此の獨逸の最も怖れつゝある大英帝國の統一融合と云ふに近づきつゝある。獨逸は

恐らく如何にかして此れを妨げんとするに相違ない。英國が其の本國と植民地との間に、一の有機體的關係を設立すると、獨逸は殆んど手の出しやうが無くなる。大勢が獨逸に非にして到底大英帝國の設立を妨ぐることが不可能ならば、次ぎに獨逸は出來得るだけ、此れが設立を遲遠せしめなければならぬ。然うして其の間に自己の羽翼を整へる策に出づるであらう。或は尨大なる關稅同盟を造つて、此れと對抗せんと試みるかも知れぬ。關稅戰爭は恐らく戰爭に於いて、ます〳〵光彩を放つに至らん。

第六章　去りし三國同盟

獨逸の三國同盟が大戰の試練に堪へず、伊太利をして脱退せしめた事實は、時に同盟も頼むに足らずと云ふやうな議論の例證として引用されつゝあるが、此れは同盟其のものが頼りないのではなく、伊太利が頼りないので、此れは歐洲戰の開かれぬ以前から分り切つて居た事である。つまり伊太利は自分の利益に反して三國同盟に這入つて居たので、それが機を見て峠を下りて來たと云ふまでゝある。元來同盟に無理があつたから、斯んな事になつたので、無理と知りつゝ這入つた伊太利は、無論盲目の喇りは免れぬが、又無理やりに伊太利を強要して同盟に入れた獨逸も、其の責任の一半を負擔せなければならぬ。

伊太利が三國同盟と利害關係を異にすること、換言すれば、同盟脱退の意志を間接ながら發表したのは、其の土耳其に挑戰してトリポリを占領した際に於いてゝある。土耳其は三國同盟が最も大切に取扱つて居る國である。其の國に對して相談も掛けないで、突如として開戰したのであるから、獨逸も墺多利も無論烈火の如くに怒つた。就中墺多利は其の接壤の關係上伊太利の強大となるを冀はなか

つたから、特に伊太利に對して反感を持つて居た。然るに墺國の對伊反感は、反つて伊太利から思ひ設けざる激烈なる答辯を受けた。それは伊太利が西部伊太利及びシシリー島から第八、第九、第十、第十二師團をトリポリに派遣した事である。西部伊太利及びシシリーから軍隊を引き上げて、東部伊太利は其のまゝに殘して置くと云ふのは、此れは佛國には備へる必要はないが、同盟たる墺多利には備へる必要があると云ふ意味である。何と云ふ皮肉な遣り方であらう。それのみならず伊太利は墺多利國境方面、アドリアチック海の守備を嚴にし、イザと云へば伊太利から墺多利に擊ち掛らんばかりの形勢を示した。無論一種の示威運動には相違ないが、此れは効能頗る顯著なる示威運動である。墺多利は終に此れが爲めに泣寢入りとなり、伊太利は易々として其の目的を達した。此の事あつて以來伊太利の形骸は三國同盟内にあつたが、精神は疾くに此れを離れて居た。

伊太利と墺多利との間に利害關係の矛盾不一致あることは、殆んど何人も知らざるなき公然の事實であつた。此の利害關係の不一致は、墺多利が南下アドリアチックに發展し、場合によりて巴爾幹半島を蓆捲せんとするの勢を示せることによりて、ます〳〵深刻の度を昂めて行つた。然して一方伊太利は墺國領で伊太利

人の居住せる地方を『回復されざる伊太利』と呼んで、何時かは此れを自家の懐中に藏めん事を計畫しつゝあつた。墺伊の形勢が斯うなつて來ると、同盟も何も有りはしない。世間體は同盟國なれども、實際のところは鎬を削つて居るのである。勢ひ三國同盟は空文となり、其の內容と精神とに非常なる變化を來さゞるを得ない。

凡そ國家と國家との間の約束は、個人と個人との間の約束と同一に見られる事があるが、斯る比較は決して正確なるものではない。國家と國家との契約は個人と個人との間に於ける約束とは異なり、無條件の一致を有せず、無制限の結合力を有して居らぬ。單に政治家が國家の利福、國民の發展てふ責任を脊負つて締結したところのものである。だから政治家は場合に依つては、國家と國家との一致結合を否認し、一度び調印した後、と雖も此れを拒むことがある。同盟條約はその條件的一致の點に於て、法律の如きものである。法律は時代精神に一致せざる時は自づから廢れる。此の意味に於いて合衆國上院が、ウイルソン氏の締結せし國際聯盟規約及び對獨條約を修正せんとせしは、眞意を別とする時は決して政治家らしくなき態度とは云へぬ。法律でも狀勢が異なり、履行すべからざるに至れば自

づから廢棄さるゝ如く、同盟條約も條約國が最早共通の利益及び目的を達する事の出來ない場合には、自然消滅の運命に陷るものである。近代政治家の祖とも云ふべきビスマークは例の直截簡明な言葉を以て、同盟條約なるものは無條件の一致無制限の結合力を有するものでは無くて、時と場合に依つて變化あるものであることを、繰り返へし〳〵說いて居る。

三國同盟は元と純粹な防衛的約束であつた。然して幾度か面目を新たにしたが、然かも其の性質の變化したことには理解が無かつた。ビスマークは、此の同盟が歐洲に於ける政治的變化と共に、終焉を告ぐべきことを先見して斯ういふて居る。

『三國同盟は軍略的意義を有するものであつて、條約締結當時に於て認められし三國に對する威嚇の危險を基として成立せるものである。本同盟は長い間繼續して來たが、今後と雖も繼續することであらう。然れども政治及び物質的並びに道德的狀態に變化を與ゆべき事件が發生しても、依然として永久の保證を、その同盟が與へ得るものと思ふのは、不賢明なることである。此の三國同盟は、古來幾多の三國同盟や四國同盟以上に、時と變化とに抵抗して永久に存立すべき基礎を有

しては居ない』。

矢張り何と云つてもビスマークである。彼れは理想の爲めに冷酷なる現實に眼を閉づることをせぬ。彼れは伊太利が結局佛國に親しんで、終に墺多利に背を向くるやうになると考へ、然して此の時こそ三國同盟が終焉を告ぐべきものであることを豫言した。彼れは一八八八年モリッ・ブッシに向つて斯う云ふたことがある。

『吾々は伊太利に對して無條件的の信頼を寄することは出來ない。佛國は結局伊太利に再び地盤を回復するであらう。佛蘭西と伊太利とは、佛國に政體の變化(帝政)が生じた後ばかりでは無く、よし佛國が永く共和制を維持するとしても、恐らく親交を保つことであらう。然して伊太利にして佛國との交際を回復したならばすなはち其の本色を發揮して、墺多利地方に對する欲望を更新するに至らん』。

ビスマークの此の豫言は着々的中した。其の最も大なる的中は最近伊太利の同盟脱退となつて現はれたが、此れらの事を說く前に、先づ何故伊太利が此の不自然なる三國同盟に加はつたかといふことを知るの必要がある。何となれば此れ同盟國に對する伊太利の態度を明らかにする所以であるからである。

ビスマークは伯林會議の際佛國に阿非利加の北岸チユニスを與へて、伊佛間に苦々しい敵意をつくることに成功した。チユニスはシシリー及びサルヂニアの海岸から僅か一百哩ばかり隔つたところに在り、元來伊太利が吾が所有にせんと熱心に希望して居た所である。此れには上揭地理的の關係もあるが、他の更に深い理由は、同地に住める歐洲人の殆んど全部が、伊太利人であつたことである。だから佛蘭西がチユニスを取つたといふことは、伊太利から見れば赦すべからざる罪惡であつたのである。況んや佛國はチユニスを取ると、それを直ちに軍港にしてしまつてビザルタの港を開き、一艦隊をして其處を鎭守せしめたから、佛國は此れによりてツーロンから西北の伊太利海岸、特に南方海岸を威嚇し得るの地位に據はつたに於いてをやである。ビスマークが伊太利の熱望を知りつゝ、此れを裏切つてチユニスを佛國に與へた理由は、一般に伊佛間を隔離し、依つて以つて伊太利をして獨墺同盟に連ならしめようとしたのだと信ぜられて居る。此れでも若し伊太利が獨逸にも墺多利にも趨らず、又獨墺同盟にも這入らなかつたなら、其の時こそ墺國をして伊太利に挑戰せしめ、以つて伊太利を押し潰す考へであつたとは、少數の人就中機密を知れる外交家連の稱するところである。

此れは或は事實であつたろうと思はれる。と云ふ理由はビスマークは頗る伊太利を侮蔑して居たもので、一八八〇年に彼はブッシに對して云ふたことがある。『伊太利人は戰場に斃れた者の腐肉を食する烏のやうなものである。自分の食ひ物は、他人から備へて貰つて居る。彼れら伊太利人は、墺多利に於けるチロールの地の一片が貰へたならば、一八七〇年(普佛戰爭)に吾々に賴つて來たに相違無い。當時露西亞の某外交家は「何んだ、奴等は戰ひもしないで、また何か欲しがつて居るな」と云ふたことがある』。

ビスマーク式の頗る辛辣なる罵倒である。彼れが伊太利を評價すること斯の如くであつたから、其の欲するチユニスを奪つて佛國に與へ、然かも此れを威嚇して獨墺同盟に加はらせようとしたのである。國家も此れ位見縊られるやうになつては、萬事お仕舞ひである。然らば斯んな『腐肉に寄る烏』を獨墺同盟に引張り込まふとしたのは何故かと云へば、ビスマークは別に伊太利に多くを望んで居た譯ではない。案山子よりも優し位な所で、獨墺が露佛を相手に戰爭する場合、伊太利をして一時佛國を支へしめ、獨墺は大擧して露國を拔かふと考へて居たからである。

然るにビスマークの劃策は効を奏し、伊太利はその後間も無く(一八八三年)獨墺同盟に加入して來た。此の年ビスマークは又もや佛伊兩國間を乖離せしめて、伊太利を確實に獨墺圏内に拉致せんとして地中海に關して兩國間に不和を婦つた。此の不和によりて佛國は散々に虐められ、終には我れと我が身を折つて獨逸の利益になるやうに謀つたなどは、到底鐵血宰相でなければ出來ない藝當である。此の邊の魂膽は一八六八年ビスマークが、伊太利に滯在中なる彼の使節ウセドム伯に送つた書面に就て見るも明かである。

話は少しく後に戻るが、佛國がチユニスを攫得した爲めに、どれ程深い手傷を伊太利が受けたかといふことは、一八八一年五月十二日、佛蘭西チユニス條約の調印があつた僅々二日の後、伊太利カイロリ内閣が仆れたことに依つても窺ひ知ることが出來る。爾來伊佛關係は年を追ふて緊張の度を重ねて來た。斯うなれば獨逸から云へば、まさに〆めたものである。佛國に對抗する爲めに、伊太利は蒼皇として其の海軍擴張に着手した。すると佛國でも指を啣へて引込んで居らぬ。斯くて兩國はます〳〵緊張を重ぬ、此の緊張は終に十年間も續いたところの關稅戰爭となつた。伊太利の度を失したる程度に莫大なる軍備費、佛國に對する國產輸

入の禁止令、さては伊太利の對外借款など皆此の兩國關係緊張の賜物である。すると佛國は佛國で伊太利に報復を企て、其の巴里の金融市場に於いて、伊太利に絶大の痛棒を喰はせ、其の爲めに一時伊太利は國家的破産に陷らうとまでした。

技巧を弄して、佛蘭西伊太利兩國間の接近の氣運を遮斷しようとする政策は、ビスマークが獨逸の政權を左右して居る間だけは功を奏した。然るに彼れ死して獨逸が牢乎直截なる手腕家を失ふと共に、佛國は三十年間ビスマークが取り來つた態度を眞似して、獨立的に歐洲外交界に牛耳を握るといふ有樣になつた。其の功臣は無論デルカッセである。デルカッセはビスマークが一方に於て、佛國と英國との間に造り出した不和を一掃せん事の案を樹て、然して能く此れに成功することを得た。そこでクリート島に關する條約(一八九八年)及びトリポリに關する條約(一八九九年)以後、佛國と伊太利間の理解は全然新生面を帶びて來た。從つて伊太利に取つて大災難であつたところの關稅の爭ひも消えてしまつた。地中海に關する相互の理解も、殆んど完全に成し遂げられた。斯くて佛國が誠意を以て、伊太利の爲めに盡すの明らかとなるや、伊太利もビスマークによりて施されたる催眠術から醒めて、佛國は我が友なりとの觀念を固くした。斯うなると兩國の協

調はどし〳〵と進み、佛國と伊太利とは極めて圓滿なる關係に入つた。茲に於いて伊太利は、佛國を假想敵とする三國同盟の必要はなくなつた。否必要が無くなつたのみならず、寧ろ積極的に此れから脱退する必要を生じて來たのである。

そこで順序として伊太利の外交政策を說くの必要あるが、此れには先づ伊國內に行なはれて居る二大政治思潮を知らなければならぬ。すなはち回復運動と發展運動これである。伊太利の大部分は最近まで墺多利の管轄の下にあつた。回復運動者(レデンチスト)の政策は、伊太利國の土地でありながら、外國領となれるものを取り戻さうと云ふのであつた。彼れらが最も熱心に取り戻さん事を希望せる土地は、主として墺多利に屬して居た。すなはち南部チロール、イストリア、ダルマシアなどが夫れである。政府が此の運動を好意を以て眺めたことは勿論である。ギオヴァニ・ソリーの書いた小學校用の歷史に、下のやうなことが書いてある。

『伊太利は今や殆んど外國の領土たるものは無くなつた。茲に殆んど〻云ふのは伊太利の二地方がまだ墺多利領になつて居るからである。すなはち人口百萬を有し風景絶佳なチロールの南方及びトリエスト市所在のイストリアこれである』。

墺多利に屬する伊太利人の住民約一百萬人は、伊太利國境に接近して、聚密な團體をなして生活して居る。墺領チロールの住民九十萬の中四十萬は伊太利人である。その南方すなはちトレントや、ロヴエレットや、アラや、ボンドや、ボルゴ等の都市を含む一帶の地に住む人民の六割五分は伊太利人である。佛國と瑞西との間にも、また伊太利の集團せる部落がある。併しながら回復運動者は此の方のことは一向口にせないで、主として墺多利領内にある、伊太利人の住める地方を標的として居る。此の意味に於いて回復運動者は、墺多利を敵として戰ひ來つた。だから三國同盟は彼れらに取つては、最も愚にして且つ最も忌むべきものであつたのである。

墺多利の最大港はトリエストである。差しづめ墺多利のハムブルグと云ふ格である。然して其處に住む人民の十分の九は伊太利人である。更に東に赴いてフイウメの住民の二分の一は伊太利人である。尙ほアドリアチック海主要の軍港ポーラの住民の二分の一以上も此れまた伊太利人である。歴史的にいへば伊太利人が、アドリアチック沿岸一帶の地を領有せんとすることは自然であると云ふことが出來、又彼れらは或る程度まで此の企てに成功し、特にチロール、イストリアなどは大たい伊太利領土たるべき性質を持つて居る。アドリアチック沿岸は元と伊太利に依りて征服され、その植民地となつて、伊太利文明が移植されたものである。同沿岸に在る重要なる都市の名はトリエストといひ、カポ・デストリアといひ乃至バレンゾ、ロヴイニョ、ポーラ、アロナ、フイウメ、ヴエグリア、ザラ、セベニコ、スバラト、ラグサといひ皆な伊太利語源の名である。此れらの都市は、また外觀といひ、文明といひ、餘ほど伊太利風であつて、古い公會堂や門や壁には伊太利風の獅子の表象が殘つて居る。其れも其の筈アドリアチック海は昔しは伊太利の湖沼であつてイル・ゴルフオと云はれて居た位である。

伊太利は人口稠密な國で、出産率多く人口超過となる虞れがある。それに伊太利は鐵、石炭、木材などに乏しいから、自然の約束が此れをして貧乏國たらしめる。國土の大部分は山岳岩石で蔽はれ、從がつて其の自然的窮乏に驅られて國民は已むを得ず外國に移住すると云ふ傾向がある。世界に於て伊太利の移住民が最も多數を占めて居るのは、此の原因によるものである。一九〇九年には、移住民の數六十二萬五千六百三十七人を算して居る。此れは移住せざれば、國内では到底生活出來ないから、已むを得ず本國を見棄てゝ海外に赴くものである。此れを以て

見れば、自然の必要と云ふ點から云へば伊太利は英國よりも又獨逸よりも、遙かに植民地の必要を感じて居ると云へる。

然らば伊太利は果して何れの方向に發展せんとし、又何れの方向に發展して行くことが出來るであらうか。此れを語るはすなはち發展運動を述ぶる所以である。

近代の伊太利は古代伊太利の傳統を受け、從がつて昔時の偉大と榮光とを回復しようと云ふ慾望を持つて居る。然るに其の疆域を望めば、伊太利は北方にも南方にも、また西方にも發展することが出來ないで、只東方に向つて伸ぶよりは外は無い。そこで自然の順序として其の發展地及び植民地として、巴爾幹半岸の西方を睨むに至つたのである。海岸から望めば眞に指呼の裡にあるアルバニアは、實に其の發展の目標とされたのである。伊太利としては誠に無理もない事と云はなければならぬ。

伊太利のアルバニアに對するは頗る熱心なもので、王も政府も人民も擧國一致的にアルバニアを研究して居る。從がつて幾多の伊太利人は同國に旅して、その實地研究の結果を公表し、また幾多の資本主は、アルバニアの事業に向つて投資を爲した。伊太利政府は又アルバニアの好意を得んことに汲々と云ふ有樣で、アルバニアに學校を建て、又醫者や科學者や宣教師を送つて、伊太利の文化を擴めるに鋭意した。此れに就いて如何に伊太利が熱心なるかは、アルバニア行きの宣教師に對しては、特に補助金を下附するによりても判斷できる。伊太利政府が傳道に補助金を與へると云ふことは、他に類のないことである。伊國政府は又アルバニアと伊太利との間を往復する商船に補助金を與へ、アルバニアに商業上の代理店を設くるに骨折るなど、實に最善の努力を以つて、アルバニアの伊太利化に努めて居る。

一八九六年伊太利王ヴイットリオ・エンマニユエルが、モンテネグロ王ニコラスの第四女と婚姻したのは、政治上の意義を否認するわけには行かぬ。當時に於ては伊太利は既に已に自國發展の約束地としてアルバニアを眺め、巴爾幹半島の將來に着目して居つた。そこで若かいエンマニユエル王は、巴爾幹の王女と結婚して、巴爾幹に於ける伊太利の地位を高上せしめんとしたのである。結婚政策は今では既に『舊式』の銘が打たれて居るが、當時に在りては寧ろ外交上に承認されて居る一種の公式であつたのである。モンテネグロ國はアルバニアの隣邦、國土は極めて狹小、其の峨々たる山脈は自然の城砦を形ち造つて居る。人口は僅かに二十

五萬。然れども天資武勇絶倫を以つて稱すべき國民である。其の外モンテネグロは、政治的に巴爾幹半島に重要なる地位を占めて居る理由がある。それはモンテネグロの一王女は、前述べた如く伊太利王に配し、一王女は塞維王に嫁して居ることである。斯く有力なる親族を有することによりて、モンテネグロは國家は小なりと雖も、その勢力はなか〳〵偉大なるもので、隱然として巴爾幹政治の中軸を成すの觀があつた。然れば露西亞や伊太利などは爭つてモンテネグロに援助を致し、貧乏で武器を備ふることの出來ない此の國の爲めに、大砲やら、銃器やら、彈藥その他の武器を供給した。斯くてモンテネグロは、ヴエニスからサロニカに至るまでの途上に横はる露國と伊國との爲めの要塞となつたのである。こゝに大問題が横たはる。

墺多利がサロニカを領有しようとする野心は、露西亞が君府に垂涎せると同じゝ頗る古くからの問題である。墺多利は永らくの間、サロニカに出づる飛び石を形ち造るところのモンテネグロを、必要なる要塞と認めて居た。そこでモンテネグロを掌中に收めんとして伯林會議(一八七九年)に於いては頗る努力したものであも。同會議に提出された第二十九條、すなはちモンテネグロ唯一の港たるアンチヴアリ港を自己の管轄たらしめんとするものが夫れである。然るに會議の結果、アンチヴアリには諸國の軍艦を寄することを禁ぜられ、モンテネグロ自身もそこを自國の軍港とすることを許されなかつた。併し一方に於いては、墺多利はモンテネグロに通路を新設し、鐵道を布設することを許され、更にアンチヴアリ港の咽喉をなすところのスピザの割讓を主張し、其處に要塞設置權を求めて、此れを聽かれたのだから、墺多利はモンテネグロに對する野心を先づ完全に遂行したと云つて宜い。當時伊太利の全權大使ローネイ伯は、墺多利がスピザを合併するの理由を問ひ、伊太利こそアドリアチック管轄の必要ありと述べたが、墺多利の大使ハイマリー男は此れに答へて、スピザ地方は方一哩に過ぎざる狹小の地で、僅に三百五十の家族が家を爲して居るに過ぎない。墺多利が斯る狹小の地を其の勢下に置かんとするのは、軍事上の目的を持つて居る爲めでなく、實に此れにによりてアンチヴアリ及び其の附近一帶の土地を、純然たる貿易地として發展せしめんが爲めであると言明した。

併しながら此の言明に拘はらず、墺多利の目的が然かく平和的のものならざるは明らかである。モンテネグロに於ける二大都市は、首府セッテンエと唯一港た

るアンチヴアリである。セツテンエは、墺多利の港カツタロから近いところに在る。然してスピザはアンチヴアリ及びカツタロ及びセツテンエを連結する鎖りである。伯林會議後墺多利はカツタロ及びスピザに要塞を造り、此れに巨大なる大砲を据えつけた。カツタロの新要塞から大砲の玉はセツテンエまで届き、スピザに於ける大砲の玉は、何等の困難もなくアンチヴアリを破壞して、その港に在る軍艦を追拂ふことが出來る。モンテネグロ王が王宮の窓から眺めると、カツタロなる墺多利の大砲が手に取る如く明かに見える。また王宮を出でゝアンチヴアリに赴けば、其處はスピザの大砲が睨みつけて居る。斯くて墺多利は盛んにモンテネグロを威壓せんことを期した。

墺多利が南下の標的とせるサロニカも、また地中海に於ける最も主要なる港で、君府及びスエズ運河に近く、倫敦巴里伯林維納からの直通航路があり、又一方小亞細及び東洋方面へも直接に交通して居る。歐洲が地中海を經由して東洋と貿易をするには、將來に於ける獨占權を有して居ると云はれて居る。そこで墺多利は此れを占領せんことに、全力を盡したのであるが、併しサロニカを占領するには先づモンテネグロの邪魔を除き、更にアルバニアをも其の掌中に入れなければならぬ。そこで既にモンテネグロをば十中の七八まで威壓し了はれる墺多利は、次ぎには手をアルバニアに伸べた。然るにアルバニアは前述べた如く、伊太利が既に拮据經營しつゝある。墺伊の利益は又もや此處に衝突をはじめた。

一九〇一年六月七日伊太利議會に於いて、同國の外務大臣グイッチアルヂニは斯ふ云ふて居る。

『伊太利に取つての死活的利益は地中海に横はる。然して地中海の利益は、トリポリとアルバニアとを中心として居る。トリポリは伊太利が廣汎なる利益を得らるゝ所であるが、アルバニアは寧ろ伊太利をして其の將來を確保せしむる所以の國である。吾々は斷じてアルバニアが一等國の手に落ちるやうな失策を演じてはならぬ。一等國の行政權内に屬する二等國の手に落ちることも許してはならぬ。吾々はビザルタ—佛領チユニスの港—の勃興を默認したがヴアロナ及びデユラツオに於ける新ビザルタの創設を默認してはならぬ』。

前記ヴアロナとデユラツオとは、アルバニアに於ける至要の港である。此の事實が伊太利と墺多利との野心を激成し、兩國の野心がこんがらがつて、やがて巴爾幹を攪乱する大勢力となつた。

然らば墺伊兩國は如何なる形式によりて、アルバニアを自國の勢力下に歸せしめようと企てたかと云ふに、墺多利は簡明直裁にアルバニアを直接自己の管轄に歸せしめんとし、伊多利は此れに反してアルバニアとモンテネグロとを打つて一丸とせる聯盟を造り、獨立的に巴爾幹同盟を創立せん事を願つて居たのである。此の巴爾幹同盟には塞維人も、勃牙利人も、クロアット人もモンテネグロ人も、何れもセルヴィア人種に屬して、且つ同一の言語を有するものであるから、無論全部贊成である。伊太利は此の大潮流に乘つて事を爲さうとしたのである。然るに墺多利は最初から斯る同盟に反對である。何故反對かと云へば、其の領土たるボスニアや、ヘルツエゴヴイナや、ダルマシアには、主としてセルヴィア人種が住んで居る。其の上墺多利にせよ匈牙利にせよ、其國内を見ると種々雜多な人種が混同雜居して居る。だから巴爾幹同盟が出來上ると、ボスニア、ヘルツエゴヴイナ、ダルマシアの三領土は、其の人種上の關係から墺多利を離れて、巴爾幹同盟に加はろうとするに相違ない。此れが一つ。然して今一つは境外に於いて人種的同盟を形ち造られると、其れが何んなことで國内に響いて來て、國内の人種的分裂を促進するかも知れぬ。此れが二つ。此の二つの理由で、墺多利は極力巴爾幹同盟に反對し來つたのである。すなはち茲でも墺多利と伊太利とは、主義を異にし利害を異にし、相衝突し相反撥するの地位に立つて居たのである

モンテネグロのニコラス王は、市民として偉大なるばかりでは無く、詩人として又理想家として尋常人の及ばぬ點がある。王の大理想は全セルヴィア人の同盟を作製し、此れによりて巴爾幹半島に平和的發展を劃策するにあつた。今次の動亂により王の理想はやゝ實現せられたと云ふことが出來る。王が自己の思想を幾多の詩歌戲曲に托して發表せるもの頗る多く、其の寓意的戲曲『巴爾幹の王女』は有名なものである。斯ふ云ふ次第だから、モンテネグロが伊太利の味方であることは無論である。此れと同時に王が墺多利から睨まれて居たのも事實である。戰爭の慘禍を蒙るのは得て斯る小國に多い。巴爾幹同盟の王の理想に對する犧牲だと云へば、云はれぬ事はないけれども、此れが爲めに利益を受けたのが伊太利であることも、また爭はれぬ事實である。

飜つて伊太利の地勢を見ると、其の國土は大山脈によつて佛國や墺多利などゝ相隔つて居るが然かも其の山岳の重疊起伏の工合が、此の方から敵に進軍することを許さず、反つて墺多利の方からは、チロールの高原から何の雜作もなく、伊太利

の平野に攻め下ることが出來る。隨分不利なる地位にあると云ふべきである。伊國は又其の北方の國境に於いてのみならず海岸方面、特に墺多利に面するアドリアチック海岸に於て、多大な損失を受くべき約束を持つて居る。西海岸のゼノア、リヴォルノ、ネープルス、レギオそれからシシリー島のメシナ、パレルモ、カタニア伊太利南端のタラント、ブリンヂシ、アドリアチック海のアンコナ、ヴエニス其の他幾多の港灣は、敵の攻擊に面して開けて居る。羅馬、パデユア、ラヴエンナ、ピザも海岸から僅か十哩のところに在る。つぎに伊太利の主要な鐵道も大道も端から端まで海岸通りにあつて、少數の敵によつて容易に破壞され得る危險がある。自然はアドリアチック海を造るに當つて、甚だ不公平であつた。彼の女は伊太利に全然防禦無き海岸を與へ、然して反對に巴爾幹の海岸には、高い山脈に圍まれた大なる港を幾つも造つて居る。伊太利の海岸は、殆んど例外なしに水淺く砂多く、自然の港灣に缺げて居る。特にアドリアチックには危險な風『ボラ』がある。此れに吹捲くられると、港が淺いから船は如何ともすることが出來ない。その上海岸は平つたいから、敵が上陸するには至極容易である。此れと丁度正反對に行つて居るのが、伊太利對岸の巴爾幹の諸港である。ダルマシアやアルバニアの海岸には、岩

や山脈が高く聳えて、良好な深い港を抱き込んで居る。ポーラ、カツタロ、セベニコ等の港は、自然の擁護を受けた世界最良の港である。そしてポーラから、ラグサに至る三百哩の海岸には、水雷艇を泊すべき約六十の港がある。

伊太利唯一の重要な軍港はヴエニスであるが、自然の形勢からいふと、その對岸なるポーラとは比較すべくも無い。アドリアチックの北端近くにあるポーラ港は、山脈に包まれた廣大な灣に臨んで居るばかりでは無く、その前面遙かに軍事上必須な幾多の島嶼が横たはつて居る。此れに加ふるにポーラの南方百二十五哩の彼方には、壯大なる自然港セベニコがある。山に圍まれた灣の深さは一百呎以上。巨艦を容れるによろしく、尙ほ其の南方百八十五哩の彼方には、防備堅固なるカツタロ港があつて、セツテンエを支配して居る。それから又南へ去ること九十哩、自然の要害極めてよろしきデユラツオ港がある。うまく海峽を形造つたオトラントの一番狹つた地點には、伊太利に面して、世界無比の軍港ヴアロナがある。此の重大な一地角からアドリアチックの管轄權を、伊太利と墺多利とが睨み合つて來たのである。伊太利は其の安全を保たむが爲には、アドリアチック海の管轄權を握らねばならぬと論じ、特にその東海岸の獲得は必須缺ぐ可からざるものと

主張する。此れは今も昔しも同じことである。すると墺多利は墺多利で、地中海に出るには必ずやアドリアチック海を通過しなければならぬから、其の爲には他國をして其の海峽を握らしてはならぬ。加ふるに墺多利の自然の地形は、其の總べての船舶をしてアルバニアの海岸を通過するを餘儀なくせしむるから、アルバニアの商業は自然全く自己の掌中にあるべきものだと主張する。併し伊太利は前述べた如く、熱心にアルバニアの伊太利化政策に努めて居たから、墺多利の此の主張に讓歩することはせぬ。此に於いてかアルバニアに於ける伊太利の經濟政策と墺多利の夫れとは矛盾撞着を免れぬ。

伊太利の近代史は、此れを要するに墺多利との戰爭史である。南方チロールに於て墺多利は伊太利門戸の鍵を握り、アドリアチック及び巴爾幹半島に於て、伊太利の經濟的政治的發展を遮ぎつて居た。加ふるに墺多利は自國内に住む伊太利人を壓制し來つた。然るに拘はらず、如何にビスマークの策に乘せられたとは云へ、此の自然及び政治及び經濟上の敵たる墺多利と同盟の間柄に入ることは、何う考へて見ても得策でもなければ、自然の政策とも云ふことが出來ぬ。伊太利が三國同盟に入つたのは、熱に浮かされて居るものが、囈語を云ふやうなもので、何うしても正氣の沙汰ではない。だから其の第一の機會に於いて脱退すべきは、明らかなことであつた。歐洲戰爭は適ま其の機會を提供したまでゝある。伊太利人のうちでも此の道理を看破して三國同盟を呪ふた者がある。ペレグリニ氏の如きが其の好例である。氏は其の著書(一九〇六年)の中で下のやうなことを云ふて居る。

『吾人は最早吾人を欺く幻影の下に生きることは出來ない。吾等は墺匈國内の内亂が重大なる事件であり、從がつて二重王國は外に向つて伸びる事は出來ないと考へた。ところが此れは全然吾人の幻想であつて、二重王國はます〳〵發展して吾人に迫りつゝある。吾等は形式的なる三國同盟を保存せんが爲めに、伊太利國未來永遠の發展策を犧牲にするの必要はない。吾々の利益は果して那邊に存するものであるか。吾々は果して其の利益を保護しつゝあるか。外國管轄の下にアドリアチックの海岸に住める我が同胞の現狀は何うであるか。墺多利との戰爭は、避けることの出來得べに於ける伊太利の使命は何であるか。きことであるか。墺多利は吾々の同盟國たると共に、吾々の公敵である。吾々は其の國に反抗して戰爭準備にかゝらなければならぬ』。

然して更にペレグリニ氏は、伊露同盟によつて、墺多利との衝突に備ふべしと說いて居る。此れは今日では一片の夢に過ぎなくなつたが、當時に於いては相當に價値ある政策として取り扱はれたのである。曰く

『墺多利は今吾人の同盟國なりとはいへ、將來に於ては巴爾幹半島に於て吾々の敵となるべき事を覺悟せなければならぬ。だから此の際伊太利は伊太利と協同し得べき唯一の國家露西亞と一層親密なる關係を結ぶべきである。然うすれば吾人は茲に始めて巴爾幹半島に於いて勢力を維持することが出來るのである』。

斯くして伊太利は多年の間、墺多利との戰爭に就て考へた。雜誌とか單行本とか小冊子とか何れも此の問題に就て熱心に論じた。すると墺多利でも、對伊戰爭論を發表すると云ふ形勢になつた。此の形勢は世界戰爭前に於いて最も緊張し、兩國とも其の要塞を堅固にし、其の防備を嚴にし、特に墺多利は獨逸に倣つて大に海軍を擴張した。すると此れを見た伊太利も默つ居らず、負けぬ氣になつて大急ぎで軍艦の新造に取りかゝつた。さらに四億圓の費用を投じて、イソル・デリ・トレミチの南方に軍港を造ることにした。然して更にタラント港を軍港に改造するの案を樹て、然かも東方海岸の諸港には、切りに水雷艇を屯ろせしめた。元來同盟

なるものは、相互の信用目的及び利益の共通が無ければ成立するものではない。伊太利と墺多利との間には、目的と利益の矛盾こそあれ、相互の一致なんて云ふものは、徹頭徹尾存在して居なかつたのである。此れで同盟が存續するとせば非常に珍妙な現象と云はざるを得ない。

伊太利が土耳其を攻擊し、トリポリを占領して、其の伯林會議に於いて喪なつたところを獲得したのは、すなはち利益と目的との一致なくして、同盟の成立せざる所以を闡明し、具體的に三國同盟に對して挑戰したものである。だから此の時に於いて三國同盟は形骸も精神も共に亡びて終つたと見るべきで、大戰の外交舞臺に伊太利が獨逸を離れて協商側に趨つたのは、トリポリ戰爭の延長乃至演繹とも稱すべきものである。

第七章　獨佛の關係

一八七〇年九月一日から二日に亘つてセダンの大悲劇が演ぜられ、佛蘭西は終に普魯西に屈服した。爾來四十有餘年、佛蘭西は意氣銷沈して、最早昔日の英氣爽颯たる政治舞臺の花形役者ではなく、動もすればセダンの屈辱を忘却し、アルサス、ローレンをすら斷念し、昔日の榮華をば見果てぬ一場の夢と見做して、その天才と精力とを銷磨して、只管黃金の蓄積に沒頭するに至つた。敏感なる獨逸の政府は忽ち佛國の此の弱點を看破し、佛國の怨靈もはや退散と高を括り、却つて佛國に秋波を送つて、此れを懷柔せんと試むるに至つた。キール運河が開通した場合にも、佛蘭西の艦隊は招待を受け、獨逸の海軍と手を携へて、運河の通航を試みた。日本が遼東を占領した際にも、佛蘭西は獨逸の勸誘に應じ、日清條約に干渉した。獨逸はまた佛國の海軍大臣ロックロア氏を招待して、獨逸の海軍を縱覽させ、以つて落花流水の情を示した。斯くして獨逸は漸やく佛國を懷柔するの機熟せりとなし、或は獨佛同盟を提唱し、或は中歐關稅同盟を主張し、專ら佛國を引つ張り込むの策略を廻らした。

併しながら獨佛の關係は、然う快晴のみは續かなかつた。丁度デルカッセ氏の策略で、佛蘭西は英國及び西班牙に對して强硬なる態度に出で、摩洛哥に於ける佛國の特殊利權を承認せしむるや、茲に極めて突如としてウイルヘルム二世が摩洛哥に對する干渉を始めた。此の一九〇五年の摩洛哥事件が如何に危急に瀕したかは、獨逸が愈々最後の決心を以て、動員を開始した一事でも分る。當時獨逸の摩洛哥に對する輸出貿易は年額九十萬圓の少額であつたから、獨逸が商業保護のために干渉したといふのは虛構である。獨逸が摩洛哥事件を惹起したのは、自國の商業を保護するためではなく、實に佛蘭西と英國との關係を隔離して、佛蘭西を獨逸に誘引せんがためであつた。

爾來獨逸の外交は常に驚くべき成功を收め來つたが、併し獨逸は果して佛國を自分の味方に引き入れるに成功するであろうか。此れは當分の間は困難であると思はれる。獨逸が佛國を自己の味方とするには、歐洲戰の起る前と、然して戰爭が起り、獨逸が絕大の勢力を以つて佛國を壓倒せんとせし時と二つの機會があつた。獨逸には軍人のみありて政治家なく、爲めに此の二つの絕好の機會を攫むことが出來ず、終に佛國をして英國の傘下に趨らしめた。佛國を英國から引き離す

ことは、獨逸が佛國にアルサス、ローレンを進呈することを條件とすれば、容易に出來る相談であつた。佛國を自分の味方にするか、或は單に局外中立を守らせても、獨逸は決して今日の如き失敗を重ねなかつたであらう。それをアルサス、ローレンを惜しみ、且つは軍閥が跋扈して、佛國も英國も鎧袖一觸忽ち此れを屏息せしむることが出來ると主張したものだから、獨逸の外交はこゝに全然在來の親佛主義を棄てゝ、英國を併せて佛國をも敵とするに至つたのである。其の結果は佛國をして全然英國羽翼の下に趨らしめ、且つ積極的に獨逸を敵視せしむるに至つた。最近締結されたる英米佛三國同盟が、動かすべからざる證據である。だから當分獨逸は佛國を、自分の味方に奪ひ回へすの見込みはないと云はなければならぬ。

併しながら此れは當分のこと。今後長月日の間には獨佛の關係が如何に變ずるかも知れぬ。故に茲に雙方の國情と政策と利害と領土政策とを、比較對照するの必要がある。

佛國の國策は概して云へば消極。過去數百年來一定不動のものであると云へる。佛蘭西は列强の均勢を維持すること、及びライン河地方に於ける獨逸との國境地域を領有することを目的として進んで來た。此の二つの目的を達するためには、

佛蘭西は四百年前に、當時墺多利と和蘭と獨逸と西班牙とを領有して、大陸に威武を逞しくして居たチャールス五世とさへ、敢然として戰つたのである。また此れが爲めには、異教の國として擯斥せられた土耳其と同盟することをすら辭せなかつたのである。歷史は繰返すといふが、近世に及んでも普魯西が佛蘭西を擊破して、ビスマークが歐洲西部の諸國を懷柔し、佛國を孤立に陷らしめた際にも、佛國は共和主義の先達でありながら、專制主義の露西亞と同盟して、中外の耳目を驚かせた。つまり背に腹は替へられぬからである。

史を按ずるに過去四世紀間を通じて、佛國と獨逸とは常に歐洲の覇權を獲得するために反目鬪爭し來つた。然うして一八六六年までは、獨逸とはすなはち墺多利の謂ひであつたから、佛蘭西は墺多利の勢力を殺ぐためには、普魯西に援助を與へたなどの事がある。ナポレオン三世がビスマークに好意を寄せ、墺多利に一擊を與へさせたなども、畢竟此の意味に外ならない。

然るにビスマークが政柄を握るに及んで、佛蘭西は反つて普魯西のために、絶えず傀儡として操縱せらるゝ事となつた。ナポレオン三世は、折角墺多利を打破するために普魯西に援助を與へながら、その報酬としては何物をも得ず、却つて普魯

西のために一擊を蒙り、普魯西をして大を成さしむるなどの鈍間を演じた。一八六六年普魯西が墺多利と開戰せる際も、此れに先だつ僅かに半月ばかり、雙方の危機が既に十分熟して居た時ですら、ビスマークはフオン・ガベレンツ將軍を維納に派遣して皇帝に謁見せしめ、若し墺多利にして十二時間以内に普魯西と提携して佛蘭西を攻擊しアルサスを占領して、此れを普魯西に與へるならば、普魯西は喜んで墺多利と和解すべしと提議せしめた。斯くの如く普魯西は佛蘭西の後援を得て墺多利と確執しつゝある最中に於いてさへ、墺多利と通謀して佛蘭西を攻掠しやうと計畫して居たのである。ビスマークの信義なきことは別問題として、佛國は既に此れほどに見縊られて居たのである。唯だ此の際は墺多利がビスマークの勸誘に應ずることを躊躇した爲めに、佛蘭西も一時虎口を免がれたが、此れは佛國の力の爲ではなく、寧ろ期せずして棚から落下した牡丹餅である。然れば其後數年を出でずして、佛蘭西は遂にビスマークの權謀術數の犧牲となつた。

普魯西が墺多利と戰ふ場合には、ビスマークは佛蘭西の甘心を買ふために、その報酬としてライン河地方を與ふべしとの嘘言を構へ、佛蘭西が此れを文書を以て約束せんことを要求するや、ビスマークは兎や角と辭を構へて墺多利に一大打擊

を與へるまで、此の要求に應ずることを延引した。然してお人善しの佛國がビスマークの誠意を疑ひ出した頃は既に己に遲い。ビスマークは疾くの昔しに自分の目的を達して居る。すなはち彼れは掌を翻すが如くに急に墺多利と妥協して、佛蘭西に迫るの態度を示した。然るに當時佛蘭西では、大兵を派して墨西哥と干戈を交へつゝあつたので、ナポレオン三世も、普魯西の横暴を如何ともすることが出來ず、終に泣寢入りとなつた。佛國が兵を海外に動かして居たのが、普魯西の附けめであつたのである。

其の後も佛國はビスマークのために、ルクセムブルグ問題や、白耳義問題に關聯して散々に翻弄せられ、爲めに民心激昂し、獨逸との關係は益々不良を加へ來つた。併しながら此れ元來ビスマークの故意に計畫したところであつて、ビスマークは獨逸諸國を統一するには、是非とも佛蘭西と一戰して、佛國に對する獨逸諸國の敵愾心を鼓舞するを便利とした。斯う云ふ次第だから普佛兩國の戰爭は、到底避くべからざるものであり、此の勢ひは一八六六年以後ます〳〵甚はだしくなつた。當時ビスマークは又もや佛國を掀飜しようとしたが、今度は流石のナポレオンも、ビスマークの陷穽には落ちなかつた。陷穽と云ふのはビスマークが西班牙を使

嗾して、佛國に挑戰せしめたことで、佛國が此れを眞に受けて西班牙と事を構へようものなら、佛國は向背に敵を受くる事となつたであろう。佛蘭西はビスマークの奸計に陷らず、進んで普魯西に挑戰したが、內部の事情は兎も角局外から之を視ると開戰の責任は全然佛國にある。此れもビスマークの方寸である。そこでビスマークは此れを利用して、大いに自國に對する列國の同情を煽り立てたものである。だから馬鹿を見たのは佛蘭西で、汚名を着せられた上に戰爭には負ける。佛蘭西人の注いだ血の上に普魯西の覇權が確立せられ、それが獨逸帝國と云ふ形式で現はれて、其の獨逸が依然として、佛國の敵であると云ふのだから、此れ位割の惡い役廻りはあるまい。故にチエールはヴエルサイユに於て、ビスマークに向つて斯う言つた。『獨逸を統一させたものは、事實上に於て吾々佛國人である』。

世人は往々にして佛蘭西は一八七〇年役の屈辱を忘れたといふが、此の一戰のために佛蘭西が受けた瘡痍は、世人が想像するよりも一層深刻であるから、決して忘れたのではない。斯る怨みを佛國のような消極的の國民が忘れるものではない。併しながら何分にも因循消極的だから、獨逸から更に大いなる恩惠を以つて臨まれると、昔しを忘れて獨逸に味方すると云ふことは有り得る。佛國は普佛戰

爭では七十萬人の生命を失ひ、首府は敵の馬蹄に蹂躙せられ、その被つた損害は八十億圓と概算せられる。また佛國のうちで工業の最も盛大なアルサス、ローレン兩州は普魯西のために奪取せられた。佛國の統計によつて一八六六年と一八七二年とを比較すると、佛蘭西の人口は戰前と戰後とで二百萬人を減少して居るが、若し此の戰爭がなくてアルサス、ローレンを割讓しなかつたとすれば、每年の人口增加率から推算すると、八十萬人の增加を見なければならないから、結局佛蘭西人は戰爭の結果、此の六年間に二百八十萬人の生命を失つた勘定になる。

果して然らば、佛蘭西が今日宿昔の怨みを忘れ、急に獨逸の親友となるべしとは容易に信ずべきことではない。勘定高い佛國の物持や、儉約な農民は其の課せらるゝ租稅が高率で、彼等の生活が困難なのは、尨大な軍備擴張のためであることを知つて居る。然るに拘はらず彼等が此れに對して、多く不平不滿を漏さず、已むなき成行きと呆らめて居たのは、他年時を得て獨逸の頭上に一擊を與へ、積怨を晴らさうとの精神が、暗々裡に動いて居たからの事である。併しながら此れと反對に、佛國は永遠に獨逸と親しまざるべしと云ふのは、又一つの誤謬である。國際關係は然かく單純なるものではない。英が露の味方をするやうになり、佛國が英國と

仲直りしたなどの事が顯著なる好例である。だから獨佛のなかも必らずしも融和し難きものとは言へぬ。況んや佛國は既に獨逸に報復して、其の怨みを晴らせるに於いてをやである。要は國力の如何と、獨逸今後の態度の如何によりて定まる。

佛蘭西が獨逸に對して、場合によりては友邦たるやも知れずと云ふ一つの理由は、軍備に於いて恐らく獨逸に比肩する事が出來なかろうと思はるゝ事である。軍備には財力も必要はあるが、其の根本は人口にある。佛國人口の增加は到底獨逸に及ばない。だから軍備に於いて常に獨逸の下にあるべき恐れがある。試みに左表を見よ。

年次	獨逸人口	佛國人口
一八七二	四一、二三〇、〇〇〇	三六、一〇三、〇〇〇
一八七六	四三、〇五九、〇〇〇	三六、九〇六、〇〇〇
一八八一	四五、四二八、〇〇〇	三七、六七二、〇〇〇
一八八六	四七、一三四、〇〇〇	三八、二一九、〇〇〇
一八九一	四九、七六二、〇〇〇	三八、三四三、〇〇〇
一八九六	五二、七五三、〇〇〇	三八、五一八、〇〇〇
一九〇一	五六、八六二、〇〇〇	三八、九六二、〇〇〇

一九一二	六六、〇〇〇、〇〇〇	三九、六〇〇、〇〇〇

すなはち一八七〇年には、獨逸と佛蘭西との人口は、略同數に近かつたが、今日では獨逸の人口は、佛國の夫れよりも五割も多い。それにも拘はらず、戰前まで佛國は獨逸に匹敵すべき軍隊を維持して來た。併しながら今日の如き人口の增加率を以て進むと、佛國は遠からず、獨逸と雁行すべきだけの壯丁を得ることが困難となり、實質は兎も角少くとも計數に於て、第二等國に落ちざるを得ない。戰役はやゝ局面を展開したと云へば云はれぬ事はないが、夫れでも英米兩國の援助を待たなければ、到底獨逸の攻擊に對して、安全でないと云ふ佛國の取つて居る見解は、大たい佛國が獨逸以下である、或は少なくとも獨逸以下となるの心配があると云ふことを自白して居るものである。すると假りに戰後獨逸が興り、英國が獨逸の爲めに、其の優越なる地位を讓らなければならなくなつて來ると、佛國は米國では餘り遠すぎるから、終に生を獨逸に托するやうなことがないとは云へぬ。少なくとも斯る打算を常に眼中に置いて居らぬと、飛んだ見當違ひをすることがある。

歐洲戰亂は佛國の屬する協商側が勝ち、其の爲め佛國が獨逸に對してアルサス、ローレンは無論、更にライン地方をも割讓せんことを要求したのは、前述べた如く

佛國對獨策の中樞を爲すもので、一種の傳統的政策である。現在佛蘭西と獨逸との國境と、ライン河との中間には、七百萬人の住民があるが、此れらの住民は一般に佛蘭西の支配を歡迎して居る。佛蘭西も亦た此の地方を元來佛國の領土なりと確信し、此れを獲得することを一の國是となして來た。此れは政治經濟感情の問題でもあるが、又軍事的に考へても佛國が此の地方を占領することは、佛國の安全を維持する上に於いて必要の事件である。

佛蘭西は南北に海面を控え、東にはアルプスの連山、西にはビレニース山脈を連ね、之を天然の國境となして居る。唯だ東北の一隅だけは、山野濶然として開け、ライン河を以つて自然の國境と成して居る。歴史的に考へても、佛蘭西はライン河まで進出する理由を持つて居ると云へる。夙にタシタスの史籍にも『ゲルマニアとゴールとはライン河を以て境界とす』とあり、シーザーの記錄にも『ゴールの地域はライン河から海岸に及ぶ』と記してある。

殊に今日ライン河を佛蘭西が占領することの、絶對的に必要な理由は、地圖を一見すれば判明する。戰爭の際には、敵の首府を衝くのが捷徑である。蓋し首府は政治上及び經濟上の中心として、國家の肺肝を成すが故である。然るに現在の狀

態では、巴里は伯林に比較して國防上甚だ不利の位地に在る。佛蘭西から伯林に進擊するにはライン、エルベ、ウエーゼルの三大河を渡らなければならないのみならず、三大河川の中間には、大小無數の山岳があつて、獨逸に防禦の便利を與へる。戰前獨逸はアルサス、ローレンのみならず、進んでライン河の沿岸に十二の要塞を築造して、國防の前線となして居た。此れでは巴里を脅やかすこと夥しいと云ふので、講和條約でライン武裝の撤廢を逼つた次第である。

元來アルサス、ローレンは進んで佛國を進擊する場合に、理想的な根據地を形成するから、獨逸は其の全州に亘つて、嚴重な武備を施し、且つ之を本據として、ライン河方面に武備を展開せしめて居たのである。アルサス、ローレンから佛蘭西へ出るには、七條の鐵道の外に、純然たる軍用道路が八條又は九條設けてある。またアルサス、ローレンから普魯西方面への連絡としては、無數の間道と大規模の飛行機停留場が設備せられ、獨逸はメッツからストラスブルグまで、一日十五萬乃至二十萬の兵員を動かすことが出來る仕掛けになつて居たのである。今やアルサス、ローレン佛國に歸して、佛國は獨逸の眞似をして此れを武裝するならば、獨逸もライン河の對岸に於いて此れと競爭するであろう。然りとて武裝せなければ不安と考

へるであろう。何つちにしても、アルサス、ローレンは厄介な土地である。

斯くの如く佛國は獨逸の爲めに天然の要害を奪はれて居たから、獨逸の東北國境に、延長二百哩に亘つて要塞を構へては居るけれども、元來人爲の要塞で、國境から巴里に至る迄は一望の平野。天然の障碍といふものがないから、一旦此の要塞を占領せられると、巴里は敵彈一擊の下に在る。アルサス、ローレンを取つた上に、國境をライン河まで延長するならば、茲に始めて佛國の國防線は完成する。アルサス、ローレン丈けでは無論以前の狀態よりも改善されては居るが、まだ〳〵理想的と云ふ譯には行かぬ。だからクレマンソーは講和會議に於いて、ラインの左岸を佛國に獲んとし、英國も密約によりて此れを援けた。唯米國や伊太利が反對し、又餘りに慾張り過ぎると云ふので終に成功せなかつた。佛國に次ぎの機會があらば、必らずやライン左岸の占領を力說するに相違ないが、斯る機會のありや無しやは目下のところ豫想出來にくい。若し强いて豫想するならば、斯る機會はありそうにもないと云ふ消極的豫測の外はない。

凡そ如何なる國家でも、近隣に强國のあることを好まない。ましてや其の國が自國を犧牲として、國力を擴張せんとするに於てをやである。獨逸の人口は一八七〇年から一九一二年までに、四千萬から六千六百萬に增加した。シュモラー教授の計算では、獨逸の人口は一九六五年には一億四百萬に達し、ヒュッペ・シュライデン教授の意見では、一九八〇年に一億五千萬に上り、ルロア・ボーリウ氏の豫想では百年にして二億に達すると言ふ。獨逸の國土は斯くの如き多數の住民を養ふに足らない。然かも外國に國民を移住せしめるのは、自國の國民をして他國の國富を增進せしめる所以であつて、獨逸の悅ばざる所である。從つて歐洲又は其の他に於て、領土を擴張することが必要である。此を以て獨逸としては、苟も自己の對敵となるべき邦國の衰勢を希望する。然うして佛國は獨逸のために、其の對敵の一つに數へられ來つた。此の點に就いてビスマークは、帝國議會(一八八七年一月十一日)に於て左の如く演說した。

「佛蘭西に於ける如何なる黨派も、吾々はアルサス、ローレンを回復することに反對する、アルサス、ローレンのために戰ふを欲しない。一八一五年の巴里講和を承認したと全然同一の精神を以て、フランクフルトの講和をも承認するものである」と、斯ういふことを公然と斷言した黨派が一つでもあるか。これだけのことを公言する勇氣のあつた內閣があるか。何故斯ういふ內閣か無いのか。それは佛蘭

西人が怯懦であるからではない。然う云ふ內閣は佛蘭西の民心と背馳するから、全然成立しないのである。佛蘭西は爆發點まで蒸氣の充滿した蒸氣機關のやうなもので、下手に觸ると直に爆發して、戰爭を開始する虞れがある。

『佛國の歷史を研究して見ると、其の國家的大事を決するのは、一般國民の意思ではなくて、少數黨派の元氣である。彼等は佛蘭西の全力を盡して、獨逸と一戰するために、絕えず民心を刺戟して居る。「決して戰を口にするな、併し戰を忘れるな」とはガムベタの標語であつたが、佛蘭西人は今日でも、此の態度を失はない。佛蘭西は自國が我國より强いといふことを確信すべき、相當の理由をさへ發見すれば、必ず我國を攻擊するであらう。佛蘭西が獨逸に勝てると信じたら、獨逸と開戰することは確かである。然うして佛國が獨逸に勝てるといふ確信は、佛國が他の國と同盟を結ぶと必ず起つて來る。私は佛蘭西が此の種の同盟を成立せしめ得ると信じないが、假りに佛國が此の種の同盟を締結するならば、我邦も亦た同盟を組織して、之に對抗するの必要がある』。

ビスマークは佛國が必らずや復讐を冀ふものであると見拔いたから、苛酷な講和條件を以て佛國を衰滅させやうとした。獨逸は佛蘭西と戰つて、六億萬圓を費

したのに、佛國から二十五億萬圓を賠償させた。然かも佛蘭西が意外にも迅速に之を完濟したので、却つて大いに失望を感じた。故に一八七五年にも獨逸は再び佛國に一擊を加へんと計畫し、フォン・ラドウイッツを使節として露西亞に赴かしめ、その中立を求めたが、露國は英國と共に猛烈に此の計畫に反對したので、獨逸も此れを斷念するの餘儀なきに立到つた。

此の計畫が蹉跌するや、ビスマークは方法を變へて、今度は佛國を孤立させることに努力し出した。彼が『回顧錄』に述べて居る如く、彼れは獨逸と露西亞とが爭ふ場合には、佛國は露西亞を援けるであらうと想像した。故に彼は一八七二年十二月二十日巴里駐劄獨逸公使アルニム伯爵に書面を送り『吾々は敢て佛蘭西を齒牙に懸けるには及ばないが、併し佛蘭西が異圖を抱くものとすると、佛國が他國と同盟することを妨礙せざるを得ない』と言つた。ビスマークは此の見地から巧みに佛蘭西と伊太利、西班牙及び英國との間を疎隔せしめ、佛國を孤立の狀態に陷れたので、佛國は當時廣い世界に、一箇の友邦をも得ることが出來なかつた。ビスマークの遣り方は頗る辛辣である。又それだけ佛國に意氣地がなかつたのである。

ビスマークは最も注意深く、佛蘭西と他國との關係を監視し、苟も佛蘭西が伯林に相談せずして、他國との關係を變改しやうとすると、直ちに鋭光を閃めかして此れを嚇しつけた。例へば佛國ゴブレー内閣が埃及問題を解決すべく、英國と交渉を開始(一八八七年)し、相當に意思の疏通を見るや、ビスマークは突如として佛蘭西の國境に兵を動かして戰爭を脅迫した。其の際に於けるビスマークの惡辣に比較すれば、最近の摩洛哥事件の如き、殆んど兒戯に均しい程度のものである。故に佛國も驚駭度を失ひ、倉皇として英國との交渉を中止した。同年五月七日ゴブレーは喟然として嘆息した。『吾々は獨逸に償金を支拂ふために、十五年毎年四億萬圓づゝの支出を國民に要求したが、それを完濟した今日に於いても、右の頰を打つ者には、左の頰も打たせよと、國民に要求しなければならない』。

ビスマークがウイルヘルム二世のために貶黜せらるゝに及んで、佛國は漸やく露西亞と提携することに成功した。以つて如何にビスマークが佛國を抑へて居たかゝ分る。露佛條約の條件は秘密に附せられたが、その内容は未だ以て同盟と稱すべきものではなく、單に軍事協約たるに過ぎなかつたものゝ如くである。併しながら兎に角露佛の提携が成立したことは、佛國に取つては非常の大事件であつた。這般の出來事は伯林では、ウイルヘルム二世が外交の樞機を握るに及んで、露西亞の甘心を買ふ事を怠つたがためと批評せられ、カイゼルは先づ大味噌をつけた。更に佛が英に接近する兆候の見ゆるや、獨逸の外交當局は露佛妥協によりて鼻毛を拔かれた轍を再びせざらんが爲めに、今度は盛んに英國に接近し、英國と佛國との接近を豫防することに全力を集中した。

當時獨逸はザンジバール地方の阿非利加植民地を英國に與へ、此れとヘリゴランドとを交換した。ヘリゴランドは歐洲戰によりて、到底ザンジバールなぞと交換すべからざる、重大な價値のあるものである事を證明せられたが、當時に於ては一坐の岩礁に過ぎなかつたから、獨逸國民は一般に此の交換を以て、自國の不利甚しきものとなした。併しながら獨逸當局の眼から見れば、此の甚だしく不利なる交換も、決して不利とは思はなかつた。蓋し獨逸は之に依つて英國の甘心を買ひ、以つて佛國を疎外することに成功したからである。故に當時の宰相フオン・カプリヴイも、帝國議會で此の交換の理由を説明して言つた。『吾々は此の際英國の好感を得るを以つて第一の急務と思考する』と。

かくて獨逸はビスマーク以來の傳統的政策として、佛蘭西の國力を薄弱にし、其

の地位を困難ならしめん爲めに、手段策略の有らん限りを盡した。其の間佛蘭西の內閣では、外務大臣は幾度も〳〵更迭したが、一人として獨逸の傀儡となつて、世界の嗤笑を買はざる者はなかつた。然るに一八九八年デルカッセ氏がケー・ドルセーの主人公となるに及んで、佛國の外交は頗る面目を一新した。一八九八年は佛國に取つて最も記憶すべき年である。

デルカッセ氏が外務省に入るや、從來佛國の外交が悉く獨逸のために制肘せられ、その陰謀によつて佛國と伊太利、西班牙、英國との關係が、故意に疎隔せられて居ることを發見し、非常なる決心を以て、着々之が改善に從事した。斯うなると獨逸も從がつて在來の態度を改めなければならぬ。飴細工のやうに自由勝手になつた佛國が、今度は幾分か骨がある事を示したのであるから、然う〳〵高飛車にのみ出る譯に行かなくなつた。此に於いて獨逸は俄かに其の態度を改め、寧ろ反對に佛國に對して媚ぶるが如き行動を採つた。併しながら斯るは何も獨逸の本心ではない。だから一九〇四年露國が奉天に敗るゝや、佛國の友邦たる露西亞が最早怖るゝに足らざることを看取し、此の機に乘じて佛國に一擊を與へ、其の自主外交に對して止めを刺さんと欲し、例の摩洛哥事件なるものを惹起した。摩洛哥事件

に關しては、章を別にして說くから茲には此れを省く。

デルカッセ氏は在職七年。その成績には幾多の過失もあるが、併しながら前後二十七年獨逸の制肘に苦しんだ佛國の外交を革新して、その獨立を回復したのは、同氏の一大功績たるは、何人と雖も認めるところである。

戰前獨逸の新聞は、頻りに獨佛同盟を喚々して居たが、此れは果して如何なる魂膽に出たものか。當時獨逸の周圍には、獨逸の安全を脅かすが如き强國は一つも存在せなかつた。ワルデルゼー元帥の如きは、獨逸は露西亞と佛國とを同時に相手にしても負けないと言つた。然かも獨逸は別に三國同盟なるものを有して居た。だから其の上更に佛蘭西と同盟する必要があるとしたならば、それは如何なる必要であるか。その目的が歐洲大陸に存在せないことは明白である。然り、獨逸の目的は英國か、然らざれば米國、恐らく英國に在つたのである。然るに由來此のアングロ・サクソンの二國は、侵略主義の邦國でないから、獨佛同盟の性質は防禦同盟にあらずして、必ず攻守同盟でなければならぬ事になる。蓋し獨逸が佛國を誘つて、英國の隙を衝かうとした前例は決して乏しくない。ボア戰爭の際にも、獨逸の新聞は筆を揃へて佛國を煽動し、獨逸と提携して、此れに干涉せしめんとした。

一八九九年十月五日といへば、ボアの軍隊が動員を開始して三日目であるが、例の『國境新報(グレンツボーテン)』に社說が現はれて『佛蘭西と獨逸との反目は徒らに英國を利するに過ぎない。獨逸の海軍さへ强大となり、英國に對抗するに足るに至れば、佛國は容易に獨逸に傾くであらう』云々と主張した。併しながら此れは隨分得手勝手乃至己惚れの强い議論であつて、獨逸と提携して英國を攻擊すべく、佛國は獨逸に對し餘りに深い怨みを抱いて居つた。

斯う云ふ次第で獨逸は佛國を誘ふて、自國の圈內に持ち來そう〳〵と努めながら此れに成功せず、兎角して居るうちに戰亂の煙りが歐洲の天地を包むに至つたのである。英國とか正義とか云ふ後見があるから、佛國も存外景氣が宜い。然かも佛國の將校は佛國の勝利を確信して居た。佛蘭西は戰爭の場合には、三百萬人以上を動員することが出來る。正當なる對獨戰爭の理由があると思ふから、將卒ともに意氣軒昂であつた。軍裝及び軍爲に於ても、佛國は獨逸の上に在つた。一八七〇年役には、佛國には國民皆兵の制度がなく、從がつて兵士は烏合の衆に過ぎず、戰爭の理由すら理解して居る者もない有樣であつたから、敗北は旣定の事實であつた。然るに最近の大戰に於いては、佛軍の一人として獨逸と戰ふ理由を知らぬ者はなかつた。戰爭の理由は祖國の興廢のため、また自身の死活のためである。獨逸の軍隊には無論此れほどの覺悟はなかつた。

併しながら飜つて海軍方面を見ると、佛國は到底獨逸の敵ではなかつた。一九一三年五月を標準とすれば、佛國は戰鬪艦十九隻(二十八萬噸)、裝甲艦十九隻(二十萬噸)此れに對して獨逸は戰鬪艦三十隻(四十六萬噸)、裝甲艦十二隻(十六萬噸)であつて、且つ當時獨逸は佛國よりも多數の超弩級艦を建造しつゝあつた。此れに加ふるに佛國の海軍は社會主義に感染し、士氣の活潑を失つて居た。また獨逸の海岸は、絕えず土砂が堆積して、地形を變化せしむるから、防備に容易である。此れに反して佛國の諸港は極めて接近し易いから、港外から砲彈を受くるの危險がある。獨逸は海軍の全力を北海に集中することが容易であるのに、佛國は平時海軍の一半を地中海に割いて居るから、突嗟の間に之を集中することが困難である。斯う云ふ譯だから海軍は到底獨逸に叶ひつこなかつたのである。唯幸ひにして英國が獨逸の橫暴を抑ふるは此の一擧にありと考へて、喧嘩場裡に跳り出したから、佛國は辛うじて其の海軍の弱點を衝かれる災害を免がれたのである。然らずんば世界の形勢は何う變つたか分つたものではない。

以上簡單ながら佛國と獨逸との關係の眞相を說明したものである。佛國と獨逸との關係は、トライチユケ敎授が其の著『政治學』に於て斷言した如く、實に『戰爭の潛伏狀態』である。今後二國の關係が果して如何に變化するとも、獨逸人が獨逸人であり、佛蘭西人が佛蘭西人である間は、二國の目的は大たいに於いて變化せないものと見なければならぬ。唯其の目的を達する必要上、獨逸が或は佛國を自分の味方に引き入れるなどの事はあるかも知れぬ。佛國の國力が次第に低下し、到底獨逸に對して楯突く事が出來なくなれば、或は永遠に獨逸の味方となるかも知らぬが佛國に幾分の生氣が殘つて居る以上、佛國の獨逸に阿附するのも一時的であり、又獨逸も其の積りで取扱ふであろう。特に今回の戰爭で佛國は英米と云ふ立派な後見を得たから、當分獨逸に包容さるゝの可能は先づ無いと見なければならぬ。だから獨佛の眞に融和するは、其の一方の國力が非常に不振となり、反對に一方が隆々たる勢力を養なひ來つた時に起るもので、それまでは先づ其の事が無いであろう。

第八章　獨露關係の將來

戰前に於ける獨逸の活動は四角四面と云ふか、縱橫無碍と云ふか、兎も角も頗る目醒しいものであつた。其のサモアや阿非利加や、支那や小亞細亞や、ポリネシアやヴエネジュラなどに向つて活動するところは、何うしても海外植民地や貯炭地の獲得が目的のやうに思はれた。併しながら又和蘭や白耳義や丁抹に對する態度を視ると、附近の小國を自國の勢力に引入れることに、渾身の精力を傾倒して居るやうでもあつた。それから又摩洛哥事件などから判斷すれば、獨逸の意、佛國を脅迫して其の本國又は屬領の一部を割かしめることに、努力して居るとも見えた。さらに獨逸の英國に對する態度を見ると、頻りに海軍を擴張して英國の近海に集中し、ウイルヘルム二世は『獨逸の將來は海上にあり』などゝ絕叫し、さらに一九〇〇年の海軍大擴張案提議に當つては『獨逸は世界の最大海軍國と交戰して、優に其の國の海軍を威壓するに足るの艦隊を必要とす』と說明したところから考へると、獨逸の目的は英國に集中されて居るとも見えた。此れを要するに、獨逸のは東西併進南北兩進である。丁度護謨鞠を眞空のなかに入れたやうなもので、有らゆる方

面に向つて擴張せんとする。唯此の中に於いて奇妙なる除外例がある。それは露西亞である。觸るゝ者皆此れを斬ると云つた獨逸の武者振りに拘はらず、露國に對しては決して其の鋭鋒を現はさなかつた。否鋭鋒を現はさゞるのみならず、寧ろ反對に露國の甘心を獲んとするに汲々たる態度を示した。此れは頗る不思議な現象である。然かも露西亞の地たるや人口稀薄、文明尙ほ半開の狀態に在り。領土尨大、頗る未開の富源に富んで居る。獨逸人發展の地としては誠に恰好の場所である。四角八面に剃刀の如くに切り廻る獨逸が、露西亞を見逃して居るかに思はるゝは實に當代の奇蹟である。

カイゼルは『獨逸の將來は海上に在り』と言ひ、此れに阿附する新聞や雜誌や著作などもカイゼルの宣言を布衍して、頻りに英國反對の議論を發表したものである。併しながら外交上の魂膽といふものは、唯だ皮相の現象だけでは看破することの出來ないものである。だから敵を英國であると絕叫しつゝある間に、密かに何らか他に目的を抱いて居たかも知れぬ。或は其の目的を達する爲めには、英國を抑へる必要ありと爲したのかも知れぬ。獨逸の將來が海上に在りとは、此れを直譯すれば、英國の植民地を割取するの意味なれども、此れは第二の目的で他に第一目

的が在つたかも知らぬ。若し獨逸に斯る隱れたる目的、英國以外の目標があつたとすれば、夫れは當然露西亞であらねばならぬ。斗巴と揮ふ其の大刀から露西亞を除外せる事を併せ考ふれば、獨逸は露西亞に對して遠大な計畫を持つて居たのではあるまいかと思はれる。

そも〳〵獨逸が苟々しき迄に熱望して居るのは、第一に其の領土の擴張である。夫れが出來たら第二に將來の危險に備へることである。獨逸の人口統計を見ると、毎年九十萬づゝ增加するから、國內は勢ひ狹隘を告げて來る。此れを一平方哩に對する平均人口として見ると、獨逸は既に佛國に比して六割以上、英國の本土と略匹敵して居る。英國に於ける工業地帶や愛蘭の西部地方に於ける如く、人口が過度に稠密になつて、國民の健康を毀害することは、獨逸の最も憂懼するところである。然ればと云つて獨逸國民を海外に供給して、他國の發達を助成すると云ふ仁者振つた眞似は考へものである。成るべくは自國の境域內に置きたいと考へる。そこで如何にしても、自國の領土を擴張したいと考へつく。

獨逸の面積は二十萬方哩に過ぎないが、此れに反して露西亞は歐洲の部分だけでも、二百萬方哩を超え、亞細亞領をも合算すると八百三十八萬方哩、すなはち獨逸

の四十倍。單に歐洲露西亞だけでも獨逸の十倍に當る。世人は往々にして露西亞と言へば、雪と氷とに包まれた沍寒不毛の荒原。粗撲無智な農民(ムージク)が毛皮を着て震へて居る所と一概に想像するが、露國の氣候は其れ程不良ではない。寒暑の程度は先づ加奈陀と同じ位のものである。緯度から云へば莫斯科やリガでも、グラスゴウやコーペンハーゲンと同一である。キエフもフランクフルトに比較してそんなに北に偏在して居る譯ではない。オデッサとなるとヴエニスと緯度を同じくし、チフリス及びキヴアに至つては、緯度も氣候もナポリ及び君府と同一である。更に露西亞を獨逸と比較すると、亞細亞領は別として、歐露の大部分はそれ程北方に偏して居る譯ではない。また歐露にせよ亞細亞露西亞にせよ、其の南部は南部伊太利及び南部加州(米國)と同樣で、從がつて桃實、葡萄、煙草、棉花、其他半熱帶地に屬する天產物に豐かである。人口に至つては、歐露は一方哩平均六十五人、亞細亞露西亞は三人七分。此れを全體に平均して一平方哩二十人である。此れが獨逸になると一平方哩につき三百十人を下らない。非常なる相違である。斯くの如く露西亞には人口が稀薄であり、反對に頗る平原に富んで居る。然かも土質は甚はだ豐沃。故に露西亞は早晩世界第一の農場となり穀倉となるに相違ない。

鑛山も森林も到處にある。水利にも富んで居る。だから假りに露西亞の半分だけが、稠密なる人口に堪え得るとし、然して一平方哩の密度を獨逸の半分としても優に蒸々たる六億七千の人口を養ふに足る。

露西亞の人口は著しく增加しつゝある。現在では一億六千萬であるが、現在の增加率を以て進めば、三十年經つと三億に上る。獨逸の國土は精々一億の人口を養ふことが出來るに過ぎない。然れば假りに露西亞が三億の住民を以つて軍國主義を實行するに及ばゞ、一千萬人乃至二千萬人の壯丁を徵集することが出來るから、獨逸に取つては怖るべき勁敵である。此れは少なくとも可能性を有する問題として取扱はれなければならぬ。

露西亞人は多產的な人種であるから人口の增加は甚だ急激で、每年の出產率は四分八厘、之を獨逸の三分一厘に比較して著しい高率である。且つ獨逸の出產率は近年低下に傾けるに拘はらず、露西亞では益〻高騰しつゝある。露西亞は死亡率も高いが、出生の死亡に對する超過率は、千人に付き十八人半、獨逸は十三人八分であるから、露西亞人口の增加は獨逸よりも五割だけ多い勘定になる。實例として一八九七年と一九〇九年とに就いて見るに、此の十二年間に露西亞では三千萬人、

獨逸では一千萬人の增加で、すなはち露西亞の人口增加は、獨逸に比して丁度三倍となつて居る。露西亞は現在でも一億六千萬の人口を持つて居るが、此れが今後三十年間には三億に增加する。然も軍國主義の發達し得る國である。獨逸は如何に多產的なりとは云へ、土地が限られて居るから到底露西亞のやうに繁殖する譯には行かぬ。人口の繁殖を計らんとならば、有り餘る食物と土地とを供給せなければならぬ。換言すれば獨逸は附近に向つて、其の領土を擴張せなければならぬ。それは何らかの方法と形式の下に、露西亞を何うかするを以つて最も妙策とする。露西亞亂れ獨逸また亂れたから、今は如何とも致し方がないが、獨逸まづ秩序を回復すとすれば、必らずや露西亞に向つて發展を劃することであろう。

露西亞は日露戰爭までは非常な强國として取扱はれ、此れを打ち負かすことは出來ない相談であると一般に迷信され、露西亞自身は特に然かく確信して居た。第一實質は別として、露西亞は當時世界中最大の軍隊を所有して居た。また箇々の軍人に就いて云ふも、彼れらは非常に勇敢にして死を怖れず、戰へば必ず勝つと言ふ有樣であると固く信ぜられて居た。おまけにナポレオンの軍隊が露國に侵入(一八一二年)し、氷雪の苦しむる所となり、意外の敗戰を招いたなどの事があり、爾來何とはなしに露西亞と云ふ國は、容易に征服することの出來ないものだと、妙に買ひ被られる事となつた。併しながら烱眼なる獨逸は、何時までも露西亞を買ひ被つては居なかつた。ナポレオンの敗北にしても、其の當時は交通不便だつたからのことで、何も露西亞人が偉いからではない。既に相當に鐵道が普及し、昔のやうに交通の不便な、道路も旅舍もない時代とは違つて居るからして、ナポレオンの莫斯科敗北の如き事件は、最早繰り返さるゝものでないと云ふことを看破した。また露國の軍隊にしても、その實は見掛け倒しで、鋼鐵のやうに見せかけたペンキ塗であると觀察した。獨逸人が斯く露西亞人に其の正當なる評價を與へ出したのは、蚤く日露戰爭以前のことで、彼れらは何時露國と開戰するも勝利は獨逸のものであると確信して居た。唯だ獨逸にはビスマーク及びウイルヘルム一世の露西亞に對する傳統的外交政策とも云ふべきものがあつて、飽くまで露西亞と戰ふことを回避する方針を固守する傾向があり、此の傾向は此れを破る非常に有力なる理由が無ければ、先づ其の儘にと云ふやうなことで終始して來た。そこで獨逸は露西亞に對する十分の確信あるに拘はらず、露西亞に挑戰の手袋を投げつけないで、反つて露西亞の甘心を買ふの政策を採り來つた。

ナポレオンが莫斯科で失敗したのは、一つは彼れが戰略を誤つたに基因するが、今一つの大なる理由は交通の不便と云ふことである。今日を以つて當時(一八一二年)に比較すれば、事情も全く一變して、獨逸から露國の南北兩都に達する沿道の人口は稠密、道路も鐵道も極めて便利になつて居る。且つや今日では假りに獨逸が露國へ侵入する計畫を樹つるとせば、必ずしもナポレオンを模倣して、同一の通路に由つて莫斯科へ出づる必要はない。獨逸は莫斯科よりヨリ重要なペトログラードへ海路を通じて容易に入ることが出來る。若し新獨逸にして或る程度の海軍を擁するに至らば、獨逸は數日を出でずして、其の海軍を以てペトログラードを衝き、同時に陸路リガ、ドルパット及びナルヴァを經て、波羅的海に沿ふて紆曲しつゝ、ペトログラードに出ることが出來る。勿論萬一の場合に於いては、隧道や橋梁は破壞せられるものと見なければならぬから、獨逸が其の全部の軍需の供給を鐵道にのみ依賴することは出來ないと結論せなければならぬ。併しながら海陸相待つて波羅的海を手中に握れば、軍需の供給は大たいに於いて自由である。或は英國の如き、或は米國の如き强大な海軍國が露西亞に加擔して、獨逸の海上に於ける活動を妨礙するやうな事があるとしても、此の場合に於いては獨逸は丁抹の

內海を利用して、波羅的海と交通することが出來る。更に獨逸にしてシュレスウイッヒに砲壘を築くに成功せば、此處に蟠居して內海の航通を脅迫せんとする敵國の艦隊を防遏することは易々たる事業である。丁抹自身も其の中立を維持するの必要上、或は內海を封鎖するの擧に出るかも知れぬ。斯うなると獨逸の位置は益〻强めらるゝ譯である。獨逸から云へば波羅的海をさへ支配すれば、交通にも軍需の輸送にも、何等の牽制を受けずして、長驅ペトログラードに進擊することが出來る。獨逸の前線から莫斯科までは容易な道程ではないが、ペトログラードへは其の半ば以下の道のりであるから、ナポレオンの露國侵入に比較すると、獨逸が露西亞の首府を突くことは遙かに容易である。然して既に獨逸にして波羅的海を支配し、更に首府を占領したならば、勝敗はすなはち此に決したものと見て宜しい。それでも萬一露西亞が兜を脫がず、尙ほも屈服せない場合には、獨逸は海陸の兩方面から、舊都莫斯科を牽制し終に此れを攻略するは難事ではない。

然らば假りに今後獨逸が何らかの機會に、露西亞の侵入を企つるとして、果して如何の方向によるかを考へて見たい。地圖を一瞥すれば露領波蘭が、楔の如く獨逸と墺多利との中間に箝入して居るのは明白に分る。此の楔を取り去つて此れ

を獨逸に併せ、獨逸の前線を眞直に改造することは、獨逸に取つては望ましいことには相違ないが、併しながら此れは一種の空論で、實際には出來ない相談である。巴里會議の結果新興波蘭が出來上ると云ふ世の中に、此れを逆轉せしむるところの波蘭の併合が實現するとは思はれぬ。併しながら百歩を讓つて、波蘭が獨逸に併呑し得らると假定するも、波蘭の併合は獨逸に利益よりも不利益を與へるものと考へられる。今日波蘭には三百萬人以上の獨逸人が居住して居るが、彼れらと獨逸本國との關係は甚だ圓滿を缺いで居る。次ぎに波蘭には他に數百萬人の異民族が居り、此れを圓滿に統御することは、殆んど不可能事に屬す。故を以つて波蘭を併呑することは、獨逸に取つては寧ろ國力を疲弊さする原因となる。假りに獨逸の國力が疲弊し、他にもいろ〳〵不便犧牲を供するものとしても、獨逸が波蘭を取つた爲めに、露西亞が致命傷を受けるとか何とか云ふ事ならば、此の犧牲此の疲弊も忍ぶべしとせんも、波蘭を取られたつて露西亞は何らの痛痒を感ずるものではない。だから波蘭を取ることは、獨逸に取つては結局骨折損の草疲れ儲けである。要するに波蘭方面は、獨逸の侵出に對しては甚だ有望でないと云ふ結論になる。

此れに反して波羅的沿岸は、やゝ事情を異にして居る。波羅的沿岸に亘つては

クールランド、リウォニア、エストニアの三州があつて、之を波羅的三州と謂ふ。此の三州は中古から、獨逸の植民地として發達し來りしものである。最初には獨逸の僧侶が入込んで、土民を基督教に化し獨逸の文化を移植せるが、後に至りては政府も協同して、その開發に努力した。然るに世は十七世紀となり、獨逸は宗教改革の騒動の中心となり、爲めに四方を經營するの餘裕を失つた。此の隙に乘じて西方ではアルサス、ローレンを佛蘭西に奪はれ、波羅的の三州も露西亞、瑞典及び波蘭のために蹂躙せられた。ノイシュタット(一七二一年)の講和會議で、リウォニアは露西亞の領有に歸し、獨逸は唯だリウォニアに法廷と學校と教會とを設け、新教を宣傳するだけの特典を得た。然るに其の後十九世紀の前半に及んで、露西亞は盛んに自國の農民をリオウニアに移住せしめ、且つ露國の舊教を宣傳せしめた。すなはち露化運動なるものである。次いで一八七〇年代となり、猛烈なる汎スラヴ運動なるものが開始され、遂に一八八一年に至つて、獨逸がリオニアに有して居た三箇の特權を奪つてしまつた。爾來獨逸人の小學校も大學も悉く露化せられ、公用の國語としては露語を强制し、獨逸人の官吏や教師を免職して、露西亞人をもつて此れに代へた。此の時に新教の僧侶にして迫害を受け、流謫せられたものも少く

ない。されば當時獨逸本國でも怨嗟の聲が盛んに起り、何時かは言語を同じくし文化と宗教とを同じくする、波羅的人と獨逸人とを統一しやうと熱望する愛國者が輩出するに至つた。

此の露化運動の結果として、地名まで露化せられたものが少くない。それに拘はらず今日波羅的州の都會の多くは獨逸名である。此れで如何に獨逸の植民が露化以前に於いては盛んであつたかゞ分る。例を擧げるとフラウエンブルグ、ブリンツェンホーフ、ノイハウゼン、ヤコブシュタット、マリエンブルグ、レムブルグ、ミュールグラーベン、ゼンネン、キュールビス、ワイゼンシュタイン、ワーゼンベルグ、グローセンホーフなど、すべて獨逸式の地名である。故に感情的に考へると、今日の波羅的州に對する獨逸人の感情は、恰かもアルサス、ローレン二州を佛國から回復する以前の獨逸人の感情と同一である。今日でも波羅的州には極端なる露化政策に拘はらず、獨逸語を使用する住民は隨分と澤山居る。だから獨逸にして波羅的州回復のために起つと呼號せんか、波蘭などゝは違つて、國民の同情を引くに十分なる標語である。

『在外獨逸年鑑』に依れば、波羅的州に於ける獨逸人はリウオニアに十萬人(人口の一割)エストニアに二萬人(同六分)クールランドに五萬人(同九分)であつて、全體の

人口に比較すると、餘り多數であるとは云へぬが、併しながら同地方に在る露西亞人の數に比すればまさに二倍以上である。殊に都會では人口の二割五分乃至五割まで獨逸人である。其の上獨逸人は一般に富裕で大地主、銀行家、大商人、辯護士、醫師、教師、牧師なぞすべて中流以上の地位を占め、リガだけでも獨逸語の新聞雜誌が二十も發行せられて居る。其の爲めか獨逸人は勿論、獨逸人ならざるも中流以上の人々は、一般に獨逸式の生活を營んで居る。斯くの如く獨逸人は中流上流に位して居るが、露西亞人は多く下層の勞働階級を占めて居る。宗教も露西亞教は勢力なく、單に人口の一割だけの信者を有するのみで、殘り九割のうちの大多數は獨逸の新教に歸依して居る。つまり波羅的州は政治的には露西亞のものなれども、實際的には獨逸領であると云ふ方が適切である。

波羅的州は露國秕政のために人口頗る稀薄。たとへば東部普魯西では一平方哩當り平均人口百三十七人、西部普魯西では百六十六人、獨逸全國では三百二十人であるのに、リウオニアでは僅かに八十人、エストニアでは六十人を算ふるに過ぎぬ。此れは土質の關係でも何でもなく、全く政治のお蔭である。土質は全然普魯西と同じであるから、普魯西現在の人口の密度を標準として打算すると、波羅的州

で六百萬人を養ふことが出來る道理である。故に獨逸は波羅的州をさへ獲得すれば、人口の過剰を此地に放出することが出來る譯である。現今波羅的州の住民は、宗教上では露西亞教のために抑壓を受け、農民は土地を所有せざるが爲めに不平滿々と云ふ有樣であるから、獨逸が之を領有して、露西亞教の抑壓を除き、且つ獨逸が本國で實行して居るやうな政策を施して、小作農民に土地を分配することにするとなれば、波羅的人は擧つて獨逸の支配を歡迎するに相違ない。また獨逸本國の青年輩も土地の分配にさへ與かれるとなれば、幾らでも工場勞働を止めて、波羅的州に移住するであらう。

波羅的州は獨逸の東端と、唯だ一條の狹路を以て連絡して居るに過ぎないから兩地を有機的に結合するには、その中間に介在する露領コウノ州をも領有する必要がある。コウノ州は面積一萬五千餘方哩、人口百七十二萬。波羅的三州だけでも優に巴威、ウェルテムベルグ二國の面積に比敵するのに、更にコウノ州を併合するとなると、同州はバーデン、索逕、ヘッセ三國の面積に等しいのであるから、波羅的州とコウノ州とを併有することゝなれば、獨逸は四分の一だけの領土を擴張する結果となる。

波羅的州が一度び獨逸の手に入らんか、萬一の場合露西亞に侵入するにも餘程便利な地位を握ることゝなる。現在では獨逸の前線からペトログラードまで四百五十哩であるが、波羅的州を獲ると此れが僅々八十哩となつて、優に四日で進軍することが出來る。且つ波羅的州は天然の要塞を成して居て、諸處に森林や湖沼が多いから、之を利用して露軍の進擊を防禦することが出來る。殊にペトログラードに近い方面には、ペイバス湖とプスコウ湖とが九十哩に亘つて横はつて居るから、進んで攻めるにも、退いて守るにも實に屈竟の地形である。

ペトログラードは芬蘭灣の一端に在るが、その芬蘭灣は波羅的海の一部で、芬蘭國は灣の北岸を占め、その南岸は百七十哩に亘つてエストニアの領分である。故に獨逸が波羅的州を占領すれば、露國がペトログラードから外洋に出るには、百七十哩も獨逸の領海を通過しなければならぬことになる。換言すれば露國を囊の底に葬り去ることが出來るのである。

芬蘭は人口三百萬。其の内四十萬は瑞典人で露西亞人は六千に過ぎない。且つ芬蘭住民の九割八分は新教徒で、露西亞教又は羅馬舊教の信者は二分にも足りない。すなはち人種の上に於ても、宗教の上に於ても、露西亞と芬蘭とは何ら共通

の點を持たない。從來政治上には露國皇帝が芬蘭の太公を兼ねて居て、一つの屬國の狀態に居たが、今は獨立國として立つて居る。併しながら芬蘭はスカンヂナヴィア聯邦でも造つて其の一員となるか、或は事實上は何國かの保護國みたやうなものにならねば、到底獨立獨歩し得る程の力がない。外界の形勢に應じて時に親英、時に親獨政策を持し來つたが、此の順應政策は今後も永く續く事と思はれる。順應政策は若し獨逸が强くなつたら、獨逸の陣營に來り投ずるの意味である。だから假りに戰後の獨逸が、何らかの形式の下に芬蘭を其の羽翼の下に收め得たとするならば、芬蘭とペトログラードとは僅かに十哩を隔つるのみであるから、ペトログラードは獨逸の手に握られたのも同樣である。此の危險は露國によりても感知され、既にブロードキン將軍の如きも下の言を爲して居る。

『波羅的海は將來必ずや我が國と敵國との競爭舞臺となるであろう。敵軍が露西亞を窘迫するには、まづ波羅的海に侵入し、其の艦隊と都市とを攻擊して、海上に封鎖を施し、然る後に陸上に進軍するであろう。殊に波羅的海の沿岸でも、芬蘭は首府に最も接近して居るから常に敵國の注目を惹く。彼得大帝が首府を莫斯科から、海濱のペトログラードに移したのは、海洋を經營する雄圖に出でたものに相違はないが、同時に此れがため露國をして危險なる地位に進出せしめた。爾來敵は露國を攻擊するに屈竟なる足場として、常に芬蘭を窺窗して居る』。

波羅的州を獨逸に占領せらるゝのは、單に露國を軍事上の危險に陷し入るゝのみならず、又頗る經濟上の不利益に投入する所以である。露西亞の海洋貿易の優に三分の一は、波羅的州の諸港に於いて行はれる。北方に於けるリガの地位は、恰も南方に於けるオデッサの如きものであつて、リガは獨逸で云へばハムブルグである。波羅的州の諸港すなはちリガ、レヴァル、リバウ、ヴィンダウ、ペルナウに於ける外國貿易は、一九〇九年には五億三千五百萬圓。リガだけでも二億九千萬に上つた。現今リガは人口三十五萬、露西亞第六の都會である。

露國の製造工業は露領波蘭のロッズ附近を中心として居るが、此の製造工業の中心に最も近いのは波羅的州の海港である。從つて波蘭の產業は、波羅的州の港灣に依賴して始めて發達する約束の下にある。露國から木材や農產物を輸出するにも、又石炭、綿花、羊毛、ゴム、鑛物、機械などを輸入するにも、波羅的州の諸港は極めて必要である。だから若し露西亞にして波羅的州の諸港を失はんか、此れ露國の商業に取りて實に由々しき打擊である。

露西亞は前云つた如く其の强大を買ひ被られ、然して露西亞自身も漫然として其の氣で居た。露西亞人の强勇は天下無敵であるから、假りに獨逸と開戰しても其の陸軍は容易に獨逸の軍隊を擊退し、また海軍は獨逸の艦隊をキールやウイルヘルムスハーフエンに遁竄させることが出來るなどゝ考へて居た。併しながら其の後數回の實物教育により、斯る樂觀の幾分か空想に過ぎないことを自覺して、獨逸との國境に多數の騎兵隊を配備し、獨逸の前線に最も近いリバウ港を軍港に改むべく一億八千萬圓を支出した。然るに日露戰爭があり、露西亞の誇りたりし其の海軍も陸軍も、あはれ日本の爲めに散々に擊破されて、此處に全くその迷夢から呼び醒まされた。夢から醒めて見ると其の軍備は缺點だらけである。そこで此れでは行かぬと云ふので、軍事の最高幹部は獨逸が海上よりペトログラードを攻擊するの危險に對して、大なる考慮を拂ふやうになつた。然うして從來巨費を投じたリバウ軍港を放棄して、海軍の精鋭をペトログラード及び芬蘭灣に集中するの方針を採つた。露國は又二億二千萬圓を投下して、ペトログラードの防備を完成し、且つ芬蘭灣の入口に在るレヴアル商港を軍港に改め、更に進んで弩級艦二萬三千餘噸の戰艦數隻を建造するの案を樹てた。此れは世人の信ずる如く日本に對する復讐を目的とせるものでなくて、寧ろペトログラード防備が目的であつたのである。

歐亂少し前のこと墺多利が二萬二千噸級の戰艦四隻を建造して、世界の注目を惹起したことがある。此れも一部の論者が忖度するやうに、獨逸と協力して英國に對抗せんがためではなかつた。蓋し墺多利は海外に植民地を獲得すべき必要を持たない。また英國に打擊を與へたからとて、墺多利は格別利益する所がない。墺多利の利害關係はそんな方面ではなくて、實は近東殊にサロニカ及び君府である。然らばすなはち此の方面に於いて、露西亞と衝突する虞れがある。況んや墺多利がボスニア及びヘルツエゴヴイナを併呑(一九〇九年)するに至つて、露國の怨を買ふこと益々深くなつた。そこで大いに獨逸と共力して、露國に備ふるの必要がある。此の爲めの軍艦建造であつたのである。

飜つて此れを露西亞から見ると、露西亞の最も重要なる部分は、波羅的州と波蘭のワルソー及びロッズ附近、及びキエフ並びにオデッサ附近の諸州である。此れらの諸州は不思議にも、何れも獨逸若しくは墺多利と國境を接して居る。然るにボスニア、ヘルツエゴヴイナ問題の解決と同時に、獨逸と墺多利との提携は更に一

歩を進めた形勢であつたから、露國は益々危險の肉薄し來るを感せざるを得なかつた。

●

今や獨逸も露西亞も解體して、其の前途は何れも未知數である。併しながら早晩兩國とも何れかに固まるべく、然して獨逸がやゝ秩序を回復して國民一致的の運動を起すとき、獨逸は矢張りウイルヘルム二世のやうに『獨逸の將來は海上に在り』と云ふであろうか。或はまた『獨逸の將來は陸上に在り』と喝破するであろうか。無論原料の關係から海外植民地を希望するかも知らぬが、第二の獨逸或は現在獨逸の延長を形造ることは、獨逸に取つて更に必要のことかも知れぬ。故に或は其の標語を『陸上に在り』と改め、さらに『陸上と云ふも接續せる陸上の謂なり』と追加する樣になるかも知れぬ。若し然りとすると、此れ獨逸の露國征服の第一齣である。無論斯うなると英國は默つて居ない。必ずや有力なる抗議を獨逸に致すに相違ない。故に獨逸は羽翼全く成るまでは、正面から攻略することをせず、經濟的の侵入に甘んじ、機を見て政治上の權利を打ち立つるの方法に出づるかも知れぬ。フオン・デル・ゴルツ將軍が波羅的諸州に頑張つて居(一九一九年十月)るのは、或は獨逸の露西亞侵入の第一歩を劃するものとなるかも知れぬ。

第九章　和蘭の運命

獨逸對列强の關係は、從來政治家や政論家によつて盛んに研究せられたが、獨逸對和蘭の關係に至つては、とかく世人の注意から逸せられて居る。併しながら獨逸の政治上及び經濟上の勢力が、戰後に於いて發展するに至らば、先づ其の影響を蒙むるは近東にあらず、將た阿非利加にもあらず、最も手近かなる和蘭なるべきは議論の餘地がない。和蘭は弱小な過去の國であるから、和蘭自身が外交舞臺に何等かの勢力を有することは望まれぬ。併しながら政治的また經濟的に獨逸との關係が甚だ密接であるが故に、そこに重大なる意義を取得し來るのである。過去の事例に徵して見るも、和蘭は曾てフイリップ二世の時代にも、ヘンリー四世の時代にも、クロムウエルの時代にもルイ十四世の時代にも、ナポレオン一世の時代にも、歐洲に於ける列國政爭の中心地點となつたことがある。歴史は往々にして繰返す。サラエウオの一彈が歐亂の導火線なりしは爭はれぬが、唯此れ導火線である。爆發の本體ではない。爆發の本體は巴爾幹よりも、ボスフオラスの兩岸よりも、寧ろライン河の河口に伏在する。過去四百年間を通じて、歐洲の爭覇戰は必ら

す和蘭を中樞とし、和蘭は絶えず其の戰場を供給したが、今日でも多少形式に相違はあれ、此の關係は依然として存在する。此の意味に於いて和蘭は歐洲政策の中心の一である。

獨逸と和蘭との關係を知り、その外交上の意義を究めるには、まづ和蘭が獨逸の工業及び商業に對して、如何に重要なる關係を有するかを明かにせなくてはならぬ。

和蘭王國は地形の上から云ふと、獨逸の商工業上の最大通路を遮斷して、その前方に横たはつて居る。さうして獨逸の最大鑛山地帶及び最大工業地域は、ライン河及び其の支流（ルアール河、モーゼル河、ザール河、マイン河）の兩岸に集中して居る。一九〇二年デュッセルドルフに於いて大博覽會が開催せられたとき、説明せられた統計に依ると、ライン河地方の普魯西の二州（ライン普魯西及びウエストファリア）では、面積から言へば普魯西全國の一割五分に過ぎないが、石炭の消費量は全國産額の七割一分、鐵の産額は八割一分、鋼の産額は八割六分、紡績錘數は八割三分を占めて居ると云ふ。然かも此れらの統計は、普魯西一國に就いてのみの數字である。此の外にもライン河の沿岸地方には、バーデン、アルサス、ローレン、ヘッセ、

巴威（バイエルン）などゝいふ重要な諸國が散在して居るから、獨逸工業はライン河地方に悉く集中して居るといふも敢て過當ではない。然うして此れらの地方の産物は、多くライン河を通路として海外に輸出せられ、又反對に此れらの地方で需要する原料品及び食糧品は、概ねライン河を經由して輸入せられる。だからライン河は獨逸工産物の輸出及び原料品の輸入を掌る最大通路であると云へる。併しながら何分にも工業の中心地帶は、海口を距ること百五十哩乃至三百五十哩に及ぶので、此れを英國などの工業都市が、いづれも海港に接近して居るのに比較すると、非常なるハンデキャップの下に努力して居ると云ふことになる。此れは實に獨逸の製品が外國の製品と競爭する上に於て、永く忍ぶことの出來ない苦痛であるから、獨逸が此れらの工業地方と直接に連絡すべき海港を獲得せんがために苦心するのは、寧ろ當然の事と云はなければならぬ。況んや獨逸の輸出貿易は概ね海洋を經由して居るから、此の苦痛は益々甚だしからざるを得ぬ。一八九八年獨逸帝國海事局が公表せる記錄に依れば、獨逸輸出貿易の三分の二以上は經海貿易なりしが、爾來獨逸の輸出貿易は戰前に於いて二倍以上に增加して居たから、多分其の四分の三内外を經海貿易によると見て差支えなからう。形勢斯くの如くであるから

戰後獨逸の工業及ひ貿易が發展する場合に於いて、其のライン河沿岸地方を連絡する便利なる海港を獲得するの必要は、益々痛切を加へ來るべきである。

然らば獨逸が熱望するらしき海港は果して何處にあるか。ライン河の河口を扼して居るのは和蘭と白耳義とであるから、自然の數として和蘭か白耳義の海港でなくてはならぬのである。數ある港灣中最も獨逸に有利なるは、アントワープとロッテルダムとである。此の二港に比較するとハムブルグの如きは、到底第二流に墮せざるを得ない。なるほど以前はハムブルグは隆々たる海港であつた。併しながら近來は次第にアントワープ及びロッテルダムのために凌駕せらるゝ形勢に陷つた。戰前の統計によれば兩港の船舶貿易は、各ハムブルグに殆んど二倍し、ハムブルグは今や歐洲北岸の貿易港として遠からず第三流乃至第四流に落ちんとしつゝある。之に反してアントワープは、五十年前には一年三十萬噸であつたものが、二十年前には二百萬噸、戰前は一千二百萬噸の輸出入となり、ロッテルダムは五十年間に四五十萬噸から一千萬噸に躍進して居る。斯くの如くアントワープ、ロッテルダムの兩港が榮えて、反對にハムブルグが遲々として振はざる理由は、兩港は獨逸殊にライン河地方に於ける工業地の出口となつて居るのに、一方

ハムブルグは、主として墺多利相手の貿易に從事して居るからである。生々の氣を帶ぶる工業地を相手とする兩港が榮え、老大の墺國を華客とするものゝ振はざるのは當然のことである。獨逸の港たるハムブルグが獨逸品を扱はぬと云へば一見極めて不可思議のやうであるが、此れは獨逸政府統計局の調査表を見れば分る。すなはち夫れによれば獨逸外洋貿易の大部分が、ハムブルグ及ひブレーメンを經由せず、反つてアムステルダム、ロッテルダム及びアントワープを經由することを語つて居る。だからアムステルダム及びロッテルダムは、正に獨逸のリヴァプールと云つた格である。

斯やうに和蘭の港灣は、獨逸の產業及び貿易の發達によつて、非常に繁昌しつゝある。故に獨逸をして言はしむれば、和蘭は獨逸の恩惠によつて殷富を加へつゝあるのである。尤もアントワープやロッテルダムの鉅商は多く獨逸人で、和蘭人は其の雇人になつて、餘澤を受けつゝあるに過ぎないから、利益を受けるものは主として獨逸人であつて、和蘭人ではないと云ふことが出來る。併しながら大體から見て和蘭の商業が獨逸の恩惠を蒙りつゝあるの深きは、到底否認すべからざる事實である。そこで問題が起る。それは獨逸が果して何時までも、此の恩惠を無

債で賦與して與れるか否かと云ふ疑問である。戰後ライン河地方とシレジアと何つちが工業の中心點になるか分らぬが、ライン河は現實であつて、シレジアは尙ほ不明なる將來に屬する。例のトライチユケ教授が此の點に關して獨特の無遠慮振りを發揮して『ライン河は諸川の大王である。然かも我獨逸に取つては、何れほど貴重な天惠であるか知れない。然るに我邦の迂濶なる、ライン河の最も重要なる部分は、外國のために領有せられて終つた。此れは已むを得ずとして、ライン河の河口を支配することは、獨逸に取つては必要缺くべからざる事項である。和蘭と純然たる政治上の關係を結ぶ必要はなかろうが、和蘭と獨逸とを經濟的に結合することは絕對に必要である。少くとも和蘭をして獨逸と關稅同盟を組織せしめることは、日常のパンに於けるが如く同樣に必要である』と喝破したのは、如何にも尤もなことであると云へる。

それゆへ二三十年以來といふものは、獨逸の民間では和蘭と提携するの必要が頻りに唱へらるゝに至つた。唯だ政府だけは容易に此種の議論に動かされず。否單に動かされないのみならずウイルヘルム二世の時代に至つては、反對に經濟的壓迫を和蘭に向つて加へるやうになつた。たとへば獨逸製品の和蘭の港灣に

出るのを防ぐために、ドルトムンドからエムデンまで運河が開鑿（一九〇一年）せられて、獨逸炭鐵の中心地とエムデンの海港とが連絡せられたなどが一例である。エムデンは和蘭と獨逸との國境に在る小港。ドルトムンドは獨逸の石炭の本塲である。兩者を連絡する運河の開鑿費總計四千萬圓、一哩二十五萬圓の割合である。水深は全部八呎四分の一。六百噸以上の船舶の航行に堪え得る。

斯う云ふ次第だからエムデンの將來は朝暾の如きものであると云ふので、政府は四百萬圓を支出して大いに港灣を修築した。運河の成績も豫期以上に良好であつたので、政府はます〳〵乘り氣となり巨資を投じて港灣の敷地を擴張し、今日エムデン商港の規模の巨大なる、遙かにアントワープやロッテルダムを凌駕するのみならず、英國の港灣と雖も一籌を輸すると云はれて居る。此れはつまり在來和蘭と經濟的聯合を形ち造るべしと云つた政策が、反對に和蘭を壓迫し、港灣的自足自給主義を實行せんとするものの。非常なる政策の變更である。獨逸は尙ほ此れでも足らずとや、更にドルトムンドとライン河とを連絡すべく、二千五百萬圓を以て、運河の延長工事に着手した。此の工事が竣成せば、單にドルトムンドのみならず、ライン河沿岸地方一帶の商業を、和蘭の海口を經由せしめず、悉くエムデンに

引きつける事となるであらう。

斯く說き來ると獨逸は和蘭に對する野心を全然放棄したかに見えるも、事實は必らずしも然うではない。和蘭は對岸の英國が怖い眼で睨んで居るから、イザと云ふ場合に困る事が出來るかも知れぬと云ふので、他の道路を造つたまでゝある。然かも此のドルトムンド、エムデン運河には二十一箇の閘門があつて、全長を航行するのに五日間を要する。此れをライン河の航行が二日半乃至三日半で事足るに比すれば、使不便の差は非常なものと言はざるを得ない。故に若し今後和蘭にして獨逸と關稅同盟を組織して、獨逸の論出入品に極めて低率の關稅を賦課するに止むるならば、獨逸は恐らく其の不便な運河に依賴することを廢し、全體和蘭に賴るに相違ない。或はドルトムンド、エムデン運河を開鑿したことは、斯かる大勢を馴致する爲めの一つの手段であるとも見らる。吾人は其の然ることを信じて疑はない。何となれば和蘭をして獨逸に有利なる關稅同盟を結ばしむるには、獨逸は必らずや其の運河を經營し、港灣を擴張して、場合によりては和蘭に依賴するの必要なきことを有力に示し、且つ和蘭が交涉に應じない場合には、アムステルダムやロッテルダムの商業を擧げてエムデンに奪ふといふ意氣込みを以つて、此れ

を脅威せなければならぬからである。だからドルトムンドとライン河との連絡工事の經營の如きも、目的は經濟上よりも寧ろ政治上にあると思はれる。現にドルトムンド、エムデン運河が始めて開通した當時（一九〇一年）『國境新報（グレンツボーテン）』といふ週刊雜誌に『和蘭と獨逸』と題して匿名の論文が掲載せられた。此の雜誌には時々政府の御用紙らしい色彩が現はれる。殊に前記の論文の如きは、當時の宰相ビウロー公の口調そつくりであつた。その要領を摘記すれば

『和蘭の國富は大體に於て、獨逸の海外貿易によつて增進せるものである。然るに此の貿易は今回ドルトムンド、エムデン運河の開通した結果として、全然和蘭の海港を去り、エムデンに集中せしめることが出來る。エムデンは從來等閑に附せられて居つたが、爾今漸次發達してロッテルダムの勁敵となるであらう。故に若し獨逸にして和蘭の商權を剝奪しやうと思へば、それこそ實に容易の業である。これを反面から云ふと和蘭の經濟は獨逸に依つて立つのであるから、和蘭としては何等かの形式を以て、獨逸と經濟的に提携することが必要だと云ふ結論になる。

『和蘭は政治上の意味に於いて列國の窺窬を免がれない。和蘭は中立國と定められては居るが、これは畢竟一片の空文に過ぎないから、一朝有事の場合には、何ら

の價値なきものとなる。近頃列强は毒牙を振ひ、西班牙は合衆國のために領土を割かれ、葡萄牙は英國の商權に籠絡せられて、蜘蛛の巣に捕はれた蜂の如き有樣にある。和蘭は必らずしもボア人の如き悲慘なる運命にも陷るまいが、併しながら餘程用心しないと、英國の張れる罠に懸からぬとも限らない。和蘭にして斯る危險から免がれんと冀ふならば、すなはち獨逸と提携することが唯一の途である。獨逸は海軍を擴張して、飽くまで英國と競爭するの決心を改めない。無論獨逸の味方となるも、敵となるも和蘭の自由ではあるが、併し相當の力を持つて居ない和蘭が、獨逸の敵となることは、言ふべくして行なふべからざる事である。だから和蘭としては獨逸の味方となつて、其の圈內に入り來るより他に途がない。これ獨逸の爲めと云ふよりも、寧ろ和蘭自身の爲めである』。

右は丁度ボア戰爭の最中に發表せられた論文で、和蘭人の英國に對する反感が極度に達して居た場合に乘じて、和蘭の尻をつゝいたものである。尻をつゝく目的は無論和蘭を籠蓋せんことに存する。

或る論者は和蘭が獨逸の一部になるなぞと云ふことは、餘り馬鹿〳〵しくて到底考へられないと云ふが、事實は必ずしもそんなに馬鹿〳〵しいものではない。

元來獨逸は單純な一國ではなく、多數の王國が進んで聯合して聯邦を組織したものので、今後と雖も恐らく大たいに於いて、斯くの如き政治組織を採るものと思はれる。だから假りに和蘭が獨逸と併合したつて、大きな團體生活の一員として以前と同一程度の自由を享有することが出來るのである。戰前でも然うであつたが戰後は民族の自由と云ふやうなことが、更に高唱せらるゝ事となるから、和蘭は相當の條件を以て獨逸と併合し、相當の特權を自國に保留するといふが如きは、ます〳〵容易なる相談である。たとへば和蘭は獨逸に對して兵役の義務を免除せらるゝこと戰前の巴威（バイエルン）なぞと同じやうな位置に居て、自國だけの獨立の軍隊を組織することも出來やう。然うして獨逸は單に戰爭の場合に、自國の軍隊が自由に和蘭國內に進出するだけの特權を有すると云ふやうな事にすれば宜い。財政問題も和蘭は極めて輕微な納稅の義務を獨逸に對して負擔するに止まると云ふやうな事に相談が纏まらう。要するに和蘭が獨逸の聯邦に加入することは、評者が云ふが如き然かく空想的のものではない。寧ろ實際問題政治問題として研究の餘地が十分にある懸案である。

併しながら獨逸は如何に和蘭との併合を望めばとて正面玄關から政治的に和

蘭を侵略しやうとはすまい。カイゼルの政府の時代に然うであつた如く、戰後の獨逸も矢張り此の經濟的侵略主義を繼承するものと觀察せらるゝ。所謂平和侵入である。だから獨逸の商人は盛んに和蘭に入込んで、アムステルダムやロッテルダムの商取引は、和蘭人よりも獨逸人の方が寧ろ多くの割前を經營して居る。重要な銀行や海運會社や工場や商店も大抵は獨逸人のものである。和蘭や白耳義は商業萬能の國であるから、此れらの獨逸人實業家は非常に社會に尊敬せられて居る。從がつて政治上の位置も重くなる。政治的に重要となると、實業方面にもます〳〵發展して來る。斯くして和蘭や白耳義の商人は、日に月に彼等の勢力範圍を獨逸人に蠶食せられつゝある。斯の狀態で押し進んだら和蘭とは名ばかり、實は獨逸の延長となつて終ふばかりである。だから寧ろ思ひ切つて獨逸の關稅同盟に加入するならば、此處に一躍して彼れらは新らたに六千六百萬人(獨逸人の人口)の顧客を增加する譯であつて、彼れ等に取つて非常に有利である。和蘭の運命は獨逸が勃興するに從がつて、追々と盛まると考へられる。

尙ほ茲に注意すべきは、和蘭は富國ではあるが、その天然の資源には甚だ乏しいことである。和蘭は海岸の平地であるから天產といへば些少の穀物だけで、石炭も、鐵鑛も、木材も、石材も全然ない。然かも其の人口は獨逸よりも稠密である。だから和蘭は食料でも原料でも、概ね皆此れを外國に仰がなければならぬ。然うして自國の產物として外國に輸出するものはと云へば、主として野菜、花卉球根、乳酪、乾酪、摸造乳酪なぞで、其他の製造工業は石炭の產額に乏しいために、前途頗る有望でない。然るに一方人口の增加は非常に急激である。此の急激に增加する人口を支へるのは、其の主なるものは商業であり、然して商業は主としてライン河口に良港を有することに出發するのであるから、原因結果の關係から云ふと、和蘭では其の海港が人口を支へて居るのである。然るに獨逸が其の商業の全部を擧げてエムデンに移して終ふとすれば、和蘭の殆んど唯一の天惠たる其の良港も、何の役にも立たぬ事になる。すなはち國民は餓死せなければならぬ。斯ふ云ふ事情の下にある和蘭人のことだから、獨逸が其の和蘭海港の商業を奪つて、此れをエムデンに移すといふことに、非常な恐怖を抱いて居り、從がつて此れを防止するために全力を盡して居るのは當然の事と云はなければならぬ。又それだけ和蘭の對獨關係が、切つても切れぬ緣故を持つて居ると云ふ結論になる。

次ぎに軍事的に獨逸と和蘭との關係を一瞥する必要がある。軍事上の目的か

ら言ふも、ライン河の河口は獨逸に取つて甚だ重要である。獨逸が如何に有力なる海軍を所有すると假定するも、實のところ有力な海軍を收容すべき適當な軍港を所有して居ない。獨逸の二大軍港といへば、北海のウイルヘルムスハーフエンと波羅的海のキールとであるが、前者は西方を攻擊するには地位だけは良好なるも、如何にせん人工の小港で、規模が如何にも狹少である。之に反してキール軍港は天然の良港で、海軍の全部を收容するに足るが、惜しい哉地位が東岸に偏在して居て、丁抹の近海及び露西亞の一端を攻擊するに便利なりと云ふだけで、肝腎の英國に對しては二階から目藥の感がある。尤も丁抹の西岸とは運河を以つて連絡しては居るが、有事の場合に六十浬の運河で連絡を取るといふが如きは、行動の機敏を殺ぐこと夥しい。非常なる危機に際會するや、軍事的行動は實に分秒を爭ふものであるのに、獨逸の艦隊がキール運河を通航するために數日を費すやうでは、其間に敵國の海軍は如何なる活動を演ずるかも知れない。露西亞は當分問題とならぬ。だから戰後獨逸の假想敵があるとすれば、此れは何うしても西方に存在するものと考へなければならぬ。故に獨逸にして西方に適當なる根據地を持つにあらざれば、到底西方の敵に當ることは出來ない。然して假りに獨逸の艦隊が、未だ西海に出動せざるに先だつて、敵がライン河口を閉鎖したとするならば獨逸は商業貿易の咽喉を扼せられて、二進も三進も行かない窮狀に陷つて終ふ。

今此れに反して獨逸がラインの河口に二三の根據地を持つと假定するならば、前面に和蘭の碁布する諸島を控え、外敵の攻擊を防禦するには持つて來いの形勝の地である。すなはち貿易と海軍の安全を維持することは容易の業である。又積極的に進んで英國や佛國を攻擊する場合にも、頗る有利なる地の利を得て居る。然して獨逸と和蘭の併合が實現されんか、獨逸は更に東洋や南洋にも根據地或は貯炭所を獲ることが出來る。斯うなると世界の形勢が一變する要素が出來上らうと云ふもの。

更に地圖を披いて一瞥せよ。和蘭に膠する大小五箇の島嶼はアントワープの前面に羅列して、完全にアントワープを閉塞して居る。故を以て獨逸が和蘭を併合すれば、期せずしてアントワープを制することを得、然してアントワープを通じて佛國の東北地方の產業を壓倒することが出來るのである。政治的にはアントワープは無論白耳義のものであるが、天然の地形から觀察すると、白耳義よりも寧ろ和蘭に屬すべきものである。獨逸が和蘭を併合するは、此れやがて白耳義を半

ば縊る所以。また佛國を制することによりて遙かに英國を脅やかす所以である。

また飜つて此れを陸軍の方面から視るも、和蘭が重要なる位置を占めて居ることは疑ふの餘地がない。南北和蘭の諸州殊にユトレヒトは天成の要害であつて此の地に據つて號令する者は、二十四時間を出でずして和蘭の全土を支配することが出來る。アムステルダム商港の如きは、それ自身で立派な要塞を形ち造つて居る。故に獨逸にして和蘭を領有せんか、和蘭全土を堅固なる要塞と化せしめ依つて以つて敵の獨逸本國に殺到するを阻止し得るのみならず、進んで英國及び佛國を攻擊する場合にも、此の上もなき便利なる足溜りである。和蘭が現在の如く中立國である間こそ、佛國は此れを利用して其の獨逸との國境を防禦することが容易であれ、一朝和蘭が獨逸の勢力下に歸するや、すなはち佛國の獨逸に對する防備は支離滅裂となる。此れを支離滅裂たらしめまいとすれば、國を擧げて軍備に熱中しても、或はまだ足らぬと云ふやうな窮狀に陷るかも知れぬ。然うなると佛國は奔命に疲れて、國力は現在よりも更に低下して、三等國四等國となるやうな事はあるまいか。若し然うなつたら夫れこそ佛國の終焉である。併せて英國の斷末魔である。だから英國は斯る場合に於いては、極力ドーヴァー海峽の制海權を維持するに努力するであらうが、併しながら直接歐洲大陸を支配するものは陸軍である。戰後の獨逸が更に復讐戰の爲めに結束するならば、陸軍の勢力は獨逸のものとなるであらう。此れに依つて之を觀れば、和蘭は明かに君府以上の危險區域である。此れすなはち本章の冒頭に於て、歐洲大亂の禍源はボスフォラスの兩岸よりも、寧ろライン河の河口に伏在すと言へる所以。

斯くの如く和蘭を併合することは、獨逸に取つて莫大なる利益を齎らす。戰後の獨逸の行き方は未だ判然と分らないが、國民性が一朝一夕に變更することが出來ないものとすれば、獨逸は舊に倍して領土や利權の擴張を最も熱心に計畫するに相違ない。獨逸から和蘭を見ると、經濟的には全然獨逸の附屬國である。獨逸の商品を運送して、それで金持になつて居るのである。然るに和蘭は其の出口を遮斷して、獨逸の世界的發展に非常な障礙を提供して居る。此れでは獨逸が承知しそうな筈がない。必らずや和蘭をして獨逸に泣き付かしむるやうな手段を取るに相違ない。それは一言にして云へば和蘭の商業を取り上げることである。此の政策はカイゼルの政策であつたが、また恐らく來るべき新獨逸の政策であらう。

和蘭から商業を取り上げるとは、前述べた如くドルトムンド、エムデン運河を利用して、在來和蘭の港を經由して居た商業をエムデンに移すことである。此れに成功すれば無論和蘭は破産に頻するから、自から進んで獨逸に投ずるであらうが併しながらエムデン運河が何らかの理由により十分に其の能力を發揮することが出來ないか、或は其他の事情のために、和蘭から其の商業を奪ふことが出來ないとなれば、獨逸は已むを得ず他の手段に訴へて露骨に和蘭を脅迫するに至るであらう。斯かる場合和蘭は海岸の堤防を決すると、一日を出でずして西北隅からロッテルダムまでを、海上に孤立した島嶼に化することが出來るから安心だと云ふ人もあるが、此の樂觀は全然謬まつて居る。それは何故かと云へば和蘭を海底に沈める肝腎の閘門はムイデンに在つて、此れは獨逸の國境を距る僅々五十餘哩の所であるから、イザと云ふ場合獨逸の發動機船は、驚くべき速力を以て此の閘門を占領するのは明白であるからである。且つ又和蘭に果して此れ程の決心を以つて、獨逸に抵抗する勇氣ありやも頗る疑問である。一七八七年のこと、當時は尙ほ頗る微力であつた普魯西が和蘭に侵入し、アムステルダムを占領せる時すらも、和蘭の抵抗は甚だ微弱で、殆んど死傷者を出さなかつたと云ふ程度であつた。此の

際には無論堤防が決せられたが、水の淺い部分があつた爲め、アムステルダムは孤立することを得ず、普魯西のために占領されて終つたのである。國防の安全は畢竟地理よりも實力である。國を海底に埋めるなどは、抑も末の又末なるものである。和蘭の軍隊が能く國防に堪ゆべきかは、何人も疑はざるを得ない。だから獨逸が暴力に訴へて和蘭を占領しやうとするならば、それは殆んど朝飯前の仕事である。

併しながら暴力に訴へて他國を併合することは、やゝ時代後れの觀がある。また斯るは敗支の償ふべき方法ではない。それは列國が環視の眼を睜はつて居るからである。其の中でも英國などは、矢釜しく云ふものゝ隨一であらう。白耳義と和蘭とは、英國を獨逸から遮斷する大切な障壁である。其の障壁の一つが突如として假想敵たる獨逸の爲めに呑まれて終つては、英國が默つて居る氣遣ひはない。だから武力併合を行ふとすれば、更に歐洲に戰亂が起り、其ドサクサ紛れに然るべき機會を捉へて斷行すると云ふやうな方法を採るにあらざれば、到底其の目的を達することは出來ない。それよりも所謂平和侵入の方が文明的で、何時でも比較的容易に行はれる。すなはち氣を長くしヂリ〳〵と實力を和蘭に張り、斯く

して平和の間に此れを併呑するの方策である。此の種の具體的方法としては、或は關税同盟とか、鐵道同盟とか、貨幣制度の統一とか、種々のものがあるが今後獨逸の採らんとする方法も、恐らく斯の方面に屬するものであらう。

獨逸國内の輿論から批判しても、獨逸が遂に和蘭を併呑せんことは、既定の事實であるかに見える。また和蘭の有力者間でも、和蘭が終に獨逸のために併呑せられるのは、誠に已むを得ざる運命と信じて居る向きもある。

併しながら此處に未知數ながらも一つの大問題がある。それは獨逸の産業貿易が從來驚くべき發達を遂げたのは、主として英國が自由貿易主義を固執することによりて、産業保護主義の獨逸に對して、自國の廣大な海外市場を自由に開放して居た結果である。然るに英國は戰亂より得たる教訓として、まさに保護政策を採り世界に擴布せる大英帝國を經濟的に打つて一丸と爲さんとしつゝある。此の大英帝國の經濟的統一が成立したならば、獨逸の産業貿易も一轉して衰頽に向ふか、或は少なくも從來の如き快速力を以つて進展することが困難となりはしまいかとも思はれる。獨逸が孜々として海軍の擴張を急いだのも、畢竟此の統一を妨げんが爲めに過ぎなかつたが、カイゼルが早まり過ぎた爲めに、對英挑戰は全然

藪蛇に終つた。そこで今假りに獨逸の産業貿易が英國の保護政策の爲めに衰頽するとせば、問題は全然無くなつて終ふ。産業が振はなければ、和蘭を經濟的に窘めることも出來ないし、從がつてエムデン運河に巨資を投ずることも不必要になる。また從がつて和蘭も獨逸の爪牙から免がれることになる。だから要は懸つて獨逸の産業貿易が大に振ふべきや否やに在る。振へば和蘭は危ないと覺悟せなければならぬ。振はざれば安全である。然して獨逸産業の振ふと振はざるとは、主として英國の遣り方如何によりて定まる。此の意味に於いて戰後も矢張り英獨の角逐が繼續さるゝ譯となる。

第十章　波羅的海の將來

從來英國では波羅的海をば餘り重要なものと考へて居なかつた。政府の調査報告なぞも怠慢不備を極めたもので、從がつて議會に於ける演說なぞも孟浪杜撰。肝腎の海軍すらも波羅的海を巡航するといふが如きことは殆んど稀有であつた。況してや一般國民に至つては、波羅的海と言へば恰かもオコツク海か何かのやうな、緣の遠いものとばかり獨りで決めて安心して居た。然るに戰爭の少し前頃に至つて、流石鈍重の英國も幾分か注意を波羅的海に向けるやうになつた。一九〇五年七月英國の艦隊が波羅的海に游戈して機動演習を行なつたなどが、其の顯著なる實例である。然るに獨逸は此れを見て頗る騷ぎ出した。多數の新聞は之を以て英國の獨逸に對する示威運動となし、極端なる論者に至つては、波羅的海は元來公海ではないのだから、關係諸國以外の猥りに出入すべきものにあらずなどゝ主張した。獨り極端論者のみならず、多數の論者は波羅的海は沿岸の諸國すなはち獨逸、露西亞、瑞典及び丁抹四箇國共有の內海であると云ふ議論に雷同し、四國以外の軍艦の出入を禁止すべしとさへ敎圖いた。此れらの言論の背後に獨逸政府

が控へて居たことは無論である。蓋し波羅的海は獨逸に取つて政治的に、經濟的に、更に軍事的に極めて重要なる意義を有して居る湖沼であるからである。就中軍事的には一朝事あるや獨逸は波羅的の制海權を其の手に收めなければ、殆んど坐して死を待つやうな結果に陷るからである。

獨逸の北岸を形成するものは、北海と波羅的海とである。此の兩者は其の中間に橫はり、北方に向つて突出するところの丁抹半島によりて區分せられて居る。瑞典諾威と丁抹との中間にはスカーゲル・ラックとカテガット海とが橫はつて、波羅的海の咽喉を成して居る。スカーゲル海は水幅七十浬で北海に連續し、之を東進すると北緯五十六度で五十浬の狹幅となり、それから南轉すると、すなはちカテガット海で、その南端には丁抹に屬する二大島嶼と無數の小島とが星羅して、一大迷宮を形ち造つて居る。此の迷宮を通過すると、すなはち波羅的海であるが、此の波羅的海の入口ほど、水路の錯雜した海灣は世界に恐らく其の比がない。

此の迷宮を通航するには大體三條の通路がある。中央の最大なるを『大帶』といひ、西方の獨逸に接觸せるを『小帶』といひ、東方の瑞典に接觸せるを『海峽』といふ。然して此の三者はジブラルタルの海峽なぞとは違つて、海峽といはんよりは寧ろ河

流と見るべきものであり、從つて波羅的海は海と云はんよりも寧ろ湖といふに近く、潮流などは更に無く、海水も含鹽量が極めて少量である。

『大帶』と『小帶』とは通航が甚だ困難であるところから、『海峽』は水幅が最も狹いに拘はらず、此れが第一の航路となつて居る。その海岸にはコーペンハーゲンの商港がある。水底は淺く最大の軍艦は通航が出來ない。そこで大艦は已むを得ず、非常なる困難と危險とを忍んで『大帶』又は『小帶』を通航する。併し普通の船舶ならば自由に『海峽』を通航することが出來るから、コーペンハーゲンが良港として商業が繁昌する順序になる。コーペンハーゲンは商港として完全せるのみならず、又最も立派な要塞で、『海峽』の最も狹い部分では丁抹から瑞典まで、普通の野戰銃の彈丸が到達する。だから艦隊が此の海峽に侵入することは、非常に困難である。

以上のスケッチは極めて簡單ではあるが、併し此れだけでも、丁抹が如何に波羅的海の鍵鑰を握り、その咽喉を扼して居るかと云ふことは明瞭に分る。大小兩帶と海峽とに數箇の要塞を築き、且つ此れに水雷を布設すれば、如何に有力なる艦隊と雖も、波羅的海に出入することは出來ない。故に一朝有事の場合波羅的海の制

海權を掌握しやうと思へば、先づ丁抹の屬島を占領することが必要である。波羅的海を中心として一大戰爭の起る場合には、丁抹は局外中立を嚴守するか、若し中立を守らなければ、丁抹は勝敗の決を定むる一種のキャスチング・ヴォートとなる。故に若し第二の世界戰爭が起るか、或は北歐を中心とする大戰爭の起る場合は、丁抹は最も有力なる決定的地位を擁して居ると云ふことになる。

獨逸にはキールとウイルヘルムスハーフエンとの二箇の軍港がある。就中波羅的海に在るキール軍港は天然の良港で、如何なる大艦隊をも收容するに足りる。此れに反して北海のウイルヘルムスハーフエンは人工の小港で、軍艦を收容するためには、絶えず海底を浚渫するの必要がある。從がつて來るべき獨逸の海軍はキールを本位とし、波羅的海に根據を置かざるを得ない。然るに大戰の場合獨逸の活躍舞臺は、何うしても北海を除外することは出來ぬ。波羅的海は無論必要であるが、同時に北海をも度外視することは出來ぬ。獨逸が波羅的海の海軍を北海に出動せしむるに、一々丁抹を迂廻するやうでは、多くの日子を要するのみならず、獨逸は曾て(一八六四年)丁抹を攻擊して以來その怨みを買つて居るから、丁抹の要塞や砲壘の下を通航するのは、餘り感心した事業ではない。そこで獨逸は波羅的